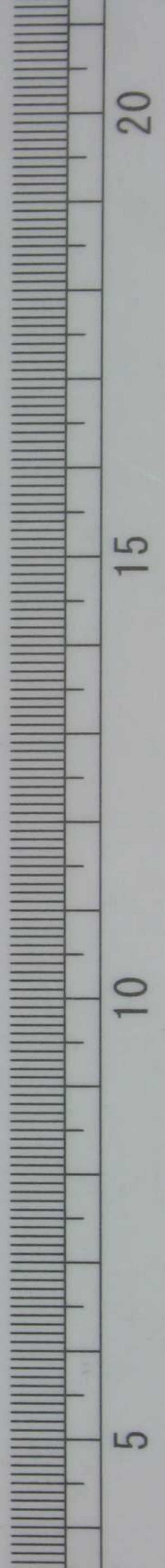




野菊 散文韵文

大和田建樹著

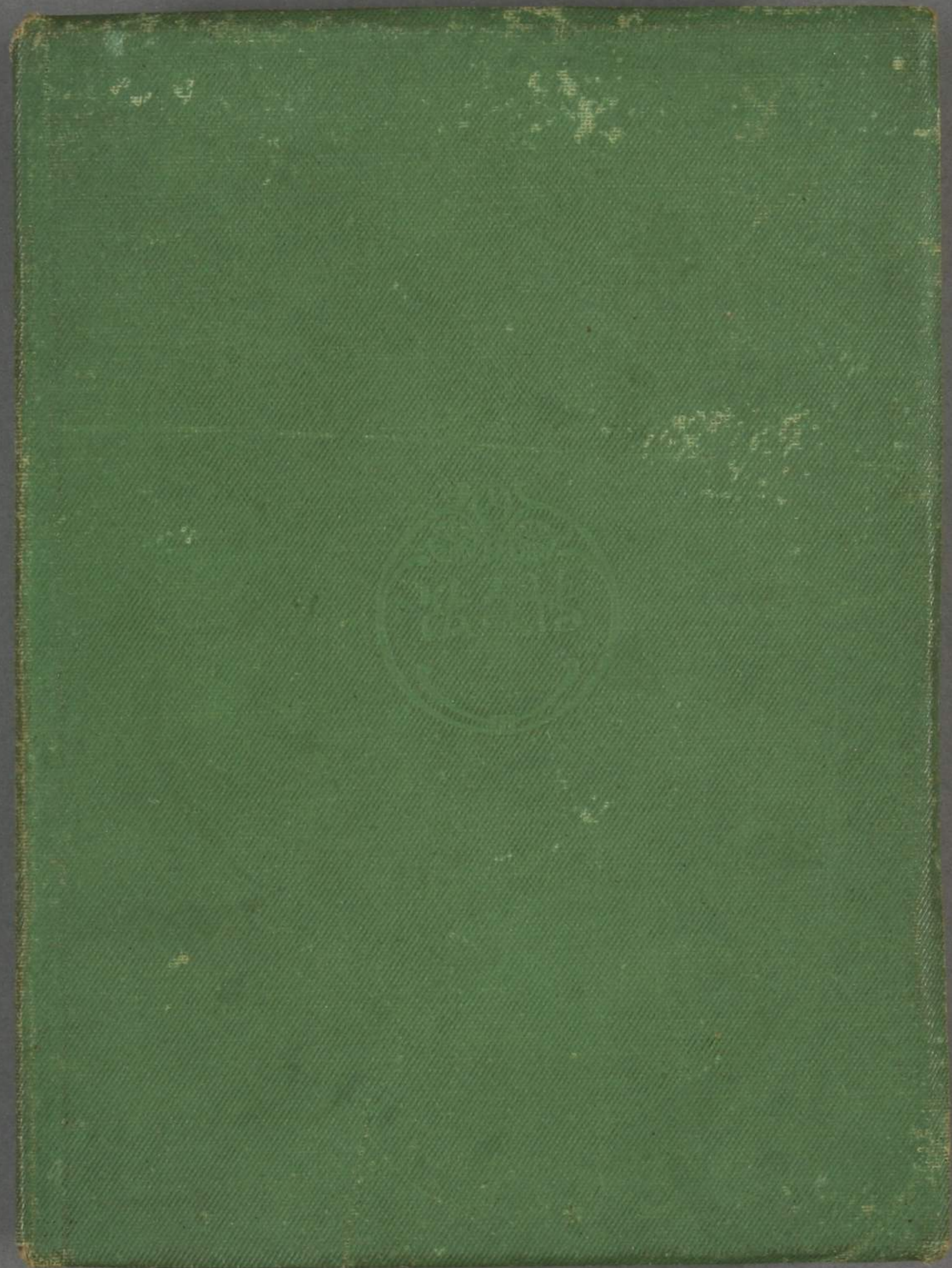


散文野

菊

大和田建樹著







教文  
韻文

聖蘭

大和田建梅書

博文館發行

はしがき

畫を習ふ人あり。わがかきたるものが。展覽會に出でたりとて。日毎に見に行きて樂しむ。其實は人のせしにあらで。わが出品したりしなり。野菊の公にせらるゝを喜ぶ作者。又このたくひなる無からんや。いつまでも子供心の失せぬこそ可笑しけれ。印刷成りて序を書けといふ。之をだにとて一言しるしつ。

曉告ぐる西の三月。春の雪消えて彼岸に入るといふ日。牛込の奥にてたけき。

散文野菊目次

いつまで草

青	菜	……	一頁
後の後の月	……	三	
いてふの葉	……	四	
黄菊一むら	……	五	
豎と横	……	五	
ぬひとり	……	六	
東門跡	……	七	

本郷二丁目……………三五

横 笛……………三七

春 の 雪(上)……………三八

赤城つゝじ……………四一

春 の 雪(下)……………四三

おほろ夜……………四七

鹽 の 山……………四八

遊 行 上 人……………五〇

花 見 月……………五二

大 乘 寺……………六六

松 蟲 寺……………六七

き み 時 雨……………八

観 音 經……………九

さ し 傘……………一〇

夕 日……………一三

大 東 岬……………一四

關 口……………一五

寒 月……………一八

火 事……………一九

霜 柱……………三二

元 日……………三三

二 日……………三三



露の拍手……………一三三

能の大会……………一二四

玉の湯……………一二六

佛手柑……………一二七

二日目の能……………一二九

鐵道めぐり(上)……………一三一

鐵道めぐり(中)……………一二四

鐵道めぐり(下)……………一二七

十六夜櫻……………一二九

そなたの空……………一三〇

花三十日……………一三二

栗田高樹君……………七三

忍音の記……………七五

夏白波……………九三

月の夜汽車……………九六

第二の故郷……………九八

伊豫渡り……………一〇一

ゆくへ何く……………一〇六

十六夜の月……………一〇七

濱の市……………一〇七

思はぬ來賓……………一一〇

紀の路の春

露	.....	二〇六
島	.....	二〇七
湯	.....	二〇九
朝	.....	二一一
舟	.....	二二四
雨	.....	二二九
和歌山に入る	.....	二二〇
城に登る	.....	二二四
紀三井寺に遊ぶ	.....	二二六

日光風

おくれぞめ	.....	一六九
冬の夕暮	.....	一七一
山口氏に宿る	.....	一七一
河狩	.....	一七三
河千鳥	.....	一七九
雨の高尾	.....	一八六
波の枕	.....	一九五
やどり蟹	.....	二〇五
月	.....	二〇五

北 山 里

雪の知立	三〇三
年の夕暮	三〇七
初神樂	三〇八
長篠の懐古	三一〇
新城舟	三二七
岩山の観音	三三二
羽田野文庫	三三三
耶谷寺	三三七
山代の湯	三三〇

根來に行く	二三〇
佛前にて謠ふ	二三八
吹上寺を弔ふ	二四〇
秋の和泉	二四二
夢の水海	二五九
岩つばめ	二六六
師走の月	二九二
うっせ貝	二九二
砂の上の月	二九三
菊の枯葉	二九八

蟋蟀橋の一夜……………三三三

蝸の聲……………三三九

山中の湯……………三四四

跡もどり……………三四五

御取越……………三四七

雨の夷樓……………三四九

雌鳥岩……………三五〇

桂の清水……………三五八

乗合馬車……………三六〇

近江路……………三六一

其日其日……………

栗の花……………

嚴島詣……………三六三

三篠の水(上)……………三六九

三篠の水(下)……………三七一

後樂園……………三七四

吉備津の宮……………三七六

生駒の雨……………三七九

信貴山詣……………三八六

江口の寺……………三九二

神崎川の月……………三九八



目

次終

忘るな草	歌よまん	磯菊	雪中の松
.....	.....	.....	.....
四六九	四七〇	四七二	四七三

我子さゝれ	葛の花	嵐	圓山	瀧の響	山中温泉	人のなさけ	薦の若葉	知多の海	渦巻く水	行く君
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
四四四	四四七	四四八	四五〇	四五二	四五三	四五七	四六一	四六三	四六五	四六七

散文  
韻文  
野菊

大和田建樹著

○いつまで草

青菜

兩國より汽車に乗る。時雨もや來ぬらんと思はるゝ空なり。  
町を出で離るれば。焚火してあたり居る工夫あり。兩手を隠しにさ  
し入れて立てる驛夫あり。見るもの寒げならぬはなし。土手の枯薄

は力なくそよぎ。工場めきたる遠方の烟は。得も立ちのぼらで低く空を這ふ。

ながめさびしき廣田の末に。畑の青菜の心地よげなる。青地の錦ともいふべきか。霜葉二月の花よりも人の歌は。おのれは之を。四月の若葉よりもとぞ譽めまし。

歌人に忘れられたる冬枯の色こそ畑の青菜なりけれ

畑より堀り来て。流れに運ぶ物の中にも。又美しき物を見出でつ。

里川に乙女が洗ふ芋見れば春見し花の桃色にして

山吹の如く黄なる物ところ。都人は知りたれ。薩摩芋の衣にかゝる装のあらん事を。今知りたるも。我ながらをかし。

成田に着きぬ。遂に降らずして止みぬ。

車夫はいふ。お寺の菊の盛は十日ほど前なりしと。(四十年十一月十六日)

### 後の後の月

土屋に教子の家を訪ひて。日暮れて歸らんとするに。いと暗ければ提灯をと言ふ。いな馴れたる道なるをとて。戸をあけて出でたれば。暗夜と思ひしは木蔭の故にて。丸き月こそ大空にあれ。

教子は送らんとて附き來りぬ。新道の並木の櫻は。葉も大方散りて。見上ぐるに妨ぐべき隈もなし。左は山。右はまばらなる人家にて。竹の葉がくれなどに。ともし火の影うすく漏れたり。

何となく後赤壁の賦をよむ心地もするかなといへば。人影地にあり



など。うしろより口ずさむ。陰曆十月の十三夜なるべし。秋は利根川に舟を浮べし事など思ひ出づれど。終列車の出でたるあとなれば。如何はせん。(十七日)

いてふの葉

うしろの山に大いてふあり。つゝら折なる道を。重箱さげて急ぎおりくる丁稚。残菊片手に杖をつきつゝ。休みては登りゆく女隠居など。晝の如く木陰に見やらる。一時雨さつと來りて。黄なる胡蝶は虚空に舞ひ。雨よりも繁き落葉は。雪吹などするやうに亂れ飛ぶ。その中を縫ひ行くは。雨傘二つ持ちたる四十ばかりの女。學校なる子の迎にやあらん。

愛宕の森には日の影さしたり。(十八日)

黄菊一むら

牡丹畑を右に見て。谷の細道半ばおりたる處に。關川僧都の庵あり。黄菊一むら庵の前を咲き埋めて。腰衣したるあるじも花の間をかき分けつゝ歸り。荷を肩にせし豆腐屋も花の間をうねりつゝ來る。こゝに半日を費やして。身は淵明になりたりと笑へば。虎溪を出でて買物にや行かんと。あるじも成田町まで伴ひ來りぬ。(十九日)

豎と横

汽車に日本紳士と西洋婦人と向き合ひて乗り居り。かなたもこなた

も新聞を両手に持ちて讀む。

紳士は首を上より下に。下より上にと絶えず動かす。婦人は視線を左より右に。右より左にと頻りに運ばす。

讀む事がらは如何に。讀みて考ふる事も。なほ豎と横との相違あるにやと。いとをかし。(二十日)

### ぬいとり

同じ畫やうを。いくつもく縫取にする用ありとて。女ども集まりて。針と糸とを紙に明けたる穴のところ。通してはくらし。通してはくらしす。

おのれもして見たくなりて。乙女を見真似に。緑の糸もてこぼれ松

葉を作りたるが。よく出来たるならんと誇り示せば。表はよけれど。裏のきたなさこそと笑はれて。始めて物をするには。舞臺よりも樂屋こそといふ理りをさとりぬ。あなかしこ。清少納言のおもとなに聞かせ給ひそ。(二十三日)

### 東門跡

そゝろありきして菊屋橋を渡る。門跡の門内には。柿蜜柑などの屋臺店出で、賑はしければ。入りて見るに。御堂には善男善女群集して。阿彌陀堂に通ふ廊下を行きかふ中には。牡丹色の紋付花やかに。島田の鬚高くゆひたる乙女など見ゆ。報恩講の參詣なるべし。

いてふの大木。今を限りと染め盡したる木のもとには。子供幾十人

も集まり居て。散り敷きたる錦を蓐に。犬の如く寝ころぶもあり。拾ひては束に作りて。背負ひたる赤兒に持たするもあり。又はかなたこなたに別れて。束にしては投げつけ。束にしては投げつけ。戦争まなぶ童もあり。折しも鐘樓よりごんといふ音ひやく。黄なる葉の降る事。二百三高地の受けたる弾丸よりも繁し。(廿四日)

きみ時雨

山里氏を訪ふ。主人あらず。妻君あらず。門を出で、二町も來らぬに。妻君乳母車を押しつゝ歸るに逢ひぬ。打ちつれて行けば。主人また折よく歸りぬ。

高殿に上れば。庭の梢は半ば紅なるに。木陰の八つ手眞盛にて。暮

るれば闇を破りて雪よりも白しといふなり。

やがて茶も出で。菓子も出でぬ。井形の鉢に。人の數ほどたゞ三つ盛りて出だされたるは。さながら大阪式にて氣に入りたりといへば。妻君はかの地の人にて。されば此お菓子の名も。あちらにてはきみ時雨といひ。こちらにては黄金牡丹と申し侍り。先生は何れの名を愛で給ふぞと問ふ。

お菓子には先づ置き。紅葉の色は京坂ならでは見るべきなしといへば。主人は長く満洲にありたる事とて。鳳凰山の秋色は恐らく世界第一ならんと説く。(廿五日)

観音經

まだ明け果てぬに家を出で、音羽の護國寺まで行く。観音堂には。打ち鳴らす鉦の音して。經よむ聲々。耳もしひなんばかりにて。たふとき腸にしみ渡りぬ。

三條内大臣の墓前のいてふ。高き梢は大方散りて。よその枯木に。山吹色の衣を着せたり。

御堂の勤め終りて天地しづかなり。學寮さして石段を歸りゆく沙彌。數へて見れば五十九人ありき。(廿六日)

### さし傘

から傘といひ。雨傘といひ。日傘といひ。番傘といひ。蛇の目傘といふ。名既に雅なり。

維新になりてまだ蝙蝠傘の行はれざりし頃。日傘を改良して晴雨共に用ひらるゝもの流行し。照降傘と名づけたるが時めきし事あり。求めずして。誰となく呼び習はしたるこそ面白けれ。

春雨しづかに降り出でたるに。竹屋の渡舟を望めば。人は見えずして。傘のみ六つ七つ廣がりたるに。簑着たる船頭ひとり。竿を取る。岩代の郡山にて講義せし日。隣は如寶寺にほうじの寺山なりしが。慕參するにや。蛇の目の傘二つ。杉暗く櫻明らかなる木の間を縫ひて來りし面影。今に目前の幻となりて去りもやらず。

秋雨寒き畔道を。十人以上も傘さしつゝけて行くが。穗に出でたる稻の間に。汽車の窓より眺め渡さる。近くなりて見れば。小學校引けて歸る生徒なりき。

和歌山にありて加茂といふに遊ばんとて出でしは。暑き盛なりしが。長き堤を。黄なる藍なる女傘の。絶間なく行くに逢ひぬ。聞けば紀三井寺の四萬六千日に。參詣しに行く人なりとかや。遠くてながむれば。桔梗の花よりも柚の實よりも。美しところ思ひたれ。筑波山の紅葉見んとて。土浦を出で、間部まなべゆく頃なりしが。菊あまた作りたる垣根のかなたこなたに。張りてまだ油引かぬ番傘の。二十三十おしならべてありたるは。十年近き昔ながらも。記憶に残れり。一嵐來りて空に吹き上げられたらばと。北齋漫畫の滑稽も思ひ出でられたりき。

能にても狂言にても。蟻通の翁の爪折傘さして橋掛を出づると。末廣の太郎冠者の。傘をさすなる春日山と躍り出でたるとは。畫にか

きても趣おのづから湧き出づ。

入相の鐘遠く聞えて。冬の雨寒く暮れんとする頃。軒下に来て打ち拂ふを聞けば。ばさくと音あり。さては雪になりたるかと窓を開けば。客はたゞみたる傘を逆さまに持ちたり。白い物は梅散らしたるばかり。まだ染め残してあり。

人は西洋傘の便利を説けども。から傘の美をば誰も語らず。(廿七日)

夕日

夕日は東京灣の上に落ちたり。光は既に陸を別れて。丸く赤き玉のみ空に残るは。乙女が吹き遊ぶ酸漿ほづきに似たり。

見るく煙の如き遠山の端に。半ば隠れて。今はべにもて色どられ

たる蒲鉾の形になりぬ。

忽にして姿は大方かくれて。小兒の上唇めきたるが。殊に美しき火の色を見せたり。

火の色も早なく。空に一むらの色を残したるは。桃とやいはん石竹とやいはん。櫻よりは濃く。紅葉よりはやゝ薄し。

汽車は今千葉に近づかんとす。軍人窓よりながめて。美しいなと言す。(三十日)

### 大東岬

一時過ぎて大東に着きぬ。停車場の立札を讀めば。大東岬まで二十町とあり。七年前に遊びし時は。九十九里の濱づたひに來て。長者

町に歸りたれば。けふの道とは違ひたり。されば男に問ひ女に問ひ。しばし尋ねても又分らずなりたれば。向よりくる法師に問ふに。此細道を何くまでも行けと教ふ。

されども其細道も。右に分れ左に分れて。迷ふ心も一方ならず。行末を見れば。右の方には松原ありて海近く。左の方には小山ありて二つ重なりたれば。其間を行くべしと。心に問ひ心に答へて。進みし一路は。遂に泥田の真中に來りて中絶えたり。

さらでだに足踏み込まんとしては。ステッキを力に。よろめきく來りし道の。向へ渡らんには。四尺ばかりの水を飛び越えねばならず。平地ならば。四尺や五尺は飛ばるべけれど。前後左右みな泥田なるを如何にせん。足袋をぬぎて徒歩わたりせんにも。すねまで位

ははまりそふなり。  
 あとは遙になりたれば。歸らんも口惜し。さりとしてたゞすみ居ても  
 あられねば。左に行きては又道を失ひ。右に折れては又行きとまり。  
 問はんには人なく。進まんには翼なし。  
 とかくする間に。右の足をば畔より下にすべらしたり。抜かんとす  
 るに泥深くして中々抜かれず。外套はよごれ兩手はよごれ。力盡き  
 て暫しは起きも上られざりしが。辛うじて泥足引き抜き。田川の流  
 れに足袋を洗ひて素足となり。今は遠さも問はれずして。又もとの  
 道に取つて歸しぬ。此間あとにて思へば。一時間ばかりもや費しつ  
 らん。

之にこりたれば。此度は更に委しく尋ねく／＼て。太平洋の海見出だ

したる時の心地は。泥田の恨みも忘れ果てたり。數丈立ちたる鷺の背  
 めきたる岩あり。これを圍みて打ち寄する響は。雷よりも凄きに。怒  
 り狂ふ波打際には。棚をかけ橋を渡して。其上にあがりつゝ魚をねら  
 ひをる人など見ゆ。うしろに山ありて松青く。前には白き帆影の二  
 つ浮びて。千里の眺望。亞米利加までもほの見ゆるやうなり。  
 眼に覚えある大東岬はこゝなりと思へど。見知りたる大東館は影も  
 なし。處やたがひたると。あたり見めぐらすに。館の窓より居なが  
 らながめし岡の半腹に祠ありて。つはぶきの青葉もて圍まれたりと  
 思ひしが。それはなけれど。岡のみは依然たるに。汐湯を立てゝと頼  
 みたれば。おちよといふ十四五のかはゆき娘が。桶を兩手に引き下  
 げつゝ。かひぐしく下り上りして。妻君と共に汲みくれたる。磯

の隠れの汐たまりは其まゝにて。岸さしのぞきし野菊の花さへ。昔の風に打ち靡く。

折しも來かゝる獵師に問へば。大東館は三四年前になくなりたれど。大平館といふが其かほりに出來たり。是はたいした物なりと褒む。

それは何くぞと問へば。山一つ越したる向なりとて懇に教へつ。

枯草さむけき磯の廣野は。磯菊の花もて飾られ。處々に松虫草の紫もまじりたれば。摘みつゝ行くも樂しみなり。あはれかざすべき乙女もがなと。いへども答へぬ董の歸り咲さへ。一花見出でつ。

思ひの外に嶮しき山越をすれば。かの太平館は。夢ならずして。二階つきの大建物を前に見せたり。

入りて音なへば。染模様ある着物を羽おりし男出で。お上りなさ

れといふ。泊るにはあらず。酒と飯とが欲しきなりといへば。肴は何もなく。酒はあれども地のなれば。旦那には飲めますまいといふ。それにてよしとて階子を登れば。雨戸を明けて。一番の室に案内しくれぬ。

こゝより見渡す太平洋。日はやうく西になりて。波の色えもいはれず。渚に魚とる人は見えねど。磯に漁夫の集まれるなど。冬の漁村は晝にもなるべし。

さてよごれたる足袋洗はせんとて。女中は居らずやと問へば。固い女を置きたいと思うて捜し居れども。まだ見當らぬといふ。夏は客にて明間なけれど。冬は一人も見えぬといふにて思へば。盛の頃は女氣ありて。冬枯には土地の獵師があづかり居ると見えたり。男は



まだ外に二人ほどありて。庖刀を取り竈を焚きつけなどするさまなり。

はからずも釣などに行きたる心地して。船頭料理を振舞はるゝよと思ひの外。先づ菓子鉢には煎餅出で。蒔繪の盆には銀の茶びんも乗りて出でつ。

やがて膳來り。かの裾模様の男は。松の皮に毛生ひたらん如き手して。酒つぎくれぬ。さるにても此海原を池としながら。白髪昆布と花麩のあつものに。するめの煮附。玉子の薄焼。さながら山中の猷立なるこそ面白けれ。

廣き海に舟一つあり廣き家に人ひとりあり冬の夕ぐれ

此家は間數五六十も下らざらん。廊下の長さも。上下あるかば一町

もやとぞ思はるゝ。

歸りの終列車は六時半なれば。それに間に合はさんとてこゝを出づ。少し行きしに。追ひかけ來りて。御忘物がとさし出すを見れば。摘みあつめたる磯菊の。ハンカチーフに包まれたるなりき。

汐風に靡く磯菊忘られて物おもへとは誰か教へし

堤灯をといひつれど。何わかるべしとて。浦に友よぶ鳥の足しつゝ。謠口ずさびながら四五町も來りしが。日は暮れ果てゝ。分れ道ある處に出でぬ。

晝の失敗にこりたれば。一軒屋見つけて。道尋ねんと立ち入るに。犬に吠えたてられて進むを得ず。折しも來かゝる家あるじは。深切に二三町しるべして。堂のある處より左に曲り給へと教ふ。行き

行きて堂はくくと氣をつくれど。森のみありて御あかしもなきにや。何くとも知られず。

薄明りの藪陰よりさしたれば。又立ち寄りて問ふに。此度も二三町来て。是より眞直に行き給へ。停車場の明りが見ゆべしといふ。これに力を得て。明りくくと向ふをのみ見つゝ行けば。一つの燈見えつ。嬉しやと思へば。左にも見ゆ。右にも見ゆ。何れが誠のにや尋ねん人なし。一つ目當を誤りなば。末は扇のやうに廣がるべし。まづ眞直にと。心を師として行けば。明りは三つとも失せたり。狐になど昔の人のいひしは。かゝる折節ならん。仰げば星は空を満たして。田中の水に銀鋌打てども。足もと照らず螢にも及ばぬつらさは。訴へ申すべき地藏尊だにおはさず。

遠くより來る汽笛の響は。わが乗らんとする終列車なるべしと。氣をあせれども。暗さは暗し道はわるし。又もや泥田に落ち入らんと。たどりかねては暫しイむ。響はいよくと近くなりて。又遠ざかるかと思へば。更に又近づき來る。かゝる折には。波の聲まで人にかからふもいと憎し。

もはや問はんに家もなければ。困じゐたるに。木深き森の中より出で來る男あり。いと懇ろに。此森をつきあたりて左に行くべし。橋あらん。それを渡り給は。一筋の道はまぎるべくもあらずといふ。今夜の境遇。地藏尊よりもいと嬉しくて禮を述べ。別れて森をつきあたれば。又道のなき處に出でぬ。引き返して左へとたどれば。畔道は末細くして。足の幅よりも狭くなりぬ。流星はしりて夜は静な

り。野宿せんにも辻堂だにあらず。

せんかたつきて跡戻りし。かの家を敲きて案内してくれずやといへば。快くうべなひて少しお待ちなされよといふ。汽車に急ぐをといへば。へい〜と答へて。蠟燭取り出だし。いとゆるやかに火をともしぬ。召使にやあらん三十前後の女。提灯には大東村役場と。筆太にこそしるされたれ。

導かれて行けば。森のつきあたりも橋ある道も。わが解釋は誤りゐて。今ぞ明らかになりける。されど停車場までの遠かりしは。一里もやと思はれたり。

恩人は踏切まで来て歸りぬ。間に合はじと斷念したりし終列車は。まだ五分間をあまして。来てだにあらず。あゝ神に謝す。始めて歌よ

まん心も起りぬ。

こゝに來て始めて知りぬ別れてしあとおふ波の夕暮のこゑ

乗る人わが外に二人のみ。

大方は居眠りつゝけて。星の光を水にながめつゝ一の宮川を渡る時と。英語さへづる書生七八人。大綱にて乗り込み來りし時との外は。おぼろ〜と打ち過ぎぬ。

千葉に着きたるは十時半。もはや成田行なければ。梅松といふ家に宿りぬ。(十二月一日)

關 口

神田川の川上。目白臺の麓。井關にせかれて瀧をなし。引かれては

大算をつたひゆく處を。關口といふ。わが家より十町たらずの道なれば。日毎のやうにそゝろありきを。此堤にこゝろむ。  
 春は土筆を摘み。莖をつみ。長き日ぐらしあくがれ行けば。紫いろこき藤のしなひの。水の上まで垂れたるが。思はぬ方より見出でられたる。龜井戸の天神にと。思ひ立ちたる心も失せぬ。

夏は日ぐらし鳴きて涼しき夕べ。日影は榎の梢を去りて。やゝくらくなる山陰に。白き花こそ。星かと見えて咲き出でたれ。烏瓜にやと。伴ひたる乙女は言ひき。

秋は駒塚橋のたもとに。葛の花あかく。やうく梢の色づく頃は。青葉の木の間に。躑躅よりも紅なるが。前なる瀧川の清きと映じて。晴れゆく霧の間を染め渡しつゝ。こゝにかしこにながめやらるゝ。

小嵐山とも私にや名づけまし。たゞ瀧の川あるを知りて。此關の川あるを知らざる。都の人こそいぶかしけれ。

冬は雪ふるあした。まづ此あたりにと志して來れば。緑のこらぬ汀の枯蘆。鶯鳥の毛の如く散りくる物に埋もれて。何がし男爵別荘の松もおもしろきに。早稻田の方より女子大學の生徒の。紫の頭巾にふりかゝる花を。打ち拂ひくたどり來るまで。畫中の物ならぬはなし。

昨日も遊びつ。今日も遊びつ。遊ぶがまゝに。よしと思ふ心のまさりゆくは。我のみにやあらずや。松島は遠きが故に愛せらると。人は言ひしを。關口は近きが故になつかしと。我は言ふなり。(三日)

## 寒 月

人を訪ひて。夜神田橋外の旅館を出づ。寒月天にあり。枯木の林けぶりわたりて。川上にかゝれる舟。何となく寒山寺の鐘聲を想像せしむ。

電車に乗らんとて。獨り停留所に立ち居れば。六十あまりの女隠居。また同じく來りて待つ。

電車來らず。かれ一言話し。われ一言話し。寒さのきびしき事より始まりて。月のよき事に及ぶ。あたり靜にて浮れ鳥も啼かず。

打ち乗りてお茶の水橋を渡る。窓より見れば。聖堂前の電燈。さながら森をかざる螢か見え。月はます／＼霜の如し。

神樂坂下にておりて。寺町を過ぐ。勸工場の賣出しありて。馬鹿囃

子の音。大福引としるせる旗の林の奥より漏れ出づ。月は何くぞ。

年の市ならねば。買ひたしと思ふ梅の植木は。まだ出てあらず。(十八日)

## 火 事

風くるひ砂烟空に滿つ。

火あり小笠原伯爵の邸なりといひて。人は水野の原の方へと走る。

邸の門前には。早くもポンプ一臺ひかへ居て。之を圍みつゝ群集せる人々。たやすく押し分くべくもあらず。烟はさかんに煉瓦の家より出でゝ。森を埋め。庭を埋め。人を埋めて。さながら霧の如く靄の如し。

風いよ／＼荒れて。冬木立東西に靡き。煙うるしの如く立つよと見るまに。紅なる焰は舌を吐きつゝ天を嘗めんとす。兵士は隊を組みつゝ入りて。手にあたるまゝに。家の具ども持ち出だしては。何くにか運びゆくさま。畑のあひだに見ゆ。火は不動尊のそびらの如く。または地獄の罪人迎へに來るてふ火の車の如く。左を焼きては右に移り。高くあがりては又低くなる。その間に射上げらるゝ水。瀧を逆しまに流し。ある時は氷柱を立てたるやうにも見らる。

されども門前の家々。皆寂として物持ち出だす騒ぎもせざるは。邸の獨立してあたり廣きと。石造家屋の火の粉を散らす恐なきとによるか。群集は軒の下に立ちて見て居たりしに。誰やらん屋根に上りて桶の水をまきたり。不意の事とて。ぬれ鼠となりたる。幾十人かありつらん。

茶色の烟。紅なる焰。更にかはる／＼威を逞しうして。多年の榮花を瞬間の夢たらしめんとする。そも何の恨みぞや。(二十一日)

霜 柱

霜深き朝。關口の土手を逍遙す。

水は温泉の流れの如く。白き煙を吹き立てつゝ來るかなたの岸には。此程まで美しき色して木の枝にかゝりたる烏瓜の實も。枯れ落ちたるにや大方は残らず。たゞ春秋の知らざる花のみ。笹の青葉を埋め。芦の枯葉を埋めて。神のたくみか。冬をも見捨てざるを感謝せ

しむ。

ふと見る田の中に立てる電燈會社の硝子戸。眼を射るばかりの火にて燃え出だせり。ふりかへり見れば。雪の如く白き屋根と屋根との間に。いまだ熱なく燐なき紅の鏡はさしのぼりぬ。

わが行く方には。月なほ氷のやうに残り居て。駒塚橋を渡りくる馬方。鼻唄うたふ口よりも。煙草ならぬ煙ぞたちのぼる。(二十三日)

元 日

女子三人。十三と十一と八つなるが。昨日せいぼとて與へたるリポンを。下げたる髪に掛けて。うしろを見せつゝ出でゝ行く。嬉しさ如何ならん。

學校にゆく子を見送り果てゝ。父は産土の神に初詣です。杖を力にくる翁あり。酔ひたる顔赤らかにくる男あり。去年のお禮や申すらん。今年の福をや祈るらん。何れにしてもいとめでたし。

江戸川橋より此程開通したる電車の乗初をなす。カーキ色の軍服に劍を帯びたる將校は。毘沙門の如く。縞の羽織に腹便々たる斑白の老人は。布袋の如く。鹿こそなけれ壽老人めきたるもあれば。琵琶こそ持たね。辨財天にも比しつべき庇髪の美人あり。昔の七福神は船なれど。今は電車の乗合に見る世のさまかなと。獨りほゝるまゝるゝ程に飯田橋に來りぬ。(四十一年一月一日)

二 日

代々木の大島氏を訪ふ。北海道より移り住まれたる後。始めてなればいとなつかしきに。女中まで其まゝなれば。札幌に來ぬる心地もするかなと。打ち笑ふ程に。出でくる膳には。鮭の鹽引あり。鈴子の糟漬あり。見渡す庭に雪のなきこそ不思議なれといへば。そはともかくも。札幌以來聞かざりし謠をとて。あるじは小鼓もちいだす。こゝに令嬢二人あり。一人は此家にて一人は米倉氏のなるが。かの半年消えぬ雪の中にて。おのが教へたりし仕舞をと勸むれば。大かたは忘れ侍りといふく。扇を持ちて立ちたり。小袖曾我もありき。猩々もありき。いよく津輕海峽のかなたにあるやうなりと喜び。ビールの爛をせぬのみが東京なりと。あるじも打ち興せらる。

(二月二日)

### 本郷二丁目

壹岐殿坂を上りて見れば。本郷二丁目の角はいつ焼けたるにか。黒焦の柱のみ残れるが。わづかに立ちたり。その焼野の原にいてふの木あり。此木の下に萩野といふ下宿屋ありて。明治十二三年の頃。おのが東京に出でたるやがて。身を置きたりしが。一夜隣の學校に火起りて。殆んど半焼ばかりの目に逢ひたる事ありき。それより後の二度目の火事ならんなど思ひ出づれば。はや三十年近くの昔となりぬ。今まで依然と萩野なりしや下宿屋なりしや。表より少し入り込みたれば。道ゆく折にも心づかでこそ打ち過ぎぬれ。

時は二月なりしか。いと寒き頃なりしと覺ゆ。少し風心地にて宵よ



り床に入り。新文詩といふ詩集を読み居たりしに。窓のあなたに火事／＼と叫ぶ聲す。起くる間もなく。はや障子には眞ッ赤にうつりぬ。すは事よとて釘に掛けたる着物残らず寝巻の上に重ね。大切な草稿手紙を一つの革文庫に納め。何とはなしに表に出づれば。門前の騒ぎは一方ならず。同じ下宿屋の人々は。出つ入りつして手あたるまゝに物を持ち出だしなど。かひ／＼しく働けど。馴れぬおのれは只まご／＼するのみ。あとにて思へばいと恥かし。

辛うじて火は鎮まり。こなたには移らずして濟みつるが。家は土足も踏み荒らされ。おのが戸棚の夜具さへ。打ち捨ておきしに。誰が出だしくれしか入りてあらねば。歸りて寝るべき處もなく。主客打ちまじりて二十人ばかり。二三枚の蒲團を炬燵のやうにして。足さしの

べつ、夜を明かしたりしは。あはれきのふけふの心地もするに。同宿の人々は。大かた醫者にならんとする學生なりしが。その後醫學士にして病院長となりし人を耳にせしのみにて。火事の夜に同じ串の目ざしを半ば分ちたる何がし。焼芋の阿彌陀に講中となりて。頭かく／＼買ひに行きたるくれがし。今は何くに昔を思ひ出づらん。問へど答へぬは只かのいてふの木のみ。(一月四日)

## 横 笛

成田にとまりて。明方寒く目を覺ましたるに。何やらん耳にひやく。汽車にもあらず。按摩も今頃は行くまじきにと。心をすまして聞き居れば。やう／＼近くなりて。横笛の音とこそ分りたれ。

さるにてもあるじは誰ぞ。新勝寺の樂人が寒稽古などするにや。旅人の寢覺のすさびにてもあるべきか。まがひもあらぬ越天樂の曲。手にとる如く近くになりぬ。

笛竹の音もわなゝきて聞ゆるは月の夜霜やいくへおくらん末をば吹き残して。何方に行きし。神か佛か天つ乙女か。折から處からにや。拙なくはあらず聞き取られしを。犬の聲ならでは再び響かず。(一月十二日)

### 春の雪 (上)

春の雪降りぬ。

地上に畫かく二の字の跡を。惜しむく門を出で、電車に乗らん

と。江戸川さして行く。

十三四の娘。骨一つ折れたる傘を頼みに。辨當わきばさみつゝ。向より来る。印刷所などに通ふなるべし。搔きも上げざる髪の毛といはず。綿うすき羽織といはず。落花紛々たり。

豆腐屋ある家に荷をおろしぬ。少し破れたる菅笠に。綿の如き雪はつもりて。富士の形を作れり。

豆腐賣る翁の老も隠れけり雪の花笠花やかにして

八百屋今しも店を開きて。牛蒡にんじん芹せんまいと並べもてゆくに。見るく白い物は散り來りて。赤き色をも青き色をもまだらになしぬ。

新聞配達夫來りて道の真中に立ちどまり。朝日としるせる合羽の袖

の雪を。打ち拂ひくす。さらでだに鉢の木口ずさまるゝ景色なるを。

電車は出でたり。河岸の枯木は悉く花なるに。不思議や猶も枝なき空より落ち來てはとまる。

道普請すとして砂利あまた積み置きたる處あり。こは面白しとや。眞白に塗りがくして盆石の景を作りぬ。

富士の嶺に登りて見れば雪白き箱根足柄目の下にして

九段の坂下を過ぐれば。堀のほとりの柳。やうく小降りになりたる雪に靡きて。風なきにそよくとゆるゝも興あり。地上にはもはや落ちてもたまらず。

もえそめし柳の枝に降り來てはみどりに消ゆる春の雪かな

今日一日だにと思へど。勢のにぶりたるは。晴れんとするにやと。いと口惜し。(三月四日)

### 赤城つゝじ

一月野州の小山に遊びつる歸るさ。赤城山の躑躅の大枝あまた得させしかば。同行の大森大槻二氏と三人にて之を三分し。花は白と薄紅と紫とがあるといへば。咲き出でたらん後。互に其色を交換せんなどと契りて別れつるが。早く花にして見んとの心は誰も變らじと見え。逢ふ度毎に。御許なるはまだ咲かずやと。問ひ合ふを樂しみとせり。三月も八日になりぬ。大槻氏を訪ひたれば。日當りよき椽側に置かれたる瓶の一枝。あな妬まし。紅筆の穂先ばかりの蕾を見せしは。

先んせられたる哉といへば。いや大森氏のは此程持て来て見せしが。二三輪は早さきたりとぞ語らるゝ。

さて如何にしてと問へば。大森氏のは時々水より出だして。枝のもとをはずにきりては瓶にさし。主人みづから庭の日なたに持ち行きなどして怠らず。大槻氏は本を切る事はせざれど。寒き日には厨の焼火のそばに。暖き日には是も日なたに出だして。主人と妻君として手を盡されたりとぞ。

女の童を其かゝりとして。主人居ながら世話を焼きたる我家のつゝじの。世におくれ春にまだ得あはぬこそ理り。花もし心あらば。神はみづから働く人にもみ助を與ふとやいふらんと。いと恥かしくて。(三月八日)

### 春の雪 (下)

三月十日は母上の御忌日なれば。御墓詣でせんとて家を出づ。折しも降り出でたる雪は見る／＼積りて。真綿かけざる木々もなし。薬王寺前の通りを行くに。思はぬ事とて傘も持たぬ女生徒。二人三人急ぎくるに逢ひぬ。

もの學び終へて歸りくる乙女子の前髪しろく雪の花ちる  
四谷より電車に乗る。入りきたる十七八の美人。半ば亂れたる島田の髷を。是もまだらに染めたり。薬とりの歸るさと見ゆ。

次には軍人。眞白になりたる帽子を打ち拂ひ／＼かぶり直す。満洲軍の寫生畫を見る心地もするかな。

練兵場の原は満目一白。たゞ此廣きながめの中に。鷺など三つ四つ

おりゐる如く。雪踏み分けてゆく人見ゆ。袖打ち拂ふ陰もなきにとあはれなり。

蛇が池を経て。三聯隊營所の前を行く。見上げられたる青山の墓原。しるしの石の大きな小さき。皆一つ色に胡粉彩色のせられたる中に。骨あらはれたる提灯の。雪吹の風にあをられ居るこそ。身にしてみたれ。

墓地下よりおりて。畝傍艦沈没の記念碑の傍を上る。我外にはまだ跡つけたる人も見えず。

こまやかに降りつむ松の白雪を花と見し世も君はありしをなど口ずさめど。石のあるじは返しもせず。

母上のは殊に淋しげに立たせ給へり。ふるき猫柳を抜き捨て、蓄

あまた持ちたる沈丁花の枝をさしかふるに。早くも着せ綿は掩はれたり。

手折りつる花も面なし柳葉にゆふしでかくる春のあは雪

さゝれの墓にも同じ手向けす。

思ひ出づる袂もぬれぬ諸共に去年はながめし庭の白雪

再び電車に乗らんとするに。待てどもくかなたへ行くのは來らずして。こなたへ來るのばかり引き續き來る。誰がしわざやらん。雪の吹きつけられたるうしろの板に。四谷といふ二大文字を。筆太に。いな指太に書きたるがありしを。同じく待ち合はせぬたる京都詞の婦人。あれよくと興ありげに笑ふ。

此車やがて通は、東山雪の大文字見に行かましを

などや語りあふらん。

赤坂見附に来れば。辨慶橋を渡りくる女生徒三人あり。傾け持ちたる蛇の目のから傘。一人は赤く一人は青きが。雪にはえたる美しさ。土手の並木の花盛なるを。見渡してたゞずむなるべし。ぎぼしの上には。おりゐる鳥をも見出だしぬ。

本所に行きて安田氏に至れば。小さき令嬢。先生の雪の御歌はと問ふ。

郵便の函も降りくる白雪の帽子かぶりてたゞずめる哉

あなたならかうでせうといへば。是れからもつとよいのを考へる處ですよと答へぬ。

庭の石燈籠。はや肥満してひとり暖かけなり。(三月十日)

### おぼろ夜

夕汽車千葉を過ぐ。月おぼろにて梅白く。遠村のともし火。うすものゝ帳をとほりて紅なり。

ふと海氣館に宿りし昔おもひ出でられて。稻毛に下車す。わが外には改札口を出づる人もなし。車夫ひとり待ち居て。お召しなさらぬかといふ。

今宵は養生館をさして急がす。八九町もあるべし。松林ある岡を右に見て館の門を入れれば。寂として小夜ふけたるが如し。

主婦出で迎へ。十八九の女先に立ちて。長き廊下を道しるべす。その女の丈の高さ。おのが肩よりは三寸も越えたり。連ねられゆく小君はなりいと小さからぬに。驚かるゝ民部のおもとの丈だちかな。

奥の二階に座は定まりて。月見に来れるよといへば。女は雨戸を明けてもてなす。松の間より東京灣しろく見えたり。汐湯をあみて座敷に歸れば。風の音何くにか聞えて。須磨の旅寐も遠からぬ心地するに。笑みて入りくる月影。いよ／＼なつかし。いでや波打際まで散歩をと思ふ程に。夕けの膳運びくる足音。早くも階子段の下に聞ゆ。(三月十五日)

## 鹽の山

何がし令嬢を訪へば。机の上に葉書の五ひら六ひら書のかきたるが置きてあり。書を習はれたりとは聞きたれど。まだ見ざりしを手に取れば。そは私のに侍らずとて奪ひ返さんとす。藤の花、てつ

せん。書物ひらきをる美人など。何れも美し。

人めなき芦の葉陰にかくれてもなか／＼しろし鳴の羽ねがき見しも始めてなれど。聲きくも始めてなれば。琴の音一つと望むに。母君かたはらより。久しくおさらへせざれば。塵拂ふもよからんと勧めらる。されど君は心すまぬさまなり。

世につゝむ常陸の宮の琴の音もそゝのかしては聞きつる物を辛うじて始まりぬ。八千代と祝ひ納めたる爪音。いつまでも忘れぬ紀念なるべし。

鹽の山さしいづる月のさやかなる君が調べは今日ぞ聞きつる面白く暮らして暇を告ぐれば。夕風暖かに袖を拂ふ。(三月十七日)

## 遊行上人

汽車我孫子に着く。十人あまりの僧侶一行とや／＼と乗り込みたり。わが室に入り来るは四人。あわてたりと見え。誰のとも知らぬカバンを持ち込み。氣が附きて驛夫に渡すなど。大さわぎなり。いざ蜜柑をと價を出だすに。車はや動き始めて遂に買はれず。是にても一同大笑となるなど。淋しかりし室内俄に陽氣になりぬ。

萌黄の法服に鼠色の被布おほひたるは。五十ばかりにや。聲低く言葉も多からねど。さも樂しげに何やらん語りては。趣味ふかきはゝるみを漏らす。

その隣なる鼠色の法服に輪袈裟かけたるは。四十前後なるべし。陽氣の原動力にて。笑ふにも語るにも鉦打つやうなる聲を放ち。身を

横にし豎にして。愉快を極めたる面もちなり。

黒のコートに頭巾したるは。此地方の住持にて。案内のため同車せしにや。着く驛毎に地理を説く事懇ろなり。こゝこそ安食あじきよといへば。かの鼠の衣。傳へ聞く宿屋の安きはこゝなるよといふに。今一人のちと若きが。さうですかとまじめにあしらふ。安食の文字を見給へとて。又大笑となる。

松崎まんざきにておりたり。一等室より出づるは八十にもやと思はるゝ老僧。かたへより手を取りて助け行くに。前後左右。あるひはケツトを肩にし。あるひは風呂敷包を携へ。香箱めきたる物を捧ぐるもありて。さながら生如來の來迎に似て。威儀おごそかに改札口に向ふ。紫衣の一僧ブラットホームに迎へ。村の老若柵の外に人垣きづ



きて拜みに来て居り。

あとにて聞けば。藤澤の遊行上人の。地方巡廻なりしとぞ。(三月二十日)

### 花見月

その一

雨中隆慶橋を渡る。堤の柳糸長く垂れて。枝さしかはす櫻。苔小豆の飯に炊きたるよりも大きく赤らみたり。

今日よりは雨も梢の色に出で、けふるか花の江戸川の水  
上野より汽車に乗る。見上げつゝ行く崖の上なるは。まだ咲きてあ  
らず。

歸るさは花になりなんふくれにし苔に春の雨ぞかゝれる

日暮里きたる。菜の花やうく美し。

日ぐらしの里の名聞けば花に来て誰も心や急がざるらん  
南千住過ぎて大川を渡る。

幌かけし車繪になる景色にて春雨かすむ千住大橋

乗合はおのれともに四人。中の三人は我孫子にておりたれば。室内  
寂たり。此あたりは花や如何にながめ出だす頃。喫茶室のボーイ  
茶を持ちてきたる。(四月四日)

その二

安食あじきの竹村旅館にとまる。新聞を見れば上野の花は三四分咲きぬ  
とあり。

訪ひくる里人に。此近くにて花見るは何くならんと問へば。第一は香取神宮の櫻の馬場なるべく。つゞきては佐原の諏訪神社。成田不動のお山なるも漏らされじと語る。我孫子より乗り替へて常陸に行けば。關の櫻といふがよろしきよし聞きぬと。いふ人もあり。(五日)

## その三

降りつゞきたる雨はれぬ。ふと見出だすに。前なる鷺神社の石段の右手に。薄紅なる梢見ゆるやうなり。あれは櫻ならずやといへば。女の童欄干際に立ち出で。花なるべしと答ふ。いざ見に行かんとて立ち出づれば。女の童もしるべせんとして従ひ來る。女坂ともいふべき坂をのぼるに。よそ目に見しよりも花の木多

く。雨のなさを集めて。笑まひ新しくこぼしそめたり。

神の名の鳥の翼に掩はれて嵐もしらぬ花咲きにけり

お寺の櫻もよからんといへば。行きて見る。大乘寺といへり。鐘撞堂一つ残れるのみにて。本堂も何も退轉せしまゝ、まだ立たぬといふ廣庭に。老木の枝垂一もとあり。されどこれは色めきてだにあらず。

(六日)

## その四

上り汽車に乗りて長門の鐵橋を渡る。左は印旛の沼青く。右には利根の川しろし。藁屋の軒に桃あり。土手のこなたに菜種あり。筑波山ふかく霞まで。天の一方に見ゆ。

小林のあたりは堤防の工事中とて。十人あまりの女打ち揃ひて土な

ど運ぶ。中に紅の帯したるが三四人まじれるは。青葉の中の椿にも似たり。

我孫子に花あり。馬橋まはしに花あり。柏に花あり。松戸なる神社の梢は。殊に多く紐ときゐて。天までやうく酔はしめんとす。

金町の停車場なるは六七分の盛なりき。されども柴又帝釋の御縁日ならねば。おるゝ人もなくして花のかげいと淋し。

荒川堤なるもぽつ／＼咲きたり。いにし月の廿日こゝを過ぎて。

廿日ばかり立たば花にもなりぬべき荒川づゝみ春の雨降ると口ずさみしが。豫言の的のはづれざりし心地す。

千住の大川渡れば。今しも煙吐き立て、下りゆく舟見ゆ。客多くつみたるは。人の心の皆墨田へと向ふを知るべし。

南千住を出づれば。線路の傍に籠打ち置きて。餅草摘み居る女ども五六人あり。

時々草のほひもまじり来て窓あたゝかに春風ぞ吹く

上野の廣小路を行くに。六番の阿彌陀まつれる常樂院に花あり。一もとなれども半ば咲きたり。

九つの品より外に咲きそはる花の浄土も春めきにけり

電車にて歸る道すがら。遙に大學病院の花を見。九段下の花を見。國學院の花を見つ。江戸川も賑ふ頃とはなりにけり。

家に歸れば。櫻餅を籠より出だして女の童茶をすゝむ。人のおくりし長命寺の土産なりといふ。(七日)

朝疾く出で、江戸川より電車に乗る。

花見つゝ行かんと思ひし硝子戸の曇りてにくき春の雨かな  
春雨にぬれたる花の中の橋女生徒ひとり傘さして行く

花は今しも見頃なるをと。いと口惜し。

茅場町なる何がし寺の門前には。青竹の手を附けたる筒あまた積み  
上げて賣り居り。思へば今日は四月八日。灌佛の日にてぞありける。

かゝるなり雨も御法の花御堂拜みてかへる人の袂に

女子語學校にゆく日なれば築地橋にておりぬ。生徒の一人。家の櫻  
なりとて大枝を持て来ておくれり。道すがらの露さながらに苔を添  
へたる心地して。雨も中々に嬉し。(八日)

その六

思ひもよらぬ大雪になりぬ。

見に來ませ江戸川づゝみ花や雪雪や花なるけふの景色を

とは芝なる教子によりてやりつれども。かをれる雪のためには。か  
をらぬ花こそいと憎けれ。

越後の人には。

君にまづ見せまほしきは咲く花の上にかゝれる今朝の白雪

雪のため電話の糸も切れたりといふなり。

便りきく道さへ今日は跡絶えぬ雪折いかに初ざくら花

櫻田の事變以來なるべしといふもあり。おのれは積り方の北海道的  
なるを説く。(九日)

その七

一尺あまりの雪なりしかば。花やいかにと心にかけてながら。講義の日なれば跡見女學校に行く。校内の櫻は何が降りたりとも知らず顔して。今を盛と咲き出でたり。

露を帯びてにはふもあはれ世の中の嵐隠れの庭櫻花

歸りに江戸川を見れば。折れたるは二もとばかりあれど。花の苦しめられたる跡は見えす。(十日)

その八

雨細く降るに。下野に行く事ありて朝疾く江戸川を過ぐ。梢なほ衰へず。

新らしき舟二つ三つ花のもとに繋ぎ捨て、あり春の朝雨

汽車にはまだ早ければ。上野の岡を一めぐりす。清水のあたり。東

照宮の前。何くもかをれる雪の林ならぬはなし。摺鉢山の下ゆく頃。鐘の一こゑ響き來れる。中々けさは趣を添へたり。

まだ散らぬ花に別れし夕ぐれは憎しと聞きし鐘の響を

停車場に至りて廣場なる待合の腰掛にて待つ。我真向にかけたるは。黒の大黒頭巾冠りたる七十あまりの嫗。黒縞の羽織に黄なる紐して。紫のショールの合せ目をば。紙のコヨリもてとめたるも雅なり。』手を引かれたるは十一二の娘。桃色のフキの一寸ばかりつきたるを着て。宮本武藏めきたるお下げの髪に。松葉牡丹の色したるリボン赤やかにかけたるが。何やらんいへば。彼嫗も語る。見れば風呂敷包の雨にぬれたるに。花びら二つ。糊してつけたるやうに留れり。』汽車出でぬ。わが室内には印半天の男四五人。話のもやうにて思へ

ば。朝河岸の買出し終へて。王子あたりに歸るなるべし。甲いふ。誰も雨には泣けども。君のはアミにジャコにアサリなれば。一番雨にてよわるならん。乙いふ。三兩のマグロを三貫に賣つても。設けいくらにもならず。丙曰く。僕はシラスボシをどつさり買ひ込んで來たが。是も雨にぬらしては往生なりと。

花見の裏面を見聞く程に飛鳥山きたる。見上ぐれば満山たゞ花。半空たゞ雲。面白き處なるに。傘さしたる書生二人立てる外には。床几と茶店との黒く花の間に残されたるのみ。かの人々の客座敷こそ思ひやられる。

歸るさも見ろべき物を飛鳥山あすといはせぬ雨のつれなさ

その九

(十二日)

汽車の窓に雨くらき夕べ。浦和に着きぬ。停車場の花。いつもさほどには覚えざりしが。大きな木の數さへ少なからずして。咲き満ちたる色香。雲にも雪にも喩へん方なし。乗合の一人いふ。花は夕日もよけれど。雨さらに妙なりと。旅路に同じ心の友を得たるを喜ぶ。

雨ながら夕暮ながら我庭に移して見たき花の色かな

蕨にも花多く。並木をなして町までつゞけり。

汽車おりたる人の蝙蝠傘まで。今日は晝にして見たきほど打ち煙る。(十二日)

その十

珍しく晴れたれば。終日花見ありかんとて。本所の横網河岸より言

問まで汽船に乗る。朝まだ早ければ。堤行く人繁からで。露を帯びたる花の色こそ。いと清けれ。上りて。白鬚のあたりまでそゝろありきす。左右より打ち掩ふ梢の白雲。遠く見ればトンネルの知く。近づけば身さへ埋められゆく心地して。覺えずたゝずむ事もしばくゝなり。咲きも残らずと口ずさみつゝ。打ち仰ぐ折しも。ちりんと聲して自轉車一つ袂をかすめ去る。

梢には吹くとな告げそ走り行く車の嵐肩に切るとも

芝に至れば増上寺またよし。鐘樓の前なるが殊に美しきを愛でゝ立ち寄れば。海老茶袴の女生徒六七人。同じほとなるが御堂の前の石段を下り来る。花外の花なり。

黒本尊の前より岡づたひして。丸山に登る。花見客のせたる電車。汐干狩積みたる小舟。海陸のながめ。皆香れる雲の間にあり。

散る花の木の間に見ればのどかなる海にも波の立つかと思ふかなたに越ゆれば。辨天の池をめぐりて咲き埋む花。喩ふべき詞も知らず。枝をまじふる若楓の緑。雲の奥なる椿の紅。彼も又よし。是も又よし。

池水に枝さし垂れて咲く花の影こそゆらげ魚のゆきゝに

此池を庭のながめにして家作りせるは。櫻舎のぬしなり。門を敲きて座敷より再び見渡せば。辨天に詣づる人の鰐口鳴らす音。泡立つ花を隔てゝ時々聞え。橋行く老若。雪を戴き雪を踏みては。急ぐともなく去り又来る。さながら社會の園遊會を我物がほなり。

忘れめや聞きしは昨日見るは今日花さくら屋の春のながめを  
品川まで行きて。品川神社の岡にのぼる。岡に作り富士あり。その  
頂に立てば。麓を圍みて渦巻く白雲。すべて花なり。思へば日露戦  
争の開かれし春。今日の如き盛に此神社に詣で。神樂見たりし事  
もありつるが。花は同じけれど世は同じからず。

百重波隔つる波の外までもかをれと咲くか山ざくら花

社の前より京濱電車に乗れば。櫻の大枝もちたる客に逢ひぬ。横濱  
よりの家づとなるべし。(十六日)

### 大乘寺

朝疾く起きて大乘寺まで散歩す。道の傍には都草多く。墓原には蓮

華草まだ咲き残りて。錦を敷石置石のあひだくに打ち敷く。

そらろありき夏こそよけれ朝露に何くともなく若葉香りて

古寺は石の佛の丈よりもそら豆のびて花咲きにけり

たうもろこしの苗の根分をして渡せば。受け取りては植ゑ行く。ひ  
とりは母。ひとりは其むすめなるべし。(六月二日)

### 松虫寺

安食より松虫寺に遊ばんとて。長門橋を渡り。左に折れて長堤を南  
へと行く。うしろには利根。前には印旛。山遠くして平野廣く。水  
には芦の若葉茂りて。十里の青蕙を展べ。畑には麥の秋風半ば吹き  
立ちて。刈時には今少しの日數ある黄の色を。遠山麓まで波打たせ



たり。

同行は安食の須藤翁と。若き人ふたり。翁は本草のことに委しければ。一花摘みては名を言ひ。一草とりては有毒無毒を語りつゝ。行く程に。木陰なき道なれば。時は午になりて。羽織を脱ぎ。扇腰より抜き出だす程の暑さになりぬ。

道の傍に一軒茶屋あり。榎の陰の涼しげなるを見つけて暫し休む。亭主は大工を兼ねるにや。匏もて物削り居たる手をとめて。茶をすゝめつ。前に小沼あり。水草の浮葉しげりて。白帆のかなたに行くも近く見やらる。

猶行けば吉次沼といふあり。陸奥に通ひし金商人の殺されし處とて墓もありしが。天明の洪水にて沼となり。其かたゞに無くなり果て

しかども。名は猶村人の口に残れりと。翁語る。

遂に印旛を左に見つゝ。堤は盡きて山道に入る。卯の花多く。夏なほ消えじとする雪の如し。折りて行かばやといへば。若き人たち。崖を攀ち。道をあともどりしてまで。是がよしあれが美しといひつ折れば。翁さへ浮かれて。そは花少なし。苔の多きをこそなど。指圖しながら。力に任せて本より折りしを。辨當持たすとして連れ來れる。車狭しと打ち積みたり。

里人の寢覺おもはで時鳥鳴くべき花を折りてけるかな

是のみならず。よそ染の花あり。づしといふ木の花ありて。緑と思ひし夏山の半は。白ゆふ掛けたるこそ。目さむる心地すれ。

松虫といふ村來りぬ。家とぼりくゝとありて。何くも養蠶いそがは

しげなり。翁いふ。當村は十三戸ありて。隣村の角田つのだは十三戸半なりと。その半とは如何にと若き人なれば。今隠居屋が一つ建ちかけて。まだ一戸の資格をなさなければなど。罪なきざれ言も未だ終へぬに。廣やかなる境内見えて。山門の前に着きぬ。額を見れば。松虫寺としるされたり。

本尊は七佛薬師にて。うしろの方に松虫姫の祠あり。姫は奈良の帝の皇女なりしが。此本尊の御夢想にて。いみじき御病の癒え給ひし御ゆかりにより。こゝに御墓を設け。御靈をも永く祭れるとぞ。今は安産と養蠶まもる神にてましますなり。

誰と来ていつかながめん露に鳴く松虫寺の秋の夜の月

寺に案内して。涼しき座敷を借り受け。携へ來たる物どもを。一切

經の辛櫃の前にて開く。住持出で、いはれある什物あれこれ見せたり。狩野何がしの涅槃像大幅もありき。空海筆といふ心經もありき。庭にはいてふの老木若葉すゞしく。五月躑躅の紅なるも見えて。ながめ飽かぬに。高き梢には。四十雀の聲。頬白鳥の聲。絶えず聞えぬ。

塵一つ残らぬ庭に鳥の來て踏みこぼしたる古葉をぞ見る

歸りは舟にせんとて。吉高よしたかさして山を下る。卯の花猶見捨てがたしとて。有るが上にも折り集め。折り集め行く。

かきよせし雪を車に氷室守つみて歸ると人や見るらん

汀に出で、舟の事を計るに。舟はあれども蠶時にて人はなしといふを。翁辛うじて諾がはせ。一葉印旛湖上に浮び出づる事となりぬ。振り返り見る松蟲の山は。名残をといめ。前に見渡す安食の山は。

まがはぬ松の木をしるしにして迎へんとす。

沼盡きて。利根に出でんとする口の川長く。兩岸の芦原。萌え立つ  
緑の色美しきに。よしきりかなたこなたに呼びかはし鳴く。

あれ／＼といふ方を見れば。雲雀上りて空へ／＼と行くを。今落ち  
來べしといふ程こそあれ。矢を射るよりも早く。身を逆さまにして。  
麥畑の中にやあらん。突き進みつゝ下り來る。一つ落つれば一つ上  
りて。絶えず舟なる人の顔を天つ空ならしむ。夕日のどかに傾きて  
風寒からず。

舟は堤につきたればおりぬ。歸りくる道すがらの家々。菖蒲と蓬と  
を軒にさしたり。明日陰曆の端午ぞといふなり。田植せんとして苗を  
分けつゝ。東になしをる女も見ゆ。(六月二日)

### 栗田高樹君

夜歸り見れば机の上に置かれたる音づれ。思ひきや黒わくの内に報  
知せらるゝ栗田高樹君の名ならんとは。あないぶかし。いにし月ま  
でも櫻陰會の詠草まとめて。手づから清書しおくられたる人なりし  
に。

壯年の君はいとよく記憶す。明治五六年の頃なりき。國學校創立の  
教官として。慷慨悲憤。玉鉾百首の講義に托しては。平田流の儒佛  
排撃主義を鼓吹しつゝ。口角沫を飛ばされし面影。なほ昨日の如し。  
かくて君は。早く我故郷を出で。我また遠く都に來りて。逢はざる  
事三十年ばかりなりしが。珍しく桑名にて。君の家を訪ひしは。三  
十五年の八月なりき。

伴はれて愛宕山の吞景樓といふに登り。桑名の町の燈星の如く。知多半島さながら墨畫の景色にて見渡さるゝ窓にて。涼しき夕風に吹かれつゝ。昔語歌語くづし出でたる楽しさは。又重ねてと契りしもの。君がその時。

過ぎさりし昔語りに廿年を若がへりたる心地こそすれ

とよまれし詞も。永き世の形見となりぬるぞ。悲しき。

其夜は一つの蚊屋に打ち眠り。寢過して驚けば。君は椽側に腰打ち掛けつゝ。摺鉢と摺子木を手にして居たり。味噌汁にても振舞ひ給ふやと戯るれば。いな籠の雲雀に餌をやらんとてなりと笑はれぬ。笑はれし君。戯れしおのれ。今は涙もてならでは。互に禮をかはず事も叶はず。

寢がへれば肱つきあひてあな痛といひたる蚊屋の内ぞ戀しき  
夕雲雀あがるやいづこ亡き靈の姿は遠く雲にかくれて  
あはれ人の世なるかな。(六月三日)

### ○忍音の記

山吹散りて春暮れたり。歸らぬ我子を如何にせん。  
さゝれは今年十八歳。三輪田女學校の卒業式に。物したる寫眞を形見にして。歸らぬ旅路に出で立たんとは。神ならぬ身の知らざりしに。病み臥してより僅に三週間。五月十二日の露まだ消えぬ朝ぼらけに。風をも待たで。先立ちぬるこそ悲しけれ。  
いにし月の二十七八日の頃なりけん。歸りて見れば。さゝれの髪み

な切り捨て、あり。いかにと問ふに。氷もて冷やすに不便なれば。醫伯の指揮に従ひしなりと。妻は涙ながらに打ち語りぬ。

思ひきや撫で、育てし黒髪を手づから親のそがんものとは髪は生やさば直ちに伸ぶべし。療治こそ大事なれと。病めるさゝれを慰めはすれど。さらでだに心強からぬ父の。涙見せじと忍ぶ心は。子を持たぬ人に誰にか語らん。

思ひ出づるも忌まはしきは。十一日の夜なりき。十時頃にや。啖の喉にからみて苦しげなれば。如何にせんと言ひ居たるに。止みたるやうなれば。少し心を安め居たるに。十二時頃より又始まりぬ。此度は唯事ならじと見ゆれば。醫伯の注意によりて親類を集め。皆諸共に看護しつゝ。二時も過ぎ。三時四時も打ち過ぐるに。苦しき

はいよく加はれる様なれど。顔をしかむる事もなきに。もはや夢中なるべしと思へば。神に祈る外は。せんすべもなし。かくて事全く切れたるは。五時過なりき。何とか言はん。

氷よりつめたくなりし顔の上に落ちて湯と沸く我涙かな。白布もて顔を覆ひ。臥戸のあたり片づけなどするまゝに。現心もあらず。

さめかへり物をや言ふと亡き骸の顔の白布まくりてぞ見るひさの。

いたづらに氷袋の残れるを見ても昨日の君ぞ戀しきとよみたりとは。後にこそ聞きしか。

聞き附けて訪ひ來る人々。北京なる姉君の御驚きや如何ならんとい

ふに。昨日しも其畫葉書の着きたるを。御身に來れるぞと見せられた。字は見えぬといひ。文句を読み聞かすれば。うなづきたる事など語りて。如何に今はに一目見たかりしならんといへば。泣かぬ人なし。

薄暮過ぎて柩に納むるといふを。涙ながらに打ち見れば。にこやかなる面もちして。永の別れを知らず顔なり。

廻りあはんあの世は知らず此世には今ぞ親子の別れなりける

唯夢とのみ思はるゝに。胸貫く鐵槌の音す。

心せよ柩の蓋に打つ釘の痛む頭に響きもぞする

ひさの。

釘打ちて固めし柩蓋あけて今一目だに見んよしもがな

神官來りて御靈移の式を行ふに。玉串捧げて額突く家人。おのれと妻との次にはさっれよと呼ばんとすれば。其人なくして。誰がしわざにか。名は靈位にぞ書かれたる。

思ひ出づれば。さっれが四つの秋なりき。生の母を失ひし時。靈位を見ては。小さなおツかさんよと言ひたりしが。思ひきや十四年の後。その身も母の跡を追ひぬべしとは。

父に似て太かりし子は母に似て小さき人となりにけるかな  
今宵は通夜する人々多く。世にありし時の事ども口々に語りいづるを聞けども。

忘れては壁のあなたに今も猶ものいふ聲のするかと思ふ  
薬は如何に。湯は飲みつやなど。言はんとしては心づく事しばく

なり。

御名呼びてゆり起せども起せども答へぬ人となりし君はやと。ひさの、書きて示したるは。此時にやありつらん。夜晝ねんごろに看護したるは此乙女よと。思ひ出で、は。目を見合はすも亦涙なり。

忍音に鳴くとは知るや子を思ふ心の暗の小夜ほとゝぎす

忍ばれぬ音も。折々聞えて。ともし火ほのぐらく。夜は更け行く。十三日も柩の前にて夢と暮らすに。福島四郎ぬしは通夜せんとて来る。玉串机の傍に置きたるを見れば。

とこしへに行きて歸らぬ天の川の底のさゝれとなりし君かな  
さゝれの七夜祝ひし時なりき。苔むさん千代とは言はじさゝれにも

玉の光のあらはれんまで。とよみつるものを。螢の光だに放ちもあへず。二九といふ齡の始に。憎くも死といふ魔縁に引き纏はられし哀しさよ。

十七の年の春かと覺ゆ。琴の免狀授かりて歸りしかば。我庭の物と思へばあはれなり。藪ながらなる鶯の聲。とはよみつるものゝ。父が心には。玉の響にも優りて聞えし物を。

君なくて獨り残れる玉琴の音に泣く人の多き夜半かな

いつしか夜は白みたりとて。戸を明くる人あり。音をな立てそ。枕上なるにといへば。今は御病人もおはさぬにとさゝめく。

静にと人いまして明けさせしきのふ戀しき此雨戸かな

今日はいよく今はの門出せさすに。親の子を送る例はなしといふ

人もあれど。獨りやらんは淋しからんとて。妻も己も柩のあとより  
従ひ行く。

行末のわが野邊送り送るべき人の一人と頼みしものを

朝夕に昨日は馴れて呼びし名を旗の文字にて見るぞ悲しき

青山に着きては。更に心のみ掻き亂されつゝ。齋主の祝詞を讀まれ  
しも。福島ぬしの弔詞を讀みたるも。夢路をたどる心地の内に。早  
くも式はてゝ。柩は墓の方に昇かれ行くなり。

折しも空かき曇り。大粒の雨はらくと降るよと思ふ程こそあれ。  
轟き出づる雷の音と共に。雨は忽ち雹と變じて。其勢いと凄ましく。  
車の幌をも打ち碎かんずるばかりなれば。車夫もたゆたひて。暫し  
は原の真中にぞたゝすみぬける。

かつ消えん物とも知らで玉霰玉とめでたる事のくやしき

さて有るべくもあらざれば。ぬれながら下り立ちて。土を三つ四つ  
手の當るまゝに打ち入るれば。父の心をも知らぬ人々。叫べど今は  
聞えぬさまに。土ふかふくと打ちかぶせぬ。

見るが内に我子の柩かくしゆく土こそ千代の恨みなりけれ

はや歸り給へと。人々の誘なへば。いざとは言へど。家に行くべき  
力も出でず。

天つ雁わかれや行かん此野邊に花とめでたる乙女子を置きて  
歸り來て事しづまりたる後。ひさの。

御柩のあとをゆくにも諸共に車つらねし春ぞ戀しき

と思ひ侍りしとて泣く。おのれも。



残さるゝ父母かなし先立ちてゆく子や如何に悲しかりけん  
とぞ思ふとて。又袖をしぼる。  
十五日は墓詣せんとして行くに。空うらゝかにて。博覽會見物に出づ  
る人々多し。

この春は上野の花見電車にて共にと言ひしを神し恨めし  
墓に至れば。悲しき佐座禮子之墓なる文字は。花と榊との奥に半面  
あらはして。父待ち顔なり。

葉となりし櫻の陰に一人ゐて永き日いかに暮らしわぶらん  
夜に入りて此五日間の日記を附くるに。更に立ち返り思ひぞ出でら  
るゝ。

執りなれし筆こそ劍とるまゝに胸を切り裂く心地こそすれ

十六日は。朝とく關口わたり散歩して。手向のためとて。れんげ草  
など摘み集めつ。

まだ残る方もありけり共に來て摘みしむかしの春草の花  
摘草に連れゆかんと又いつの世にかと。何につけてかあはれの淺か  
らん。

塚越もと子の君より。

思ひきや去年の圓居を限にて又あひがたくなりまさんとは  
年の始の歌の會よと。又くりかへすに。加留多に勝ちて。さらでも  
大きなる二つの目を。見開き喜びし面持さへ。拂はんとすれど目の  
前を去らず。

福岡なる妹より手紙きたるに。二十こしたるおゆふは支那にあり。

さゝれをこそはと思ひ給ひけんをなど。涙催さるゝ事ども書きつゞけたり。

さらでだに夕べも待たぬ朝顔の杖とられたる心地のみして十八日には柴田たか子の君より。

はかなしや和歌の浦路のさゝれ石苔むすまでと思ひしものと言ひおこされて。これをも靈前に供へたりしに。病の床にて。君が代の唱歌口ずさみし事など。又しも胸に浮び來りぬ。

十九日は。亡き人のはらから五人。皆引きつれて墓詣す。朝毎の學校と幼稚園の辨當。誰も此人の世話になりたりと思ひ出づるに。土の下には。言ひたき事も言はれぬ身をや。嘆き居るらん。

拜む弟おとをがまるゝ姉いと悲し腹立ち合ひし昨日わすれて

歸り來りて机のあたり打ち片づくるに。半紙もて綴ぢたる冊子を見出でぬ。披きて見れば。習ひ集めし琴の唱歌を。いと清らかに寫したるなり。妻の曰く。此春頃より。病のよろしき間々に。筆執り居たるを時々見たりと。何よりも好む道なりしを。残れる玉琴。持たせ遣る使の通路なきこそ口をしけれ。

柱を立てゝ彈かんとしつる琴の緒は中より絶えぬ恨めしの世や二十一日には。又青山に行きて。荅がちなる芍薬を手向けつ。

花の名に聞くも恨めし與へても今はかひなき人の薬を恨は盡きぬに。早くも日數は移り來りて今日十日祭を物するといふなり。神官例の瓶みかの上高知りて神酒供ふるに。集まりて額づく子供等。去年の妹を失ひし折は。玉串の數も六つありしに。今日は一つ

缺けて捧げらるゝ客人となる。猶夢のやうなり。

福島ぬしも同じ心にあ思ひ出でけん。物に記して机に置くを見れば。

人並に捧げながらも玉串を君のためとは思はざりけり

おのれも得たへず。

玉串を取りてさゝれも捧げよと呼ばんとすれば今は亡き人

ひさのも筆とる。

諸共の圓居にもれて君は今いつこの道を獨りゆくらん

行く人悲し。残さるゝ父更に悲し。酒さめ昔語り出でゝ夜はまだ更

けぬに。人々の袖は露けくなりぬ。

二十五六日の頃にやありけん。尾張なる桑原のぶ子の君より。

いかばかり焼野のきゝす明暮に嘆きますらんあはれ此ごろ

と詠草の奥に書きておくられしかば。やがて朱筆して返す。

ひとり鳴く焼野のきゝすよそにのみ聞きし昨日の春ぞ戀しき

北京なるゆふ子より手紙の來りしは。三十日の事なりしが。封おし

ひらく手も打ちふるはれて。讀まぬ先よりまづ涙なり。病のやゝ重

りゆくをば知らせたれども。かくまでとは思ひやかけざりけん。一

日も早く直りてといふ畫葉書など。しばゝ來りて。物も得言はぬ

枕邊に。又は姿も見えぬ神床の前に。打ち置かれたるを。亡き人い

かに嬉しくも悲しくも見たりけん。思ひいづるも胸いと苦し。

奥に歌あり。

いづ方に今眠るらん學び卒へて勇み歸りし君が笑顔は

一目だに逢ひたかりしを如何にせん千里ゆきかふ翼なき身を

げにさこそはと思ひやらるゝ父の心を。又かきをへて靈前に手向けつ。

いもうとの野邊の送りの數にだに獨り漏れたる君のかなしさ

北京なる君にあひたしくとあした夕べに言ひてしものを

はかなく明け暮れて。別れし月も今日のみぞといふなり。

數ふれば二十日になりぬ二十日さく花は蒼の猶のこる世に

祭するとして瓶にさしかへたる牡丹の花の。執りて手向くる榊の枝に

一花こぼれかゝりたるもあはれ深し。

又も其世に歸らんを大み空ゆく月ならぬ君の悲しさ

とひさのが言へば。

おもひいづる事おほくして月花も悲しきものと今よりは見ん

と書きたるやうなれど。何事も得言はず。

下總に二三日旅して歸り來りしは。六月の十二日なりき。水神の松

ほのくくと。霞み渡れる印旛の沼の朝げしき。それも見ながら。家

こぞりての成田詣。今年やせましなど。言ひつる事もいたづらなり

きと。思ひ出づれば。今日こそ別れつる。其日なりけれ。

待つ人のひとりも缺けぬ宿ならば歸るさ如何に嬉しからまし

子のゆくへ追ひて行きたる魂の歸る宿なき心地こそすれ

汽車も猶ところくゝに留まれども。留まらぬ物は月日にて。早くも

百日の半ばとなりにけり。

五十日とは誰かぞへけん夏の夜のたゞ假臥の夢の間にして

例の人々集まりて。葉山に行きつる夏の事など。語り出づるに。誰

よりも先に朝疾く起きて。いざ海邊にと父を勧めしこそ。八つ九つの時のさっれよと思へば。麥藁笠着たりし面影目の前に見ゆ。行きて見ん森戸の濱の松原に今もわが子は貝ひろふやとひさの又。去年の此頃もろ共に御墓詣して青山より歸りし事など。思ひ出づとて。

よみあぐる祝詞の聲の神さびて夕ぐれ悲し君まつるやど今日は水無月つごもり。大祓なりといふ人のあれば。

いざ我も御手洗川の清き瀬にみそぎてましを君し歸らば言へども歸らず。思へども盡きず。寝ても寝られぬ夜こそ多ければは言へど。

一聲も今年は聞かず時鳥我ぞ千聲を夜な〜に鳴く

紫陽花散りて梅雨晴れたり。遠ざかる春を如何にせん。(四十年)

## ○夏 白 波

東海道——山陽線——三津濱——高濱——松山——伊豫鐵道——十六夜櫻。

### 一 月の夜汽車

新橋より七時三十分の夜汽車に乗る。雨しふねくも降り増りて。窓の戸も明けられず。晴れたらば待宵の月みるべきにと。いと口をし。品川沖をばほのぐらく眺めつゝ過ぎぬ。眠り覺めて賑はしきに驚けば。平沼なりき。雨は止みたるにや。雲の色おぼろ〜として。遠山の松見えたり。

沼津を過ぎて。末は海につゞける大川の波高かりしを。夢心地に記憶するは。富士川にてやありけらし。

トンネル出で、川となる。興津かあらぬか。清見寺の來たりしにて。寢覺心地にも誤らざりしを知りぬ。

静岡にて物ほしうなりて。鯛飯をと思へど。夜中なればにや來らず。正に十二時。月すがたを見せたり。

大井川波高くして。跡も先も霧に隠れぬ。さながら荒海の上を行くやうなり。

大井川あらしぞわたる中絶えし霧の浮波月に蹴立て、

天龍川にも金波碎け。濱名湖にも金砂を散らしぬ。晝は賑ひしならんと想像せらる、辨天島。寂として松に聲なく。まばらにともし火

の光の漏るゝのみ。

夜の明けたるは名古屋なりき。大きな西瓜あまた積みたる荷車。

露深き草原堤を引かれ行く。

京都に着く頃は。山際曇りて東も嵐も見えず。鴨川の流のみ。歓迎の歌を來る人毎に謳ふ。

大阪に下車して。此度開けたる電車の初乗をなし。半日車中の熱を洗はんとて。住吉に遊ぶ。湯のある家をと尋ねて。小山樓といふに席を占むれば。蓮吹く風は窓より入り來て蘭よりも香ばし。

住みよしといひけん神の御心もおもひやられて風ぞ涼しき

今夜の汽車は九時半なれば。ゆるりと眠りて。電車より電車に送られ。梅田に至ればまだ一時間あり。前の店にて氷水など飲みつゝ待

つ。

## 二 第二の故郷

京都發下關行の汽車來たれば乗る。今夜こそ月を見て。夜汽車十時  
間といふ文章を。書かんと思ひしに。第一時間もまだ終らぬに。眠  
氣さしぬ。

よりて住吉より持ち來りし折詰の辨當を開きて。まづ睡魔退散の祈  
禱を爲さんとせしに。忘れたるならん。箸は附きて居らず。蓋の板  
を二つに裂きて挟まんとすれば。もろき薄板は固き飯に負けて折れ  
んとす。すくひたり突き刺したりして。食事もやうく果てしかば。  
からになりたる折を捨てんとして。うつむき望む神崎川は月を帯び

たり。

柴の戸を月にや訪はん松蟲の音も住吉に住める友あり

いでや是より眠らじと思ひしも。又いたづらにて。須磨をも知ら  
ず。舞子をも知らず。明石をも知らざりき。トンチルの長きにて驚  
きたるは。三石みついしあたりにてやありけん。

尾道にて目の覺めたれば。明方になりぬ。海の景色いふべからず。  
漁火たゞ一つ。波にゆらめきつゝ沖の方にあり。

道のかたへに月見草いと多ければ。

夜もすがらながめつかれてしをるらんこのる雲間の月の下草  
など口ずさむ程に廣島に着きぬ。

蓮見夫人に迎へられて。水主町の邸に同行すれば。あるじの君も待

ち居られて。一別以來の物語に及ぶ。

満身車中の煤烟をあびたれば。行水し浴衣着替へなどして。更に二階に登る。入江の水は欄干の下まで湛へて。かなたには小學校の森緑深く。吹き入る風いと涼し。

晝まで遊びて宇品に行く。伊豫渡りの汽船に乗らんとてなり。出帆は午後の一時なりといふ。

やがて乗り込めば。女どもわめきく物賣りに来る。葡萄や梨子や林檎は入りめへんかと。廣島は我ためには三十年前の第二の故郷。思ひ出づれば。聲ばかりこそ昔なりけれ。

### 三 伊豫渡り

港を出づるに。風ありて心地よければ。二夜の夜汽車の結果を見せて。大かたは船の上にも。又白河船を乗せつゝぞ行く。

汽笛の合圖に驚けば。今しも音戸おんどの瀬戸にあり。平相國の石ぶみ。松あをくくと汐風に吹かれつゝ立てり。

西南戦争の前年にや。和船にてこゝを過ぎしに。汐待つ船の退屈さに。船頭して索麵を買はせ。賣りに來れる鯛と共に煮させて。同船せし國島君と共に。腹鼓打ちたる事など。思ひ出でらる。當時おのれは。英語を始めて僅に半年。子羊はランムにしてランプにあらず。負債はデットにしてデプトとにあらずなど。君より教へられたる事もありしに。秋は來れども。今は一葉のおとづれをだに得ず。

十八里の海上も百里の如く。まちどほなりし伊豫の山陰。いつしか



船の舳先に立ちて。握手もせまほしく思ひ居る程に。ぶう／＼と聲して高濱の棧橋に着きぬ。

ボーイ曰く。こゝに御上りになりますかと。いや三津なりといへば。皆様は大かたこゝなるがといひて。不審顔をす。げにも宿屋の迎や荷揚の人夫やと來りて。賑はしければ。こゝに一つの疑ひは起りぬ。昔おのが伊豫の地を出で入りし頃は。三津に船の着く事のみにて高濱なく。今は高濱のみにて三津はさびれたるにやあらん。さらば迎もこゝに來て居るや如何にと。思ひ始めては心掛りなれば。首を伸ばして棧橋より濱まで見るに。誰も影なし。其内に人靜まりて船また出でぬ。

三津には棧橋もなく。下るゝ客も二三人なれば。ハシケも來らず。

遠淺の處を下りて歩かねばならぬこそ苦しけれ。

車夫二三人濱に居り。招けば來りて背を差し向け。負はれよといふ。彼は瘦せたるに布袋男の負はれんこと危ければ。足袋ぬぎすて、漕がんとするに。一人の水兵ありて。親切にも牝蠣にて切るべし。止めよといふ。されど他にせんすべのなければ。手廻りばかり持たせて陸に上りぬ。

こゝにも約束の迎來て居ず。池内君の姿も見えねば。宿は何くに取りてあるらん。松山に行く事か。高濱に宿る事か。さては又三津に留まりてよきか分らねば。まづ停車場まで行きて。ともかくもせんとて車を進まず。

#### 四 ゆくへ何く

停車場前に茶屋あり。村上といふ。まづ假本陣をこゝに定めて。松山玉川町なる池内君に打電す。

ユクヘイヅクトサダメン

と。

奥の一間に通れば。うしろには廣田青々として。風よく吹き入り。前には汽車に乗り下る人々。居ながら見出だされて。便よければ。心少し長閑になりて。晝飯もまだなるが。何かあるまじきかと問へば。すもじでも見に遣りませうとて。かひなくしく立ち働き居る十八九の女を走らせたるに。やがて歸り來て。今日は休みなりとて。おかみと共に氣の毒がり。何がよからん。かゝよからんと。二人して考へ呉れたれども。處が不便なりとて名案出でず。遂に驛夫など

の物する辨當ならばといふ事になりて。はげにはげたる會席膳は我前に据わりぬ。

飯はメンツウに似て古色蒼然たる櫃に盛られ。菜は小さき鱈の煮たるが一切と。黄ばみたる茄子の漬物が二切とあるのみ。あまりの心細さに再度の交渉を始め。クツシ（蒲鉾）ならばあるべしとの事に之を取り寄せ。酒沸かさせたるに。酸くして飲まれず。されば麒麟にせんとて持て來させたるに。口拔を何くへか無くしたりといふ。是もとかくして抜きおふせ。かの女來りて酌をしつゝ。お困りで御座いませうを繰り返す。

日も暮れたり。返電來らず。迎の人も來らず。今夜は梅津寺に流燈施餓鬼のあるを。誰もく見に行くとして。來る汽車もく。乗りこぼ

れぬは無し。いでやおのれも見物して來ん。歸りて猶も便りの無くは。一夜とめてよと頼みて。切符を買はせ三等室に乗る。池上の會式詣も物の數かは。

次の驛は梅津寺なり。いつの頃にか支那の僧來りて住みけるが。故郷の梅津寺といふに。地形の似たればとて名づけしとか。今は海水浴場として其設備もあり。夏は夜晝賑はふ處ぞと聞きしも著く。今夜は人のみにて。海も磯も寺も家も見えぬ程なり。

押され／＼て。線路にや波打際にや知らぬ處をたどる折しも。大和田さんと呼ぶ人あり。見れば前に立てるは喜多六平太君。いつ來たと驚かるゝは池内信嘉君なり。電報は着かずやと問へば。今日は早朝より奔走し居て。松山に歸らねばまだ知らず。そはとにかくに。

昨日も今日も高濱に居て。船の着く度に棧橋まで出で、見たるに。今夕のみ怠りしは申譯なし。宿は高濱の城戸屋に取り置きてあれは。是より直に伴なはんと言はる。あゝ我ための六道の辻の地藏尊。メンツウの飯にも免かれたるかな。

さはいへど。羽織までも脱ぎ捨て、來りしなれば。一まづ歸りてと思ふに。とても此雑沓にて汽車には乗られじ。すべての事は驛より電話もて言ひ送らすべければと。いはるゝまゝに人込の中を通り抜け。涼しき草葉の夜露踏みつゝ。海を左に高濱に行く。

見渡せば沖の方には百八の流燈。さながら天の河を横へたる如く。動かぬ波の上に浮びて見ゆ。涼しき景色喩へんに物なし。

暑さまで波に流して歸らん見る人おほき沖のともし火

## 五 十六夜の月

宿りは高濱を一目に見おろす高みにあり。六平太君は昨日よりこゝにありとて。涼しき眺めを我物顔に語る。

池内君と二階に登れば。入海を隔て、伊豫の小富士は目の前にあり。濱の家々ともし火見えて。暗き海原。よせくる波の音も聞えず。女の童ビール持ち来れば。おかみはあれを御覽下されと曰ふ。今しも十六夜の月は。うしろの松山を半ば離れたるなり。や。月こそ出で候へ」と口ずさめば。「あの籬が島の」と池内君は附く。面白さ二つなし。

波の上に澄み行く月は高濱のうらさびしくも無き旅寝かな  
鐵道線路のかなたの岡に。ともし火明るき高殿の見ゆるは。延齡館

## 六 濱の市

とて。此度の能に大阪より来れる。灘子方一行の宿なるが。自身も共に今は居るなり。晝も涼しければ明日は来ませとて。夜も更けぬれば。池内君は去りぬ。  
おのれ獨り樓上に枕するに。冷かなる風は海より訪ひ来て。白き蚊屋の裾を動かす。

曉目さめてながめ出だすに。月は晝の如く冴え渡りて。平らかなる海の遠近。行くとも歸るとも見えぬ漁火の。影ほのぐらく浮び居るなど。詩人を悩ます平和の天地なるに。濱といひ道といひ。砂の白き處は。霜や置きたる。雪や降りたる。忘れては秋か冬かところ思

はるれ。

ほのくくと明け渡る頃。池内君來りて。三津の魚市見に行かずやと曰はるゝまにく打ちつれて。一番汽車に乗る。

梅津寺。昨夜の賑は失せて。夢しづかなる停車場に乗り下るゝ人まだなく。落ち散る西瓜の皮に露白し。

三津に着きては先づかの村上を訪ひ。世話になりたる禮を述べれば。クヅシ買ひ來て呉れたる女も。口々によい御都合でしたと。喜びを言ふ。

市場は濱にあり。近くの海の魚類は。大方この市に運ばれて後。松山に。道後に。高濱に。郡中に。配らるゝ事とて。其賑ひ一方ならず。

深き竹の子笠を後ろ下りに戴き。柄杓の如き竹の矢立を前にさしたる人は。八九箇所に陣取りて。高き足場の上に立ち。何やらん聲高に呼び立つれば。前なる一人。魚を鍵に懸けては差し上げ示すを。大勢取圍みつゝ。がやぐわやく叫び立て。指を出して見する一呼吸の間に直段極まり。買手定まるを。又あとから引き續き同じごとする速かさ。かの足場の上なる人は。聲に應じて。小さき短冊形の紙に。筆早に書き記す。速記も及ばぬばかりなり。直段と買手の名と魚の貫目を附けおくなりとぞ。

その買主には問屋もあるべく。振り賣りに行く男もあるべく。料理人もあれば。只の御客もあるべし。籠いたゞきたる女どもは。其人込の中を縫ひつゝ。買ひたる人より又買ひ受けて持ち運ぶ。

小魚を山の如く打ち積みて。縁日の星店のやうに賣るものあり。ア  
ナゴは數十の繩に徹されて。正月の輪飾の足の繁きが如く。鰯鳥賊  
の新しきは薄紅梅のにはひありて。手にも弄ばまほしくぞ思はるゝ。

家づとに覺えて行かん珍しき魚の名かたれ濱の市人

池内君は片手に魚籠提げて。いざ歸らんと曰はる。いつの間に買はれ  
しならん。いざ坊主持になど争ふ内に。汽車は松山の方より來りぬ。

### 七 思はぬ來賓

歸りて朝飯すましたる處に。六平太君に逢ひたしとて。來りし人あ  
り。障子を隔て、聞き居るに。よくも故郷の小梁川翁に似たれば。  
もしやと思ひ覗きて見るに。果して然なり。如何にしておはしける

ぞと。いぶかれば。此度の能の催を聞きて。來りしなるが。君の事  
は。新聞にて見たるのみなれば。着かれたりや未だなりやも分らず。  
宿所もとより知るべきよしなれば。此地に着くや直に濱人に問ひ  
て。まづ喜多君の宿を明かにしたれば。君のことを問はんとて。來  
りしなりとて。喜ばるゝ詞の末も。早涙なり。今年七十の上を。八  
つ越したる高齢なるにも拘はらず。精力ますゝ勇ましく。十年一  
日の如く。戴かれたる鬚の毛は。みづゝとして。初霜ばかりの。  
白さだに交しへず。

翁去りて後。向の岡なる廷齡館に行きて。かの集まり居る人々と。  
語り合ふ程に。晝になりぬ。海には帆を上ぐる船。磯には汐をあぶ  
る人。高殿の眺望。こゝもいと涼し。

池内君は今朝の魚を調理せさせて。もてなさるゝに。六平太君は海老のフライを賞翫し。太鼓打の加藤翁は。鯛の刺身を喜び。おのれは藻魚の羹に。大小の外なる舌鼓を打つ。午後は別れてそれ〴〵の方面に向ふ。六平太君は囃子方を連れて。稽古ある場所に行き。おのれは明日の打合に。松山なる津田茂尙翁の家に行く。

翁は今年七十八。斯道の泰斗にて。當地の指南を司る人なり。無住の寺を借りて稽古場とし。敷舞臺を設けて能の練習も出来べく。風よく入りて。多人数の集會も。夏あつかるまじく見ゆ。

夕暮より池内君に伴はれて。道後だうごに湯あみす。高き石段の上に拜まれ給ふ湯神社は。三十年前に。詣でたる時のまゝなれど。浴室の構

へと旅館の造りとは。面目を改めて。又昔日の物ならず。一の湯の前なる。村兵むらひやうといふ家にて夕飯し。土地の繪圖や繪葉書など求めて。高濱に歸りしは十時なりき。

月になる海をながめて長椅子によるこそ夏は涼しかりけれ

### 八 露の拍手

夜は又明けぬ。磯に集へる釣舟の。一つづゝ出でゝ行く影。晝のやうなるに。雲を帯びたる富士の。逆さまに水鏡したる朝景色。思ひ残す隈こそ無けれ。

今日は松山にて能の大會のある日なれば。明くる即ち。濱の床屋に行く。直にといはれて。椅子に掛くれば。小富士は早くも鏡に移り

て。我鬚剃らすを見つゝ居り。

歸りて朝飯の膳に着けば。向ふの高殿にては。今日ある獅子舞の稽古始まり。太鼓の撥音冴え渡りて聞ゆ。惜しいかな。露の拍子に掛かる處にて。出船知らする汽笛のうなりの。響き出でしかば。妨げられて聞えずなりぬ。

小鼓の吉田氏も。昨夜宮島より來れりとぞいふなる。

### 九 能の大會

十時頃より。池内君にしるべせられて。松山に行く。會場は公會堂なれば。古町こまちにて下りたり。兼ねて聞く六百枚の觀覽券が。數日前に賣り切れたる大景氣なれば。車にて徒歩にて。急ぎ駆け附くる

人。既に列をなしつゝ。皆同じ方へぞ向ふ。

會場は前代未聞の大催とて。幕張り渡し設備嚴然。階上を舞臺および見所とし。階下を樂屋休憩所とす。さしもに暑さ身を焼く如き日なりしかど。堂大きく庭廣ければ。風よく吹き入りて思ひし程には苦しからず。

先づ設の席に至れば津田翁あり。孫の四郎君あり。名刺を出だして名の人々多かりし中に。先生お見忘れになりましたかと。言ふ婦人あり。見れば五六年前。跡見女學校にて教へたりし。小菅艶子の君。どうしてこゝにと言へば。かの翁これは四郎の妻で御座ります。何分よろしうとの御挨拶。萩の古枝の花ならねども。もとの心はと。いとく嬉し。暑からんといひては氷を勧め。装束にかゝる



としては大團扇にて扇ぎなどしつゝ。もてなさる。  
 能は正午に始まりて。清經、望月、融の三番。清經は四郎君。望月  
 は六平太君。融は建樹の役にて。花紅葉の中の深山木一もと。大汗  
 になりて樂屋に歸れば。艶子夫人は又氷をといひ。四郎君はビール  
 をもて來ていざといふ。

### 十 玉の湯

歸るさは船田君に招かれて。道後の藻伏亭といふに行く。庭はやが  
 て谷間になりて。山水の流れ心地よく。木がくれに亭ありて。林間  
 に酒あたゝむる。秋の詩人を虜にしつべく。谷を隔てたるかなたの  
 岡は。道後公園にて。白雲深き處に。春は浮かるゝ處なるべし。

庭下駄響かせつゝ見めぐり終りて。欄干に依れば。今しも笑みの眉  
 開けたる夕顔は。垣根を領して。團扇手に取る客をもてなす。  
 今日玉の湯に浴して。心地よき處に。酔いたく廻りしかば。六平  
 太君。および寶生新君と共に。早く出でゝ。停車場に行きたるまで  
 はよかりしが。汽車の留りたる處。古町こまちならんと思ひしに。思ひき  
 や一番町と呼ばる。さては乗るべき汽車を間違へたるよとて。跡  
 戻りすべきかと言へば。もはや高濱行の終列車には。間に合ふまじ。  
 こゝより歩行して。松山驛より乗り給へと。驛員は教へくれぬ。

### 十一 佛手柑

朝とく起きて。高濱の小魚市を見めぐるに。蒸立の煙立ちたる芋の

粉を。賣り居るあり。故郷の事など思ひ出で、買はんとせしに。財布を持たずに来たれば。それも得ならず。歸りて朝飯を終へ。六平太君と。椽側にて涼み居たるに。城戸屋の翁。枝に附きたる青佛手柑を。持ち來り。是は庭に作りたるが。よく出來たから御覽に入れますなど。語るく籠に盛りて。床の間に置きぬ。

此葉に砂糖を加へ。煮え湯をさして飲めば。香氣ありて。よき物なりといへば。試みなどする程に。六平太君。こは如何に。背中を切りたりといふ。どうしてと問へば。手に剃刀持ちゐたるを忘れて。ふと搔きたるにといふ。後ろを見れば。湯かた五六寸の長さ裁たれたり。あぶない事なりき。されど皮のみにて。疵の深からざりしこ

を幸なれなど。語りあふ程に。廣島の坂君。喜多流の門人なれば。訪ひ來つ。腹切るといふ事はあれど。背を切りたるは。お家元こそ始めならんと笑へば。昨日の友治ともはるは。主人の敵を討ちて成功したれば。切るべかりし腹を背にかへたるならんとて。皆々笑ひぬ。

### 十二 二日目の能

二日目の能は。今日も十二時を合圖に始まりぬ。津田茂尙翁の盛久。おのれ翁の能を見るは始めてなるが。謠の調子の凜然たる。男舞の雄々しく爽快なる。いかにしても。八十に近き老人のわざとは見えず。六平太君の鬼界島。島人ならぬ見物人に。涙を濺がせつるは言ふまでもなく。崎山龍太郎君の竹雪。親子の情に袖をしぼり

て。時ならぬ雪の夏なほ寒きを覚え。栗谷益二郎君の熊坂。若きながらも。師のもとに育ちたる藝は違うたものとの。評判なりき。寶生新君は昨日の清經、望月と。今日の盛久、竹雪との脇を勤め。おのれ斑女の囃子を。一番舞ひたり。その間々には。例の如く附子、空腕そらうでの狂言ありて。おもしろく此日も暮れしが。夜は梅廼舎といふ家にて。慰勞の宴會開かれぬ。歸りは大酔。いつ汽車に乗りたりとも知らざりしに。肩叩かれて振り向けば。すつくと立ちたる茂山君。俄に今日見し空腕の。思ひ出されて。冥途に淀鳥羽とは不思議なりと。見まはす程に。すは高濱とて。皆下りて行く。後れてはならじやるまいぞとて我も跡追ふ。

### 十三 鐵道めぐり (上)

能の又の日は。伊豫鐵道の唱歌作るべき頼みを受けたれば。まだ見ぬ線路を廻らんとて。眞鍋驛務監督に伴なはれ。高濱發六時五十八分の汽車に乗る。

三津驛を出づれば。右に巖島神社あり。國道の並松昔戀しく榮えて。其上にいつまでも顧みらるゝ興居島こゝしま。夏なほ寒き雪を。戴かせたくぞ思はるゝ。

富士の嶺の麓よそほふとこしへの緑や伊豫の三保の浦松

古町を過ぎ。松山市街の西を廻りて。松山驛より乗り替へ。西南の方郡中線ぐんちゅうに入れば。右に沓脱くつだき天満宮の社見ゆ。神木の梅ありて。九月朔日に必ず花さき。之に神酒を供ふれば。御顔の赤くなるといふ

不思議の神影を藏し居るとぞ。

柿の名所なる余戸<sup>よこ</sup>すぎて。出合<sup>であひ</sup>きたる。石手川<sup>いしてがは</sup>は東北より。重信川<sup>しげのぶがは</sup>に東より來りて。一つになり。海原さして西に行く處なれば。出合の名あり。西岸の松林。天を摩して緑滴る如く。その間を布なす水の。うねりく流れつゝ。涼しき歌をうたふ。心地よき限なし。

此川の鮎は殊に香味ありとて。釣竿かたげ來る人多く。月の夜げしき又格別なりといふ。河下には渡舟の今しも水を横ざり居るあり。かしこに見ゆるは金蓮寺にて。龍燈の松といふ名木ありしが。惜しかな枯れて今はなし。など聞く内に。松前<sup>まさき</sup>來る。加藤嘉明の毀ちて松山に移したりといふ城の跡は。青田の中に其名を留めつ。

松前港<sup>まさき</sup>は八百あまりの戸數にて。皆漁業をもてなりはひとし。女は

頭に桶を戴き連れて。近くの里々へ魚賣りに行く。此女をタ、と稱へ。桶をゴロビツといふは。御用櫃の訛にやあらん。城を築きし古へ。女も出で、工事を助け。土砂を桶に盛りて運びたるに。起原せり。よりにて先年。松山城の三百年祭をしたりし時。縁故を尋ねて。タ、行列させたる事ありき。あれ見給へ。松原づたひに打ちつれゆくこそ。即ちそれよ。桶には今も御用櫃の三字を焼印して居ると。眞鍋君語らる。海と山とは事こそかはれ。古雅なるさまは。さながらの大原女<sup>おはらめ</sup>なりけり。

松前女<sup>まさきめ</sup>がいたいき馴るゝ魚桶のたが古へか松に問はまし郡中<sup>ぐんちゆう</sup>に着きて下るゝ間もなく。又その列車にて引き返す。五色<sup>ごしき</sup>の濱の見に行かれぬのみ。くちをしかりき。

家づとに眞砂ひろは、旅衣色なる袖と人やとがめん  
彩濱館よりの眺望。いとよしと聞きつるものを。

#### 十四 鐵道めぐり (中)

同じ道を松山に立ち歸り。更に東の方の横河線に乗りて。間もなく  
石手川を渡る。

石手川の岸は。枝さしかはす木々の緑の陰深く。おのづから廣き公  
園をなし。十人ばかりの兵士。今しも來りて。喇叭の稽古をしつ、  
あり。桃の節句には。皆雜遊に來ると云ふ。

石手川石ふむ水の足おとをこだまに返す松の涼しさ  
立花を出で、。天山を見る。元弘の昔。土居得能の二勇士が。義兵

を擧げて。長門の探題北條時直を。討ち破りしと云ふ星の岡の故戦  
場も。近くに見えたり。

岡の名の星の光のしるべにてゆくべき道や人の見出でし

世の暗を照らして高し岡松の木の間に見ゆる星の光は

日尾八幡宮を左に見て。久米驛に着く。明治九年の頃。同學生の淺  
井君を此あたりに訪ひしに。大雷のして一夜泊りし事など。思ひ出  
でらる。今健康なりや如何に。

久米を出で、。左に四國四十九番の札所なる三藏院。右に是も札所  
の一つなる西林寺を見る。田の畔毎に梔の木ありて。紅葉し始めた  
る枝も見ゆ。

なか／＼にはつかなるこそ初紅葉秋おもしろき處なりけれ

平井にて眞鍋君は驛夫を呼び。茶と菓子とをといはれたるに。鐵瓶に塵紙袋の駝菓子を添へて。持て來たり。此外に何も有らずといふ。此線路はすべて物賣る人もなく。喉かわきても水だに得難きに。時に取りての美味珍品。甘露も是にはと。謝しつゝ飲みつ。此あたりは左も右も。松茸山多くして。殊に名高きは。津吉上村茸つよしうへむらどころと。歌にもうたふ二箇所なり。秋は臨時汽車をも出だして。賑ひ一方ならず。など打ち聞く程に。田の窪來りぬ。

乙女子の聲聞く秋や如何ならん松茸山の松のむらだち

田の窪近くには。浮島神社あり。播磨塚あり。塚は播磨の國司。來目部小楯めべのをだてのなりと云ふ。今は此村。梨林橋の名産地とはなりぬ。

横河原は。讃岐街道の終點驛なり。重信川しげのぶがはも渡りて見たく。音に聞

く白猪しらか、唐岬からかひの瀧も。など思へども。今日は時間を急げは。再び同じ汽車にて。歸らねばならず。

### 十五 鐵道めぐり (下)

立花驛に歸り。此度は土佐街道なる森松線を。東南に行く。

石井には唐金の鳥居ありて。それより見入れられたる。道一筋の奥に神さびたる森あり。伊豫津彦命を祭る。勝かつの宮とも稱へて。戦時中などは。殊に參詣おほく。椿の森にあれば。里人は椿さんと呼びて。正月八日の大祭には。臨時汽車を出だすといふ。

森松より跡戻して。石井の驛に入りかゝりに。先には心づかざりし小さき祠の上に。一もとの老松立てり。蟠る龍の勢ひ。なみくの

木とも見えねば。名はあらずやと問ふに。眞鍋君知らずとて。驛長に問ふ。驛長又知らずとて村人に問ひあるき。辛うじて兜松といふ事分りぬ。何か名將の謂れにても。有るやらん。

松の葉の兜も今は脱ぎ捨て、いたゞく霜や幾代なるらん

松山に下車して。眞鍋君と共に。龜の井といふ茶屋に行く。こゝにて鐵道會社の社長井上君に面會し。懇なるもてなしを受けぬ。清らかなる水は。座敷の床下を流れて廣く。幾百ともなき鮒の群れ居て心地よき處なり。井上君舟漕ぎ出だして棹させば。おのれも衣脱ぎすて、おりたち遊ぶ。

三時よりは。城戸屋の本店にて謠の會あり。また正客として招かれたれば。今夜はこゝに一泊す。窓の吳竹。夜半に風あり。

### 十六 十六夜櫻

顔もまだ洗ひあへぬに。龍穩寺の住職田中道圓師は。十六夜櫻いざよひざくらに案内せんとて。はるく迎に來れり。打ちつれ車にて行けば。やがて寺ある麓に着きぬ。御幸村ごかうの山越といふ處なり。一里には足らざるべし。

草葉の朝露。踏み分けくしるべせられて。少し登れば。孝子の心に感じて。正月十六日毎に咲きしといふ櫻のありし處あり。今は其謂れを記せる石ぶみの立てるのみ。櫻の事は。橘南谿の西遊記に記せるより。人の多く知る處となれるなり。此處を櫻谷と呼ぶ。師の曰く。舒明天皇この花を見そなはさんとて。道後より行幸ありしは。正月の十六日なりしが。まだ咲きてあらざりしかば。空しく

還らせ給ひしに。俄に咲きぬといふ奏聞ありて。道より鳳輦を返させ給ひしかば。今登りこし山路を。車返の坂とは名づけたりと。更に登りて。龍穩寺に至る。曹洞宗にて境内廣く。浮世離れて佛さびたり。本堂の前に玉垣したる櫻あるを。師は曰ふ。これこそ今の十六夜櫻にて。昔かの木の枯るゝ事もやと憂ひ。松山侯の御庭に接木して置かれしを。移したるなりと。庭には白萩かたへ咲きたり。こゝにて什物など觀覽し。暇を告ぐれば。師は山を出でゝ。古町の停車場まで送り來らる。

### 十七 そなたの空

馴れて住みたる高濱も。名残となりぬ。夕飯すまして。池内、寶生

の二君と打ちつれ。汽船に乗れば。見おくりの人々は。棧橋に満ちて。又來ん年の契など掛けたり。わが肱よせたる手すりの前に來て。船の出るまではお暑からうと。小菅夫人の言ひしかば。欄干に立ち盡して」と。口ずさみしに。音づれをいつとかなど。夫人又言ふ。かくて六時半。船は出でぬ。棧橋に打ち振るハンカチーフの。小さくなりて消ゆる頃。興居島も一步々と跡遠ざかる。海上の夕陽。べによりも赤き色して。彼さへ此日の別れを告げたり。餘りの涼しさに。知らずく甲板上の搖籃心地よく。眠りゐたるを。池内君風引かずやとて。ケット掛けなどせられぬ。向ふ處は何く。吳に謠の會ありて行くなり。星なす燈火の集まりて



見ゆるを。はや吳かとして目を覺ませば。いなまだ音戸おんどなるをとて。  
寶生君は笑ひぬ。(四十一年)

○花 三十日

青森線——津輕海峽——函館——北海道鐵道——

札幌——圓山——海軍大勝利——祝捷會

五月十八日。雨を侵して。十時四十分の上野發に乗る。我向ふには。冬の外套着て。白き那破崙帽子をかぶりたる人あり。僧侶ならんと思ひしも著るく。傍への人と。阿彌陀論など始めたり。近々の内。布教の爲め。滿洲に行くといふを漏れ聞く。

發車してから窓明けたるに。降り込む事なく。田端過ぐる頃。晴れ

んとする空になりぬ。

右は廣野にて。母子草あり。杉菜ありて。馬ごやし霜よりも白く。

左は上野の麓。若葉しげりて。雨の名残いと涼し。いづくも菜種はまばらになりて。蠶豆の花。今を盛と咲き匂ふ。

雨は止みたれど。苗代一二分出でたる田には。蓑笠着て立てる人。晝よりも面白く。王子の製紙場打ち煙りながら。たゞへし水に影を移せり。

富草の種こそ青め春雨のめぐみ豊けき水の遠近

浦和驛には。かなめ垣うす紅にて。紅葉の盛よりも美しく。からだちの花の白きと。相映じたる。何ともいはれず。一月以前に咲き、ほひし櫻は。既に緑老いて。蝶一つも遊ばず。

黒磯にて日全く暮れたり。向の僧侶らしき人。傍への人に。歌よみたりとて語る。上の句は聞えざりしが。下の句は。心も勇む春の車路。とありたるやうなり。この黒磯にも黒田原も。遅櫻あまたありき。豊原過ぎて。一山紅に染めて。躑躅咲きたる處あり。又山吹の多き山もあり。道の春龍膽はるりんだう。堇よりも紫なり。

乙女子が夏の衣に染めて見ん若葉がくれの躑躅山吹

白河いで、阿武隈川あぶくまがはわたる。河原に四つ手網かたげて。立てる子あり。両手ひろげて。我ゆく汽車を萬歳と呼ぶ。

山吹の花ちる水に網入れてすくひも留めよ春のゆくへを

行き行く程に。落葉籠負ひたる賤の女。躑躅のよき枝を持ちて。踏切の傍らに立てり。

天地のまゝなる人にかざるゝ花のこゝろや如何に楽しき

郡山出でたる頃なりき。かの僧侶手廻りなど片附けつゝ。福島にて下車はすれども。家までは中々遠しといへば。何くぞと問ふに。莊内なりと答ふ。莊内は一昨年ゆきたる處。最上川沿岸の景色こそ。よけれと言へば。商用にてかと問ふ。いや只遊びにと言へば。大和田タテキといふ方の。來られたる事ありしが。其やうなる道の御方にはあらずやと問ふ。今は何をか包むべきならねば。名刺を出だすにさてはと彼も驚き。おのれも不意に名を言はれしに驚く。いにし月の十九日に來て。花見せし忍山の公園。福島驛近く。見やられたり。

忍山しのぶ昨日の春くれて若葉さむけき夕風ぞ吹く

二本松ゆく頃。東の空なる雲の上より。黄金の光り佛の指の爪ほど見ゆ。さては月かと思ふ内に。さし離るゝを見れば。まん圓なり。

家人も知らじな今宵まとなる月を車の窓に見んとは

日やうく暮れて。霞む若葉の遠近の景色。あはれさ只ならぬに。

阿武隈川筋のやうに。木の間に見ゆ。

夜に入りては。月おもしろし。されど疲れて眠りしに。全く覺めたるは。尻内しりうちなりき。時に四時三十五分。雨降りたりと見え。地上ぬれ渡りて霧深し。

古間木ふるまきに。櫻の盛なるが。五もとあり。又梨の花も見ゆ。

こゝはまだ春なりけりな櫻花にはふ山邊の草の短かさ

みちのくは夏まで雪や残るらん松の木の間山梨の花

桃李など一時に咲き出で。柳緑に糸を垂れたるあたりを。雪よけの間より眺め行く程に。野邊地のへちきたりて。海平らかに見渡さる。

青森に着けば。ふるふ程に寒し。もと着たる袴の上に。フランネルを重ねて。九時出船の陸奥丸に乗り込む。昨日はいたくしけて。夕方入るべき舟が。今朝になれりといふ程なれば。客多し。

例の舟弱にて。淡路の島のおほい子學ぶ程に。早くも函館に着きぬ。四時過なり。函館山の麓の櫻。ちらほら咲きたり。

北海道鐵道の待合に入りて。辨當取る。今日はいつもと違ひ。薩摩汁ならで。玉子豆腐を添へたり。

乗合の人々。ストーブを圍み。火鉢を取り巻きて。ビールを飲むもあれば。日本酒をといふもあり。東西南北。話さまぐく花さく中

に。一人が曰ふ。札幌は面白き處にて。さながら公園の真中にて商賣する心地すと。

床屋に行けば。愛髪樓といふ額かゝれり。何ぞ我職業に忠實なるの甚しきと。いとをかし。町を散歩して歸るに。今朝ほどは寒からず。かくて時計を見ては。又そとを散歩し。古新聞を繰返しては。更に珈琲を呼び。時、年の如く。分、月の如し。

水のごと流るゝ時も待つ身には氷りて行かぬ心地こそすれ。發車は十時なりしが。一眠りして覺むれば。はや「森」にあり。

折れかへる磯波しろくほの見えて海の上くらし夜半の月影。漁村は人しづまりて。燈も漏れず。まばらにきらめく星の光。天地は平和もて満たされたり。

二十日になりぬ。二俣にて時計を見れば。四時十五分。

道のかたへには。黄菊の咲き續きたるか。菜種の盛かと。思はるゝ花多し。たんぼゝかと思れば。花の瓣ひとへにて。梅鉢のやうにもあり。福壽草かと思へば。葉の形雪の下のやうに。毛はなけれどいと丸し。露の臺は花ほゝけて。一尺二尺のびたり。蕨岱きたる。

花の名も問はましものを里の名のさわらび摘みに來る人もがな蓬は餅にすべく。董は東ね簪にも作りつべし。

朱太川を右に見て。黒松内に入る。櫻一もとありて。花まだ新し。顔洗はんとて出でゝ見るに。雨降り出でたり。名物の蕎麥三つ取る。こゝを出づれば。川のほとりに花又二もと立てり。美人の頬の色して。いと美し。

曆見ん物とも知らぬ山里のうす花ざくら夏さきにけり  
 歌棄きたる。驛長室に。櫻の大枝の壇にさしたるが見ゆ。此あたり  
 より。處々に雪あり。

山近くおりある雲の絶間には夏なほ寒き雪を見るかな

昆布川の岸にも。尻別川の岸にも櫻あり。山は大方若葉なるを。シ  
 キザクラ（辛夷）の白きと。遅櫻の赤きとが。残春の殿してぞ。枝  
 うちかはす。

木挽する谷の藁屋の軒端まで枝さし垂れてしきざくら咲く  
 數十丈ある大木の林には。櫻さへ雲に聳えて。咲き居るも見ゆ。

中々に花恨みあり眞狩山おほひし雲に似たりと思へば  
 曇りて今日は。蝦夷富士も見えず。

眞狩の停車場には。十二三ばかりの娘の。赤き帯などしたるが。片  
 手には二升樽を。片手には櫻の折枝を。持ちたるが立ち居り。父の  
 家の祝などにや。詩にもせまほし。畫にもせまほし。

兵士一人。びっこ引きつゝ下車す。待ち構へたる一むれ。萬歳を唱  
 へ。妹めきたる乙女は。急ぎ風呂敷包を受け取り。二つ四つの子は。  
 手を引かれつゝ。改札口を出づ。名譽の負傷して。歸りしならん。  
 九時半俱知安に着きぬ。蕎麥屋大繁昌なれど。おのれは鮎飯とる。  
 停車場には。頭巾着たる子を負ひて。立てる女あり。襟巻をして寒  
 げなり。

然別を過ぐ。廣き畑には。何くも人多く出で。鋤くもあり。又馬  
 にかへさするもあり。白き花の遠近に見ゆるは。梨か李か。泡とも

思はれ。残んの雪にも喩へつべし。山には誠の雪見ゆ。  
 余市よいちにも花白し。思君亭御待合といふ旗。風にひらめきて。櫻餅櫻餅と賣りに來る聲。都の空思ひ出でらる。

ゆく春の跡とめきつるかひありて思ふ君にも又あひにけり

林檎は若葉幼なくて。まだ花をも見せず。

忍路おしよろをゆけば。線路に旗振る女のそばに。同じやうなる紙の旗もちたる幼子。手を引かれつゝ立てり。母を見真似の手もち面もち。いと愛らし。

札幌に着きて。小田氏に宿る。四月に來りし時は。雪なりし庭も。若草すでに五六寸伸び。梅の花盛にて。躑躅も火ともし始めぬ。四月の十七日に此地を別れんとして。停車場に行きける道すがら。

藻岩、手稻の山々の雪。この月に我が來る時まで。残り居るや如何にとの。問題おこりぬ。米倉大倉の二夫人は。有りと言はれ。おのれは無しと答へしが。まだあの如しとて。負わざせよと責めらる。

消えぬべき雪は残りて待ちぬべき花は散りたり恨めしの世や

圓山は既に遅しと。聞くは誠か。

廿一日。晴。初雁會にて會員あつまる。

晝飯して後。米倉氏を訪ひ。庭の木のもとを逍遙す。梨の荅のべにさしたる。落葉松の心地よく若葉さしたる。言ふべくもあらず。

主人、夫人、令嬢と打ちつれて。岡田花園に遊ぶ。連翹、木瓜、梅、杏、石楠花。櫻は八重も一重も咲き揃ひて。正に百花爛熳の好時節。あはれ三十日前には。雪ふみわけて訪ひつるものを。

廻り／＼て。池ある處に出づ。藤はまだ芽も伸びざりしが。其下の  
手摺によりて。鯉を見る人多し。海老茶袴の女生徒など、あまた見  
ゆ。

かなたの二百三高地めきたる。摺鉢山に登れば。梅と杏と櫻との香  
りもて。今も包圍攻撃せらる。土筆あれば。手紙に入れて家に贈ら  
んと。三つ四つ摘みぬ。

中島遊園地の何がし亭に。休みつゝ見れば。池にはボート賑はしく。  
梢を渡り土手を行く人。すべて春なり。柳房やかに枝を垂れ。タモ  
の木は。心地よく風に吹かる。

廿二日。雨。國澤氏を訪ふ。農學校の裏門前に移られて。始めてな  
るが。今しも本屋は新築中にて。座敷をやがて能舞臺に用ひんとの

構造。いと巧みなり。橋掛は廊下にて三間。囃子方は床の間のはづ  
るゝやうになりたる處に。地謡は押入を打ち開きたる處に。着座す  
べくぞ設計せられたる。

晝飯もてなされて。謠などうたふ間に。急雨さつと降り來て。花舞  
ひ草狂ふ。一時は。雹か霰かとさへぞ思はれし。

傘借りて踏切に來れば。風いたく荒れて。傘も持て行かれんとす。  
夕暮磯谷氏を訪ふ。雨しづかなり。庭の山吹まづ目につく。

山吹の蒼しだれて何となく春ものさびし夕暮の雨

卯の花の話いでたるに。夫人は庭の木を折り來て。是がさには侍ら  
ずや。白き花こそ年々に咲けと。いはれしを。手に取りて見れば。  
まがふべくもあらず。たいそれなり。

我宿の垣の卯の花名をきゝていと盛の待たれけるかな  
と夫人のいはるれば。

さく頃は時鳥にも身をかへて夜なく訪はん垣の卯の花

廿三日。曇。庭の花盛なりとて。米倉氏にて。初雁會の歌の圓居を  
開かる。當座は。眺め出ださるゝ花のみをもて。探題としつ。櫻、  
梅、李、杏、小米櫻、躑躅、梨、海棠、芍薬、牡丹、落、あやめ、  
櫻草、山吹、木瓜、などなりき。

紫色を帯びたる夕陽。手稻の峰に春かんとする頃。をはりぬ。

廿四日。珍しき晴天なれば。圓山の遅櫻見にとて行く。磯谷米倉の  
兩夫人も。同道せらるゝ事となりぬ。

町を離るれば。たんぼ、何くも盛にて。菜種よりも美しく。緑の牧

場を。練兵場を。さては道のほとりをも。咲き埋めたり。

遠近に黄金の星をちりばめてさくや春野の春草の花

車をおりて山に入れば。薄紫の莖多く。摘むに餘念なき米倉夫人を  
見真似に。誰もく心いそがで摘む。

札幌神社の櫻は。鳥居の内外に。思ひしよりも多く残りしが。廣前  
静にて。長く垂れたる紅白の鈴の緒。そよ吹く風に打ちゆらぐ。

咲き残る花の奥山なか／＼におくれて來つる事ぞ嬉しき

戦利品納めたる庫あり。神輿入れたる庫あり。何れものぞかるゝや  
うになりたれば。人々の跡追ひて。我ものぞく。女や男や。我一行  
の外にも。少しは參詣人ありき。

温泉さして行くに。山路の左右は熊笹にて。竹の子掘り居る男。二



三人あり。鶯を聞きて。初音なりと皆喜ぶ。

散る花の雪ふみわけて鶯の初音を年に再びぞ聞く

山水の音さわやかにて。木挽する家あり。之を過ぎて猶ゆけば。大黒橋としるされたる橋あり。渡ればやがて温泉宿にて。遊仙館といふ。

若き女の案内するまゝに。離座敷に座を占む。谷一つ隔て、打ち向はるゝ岡は。ドングリなど立てたらん形して。麓より頂まで。たんぽゝの花も覆はれたり。高き處に鳥居あり。その下に腰打ち掛けて。里の童の笛吹きすさむが。聲のみか。姿まで有りくゝと仰ぎ見らる。湯あみして後。膳きたる。鮎の汁。鮎の刺身、鱒の焼物。何れもよかりしが。ツマなる山獨活ことに口に叶ひて。代りをといふに。い

くらでもと言ひて。山盛もて來つ。

若葉見るだに嬉しきを湯あみして酒あたゝむる家もありけり。時も移れば。今はとて出づ。歸りも急がで。摘草しつゝ來るに。白き花の見なれぬが有りしを。何ぞと問へば。是はアイヌ芹とて。ヒタシにすればよきものなりと。米倉夫人は言はる。三つ葉に似たる葉に。五瓣の花ぞ。美しく咲きたる。

廿五日。晴。朝飯はてゝ。北海道の竹の子は風味よし。何こから來るやらんと言へば。小田夫人は。いつ竹の子を召し上りしぞと。問はる。今の御露こそと言ふに。あれは露なりしものをとて。笑はれたり。

笹分けてぬれぬと思ひし我袖は山路の露の露にぞありける

米倉氏に行けば。林檎三つ四つ咲き初めたり。山吹も。夜に入り。寒ければ火鉢を用ふ。廿六日。晴。五時に床を離れて。心地よければ。散歩に出づ。三條橋の上に立ちて。西の方を見返れば。手稻の雪は。空と峰との間を。縁どりたる如く。消え残りたるが。ほのく霞むもなつかしく。緑滴る丸山の方には。花さへ咲くらん面影を見せ。その真下には。石造の道廳いかめしく立ちて。若葉さす落葉松、柳、タモの木などに圍まれ。其門前より三條橋まで來れる通は。今しも女學校ゆきの生徒。幾組もく通る最中にて。袴の色美しく。往來を埋めて何十人も急ぎ行くは。遠景さながら。撫子の園か。躑躅さく山を見るやうなり。

橋を渡りて。創成川の堤づたひに。南へと行く。兩岸の春草。心地よく萌え渡りて。昨日まで氷の下なりし。水の流れ樂しげに。足拍子立て、躍り。土手の櫻は時すでに過ぎて。若葉は何方も未だ老いず。

藻岩山を見れば。緑の中に花もまじりて。春やうく闌ならんとす。

遅櫻さくや藻岩の山開きあさてになりぬ誰をさそはん

残雪なほも。鷺の片羽ばかりも有るべきか。

埼玉の長鳥たか子より。詠草おくとて。裏の川には水鶏くみなの夜な夜な鳴くよしを言ひ。又蠶はタケの眠り濟みたりとあれば。櫻の花一りん封じ入れて返事す。

有りとだに知られて匂へ吳竹の眠り静けき夜半の枕に

廿七日。晴。米倉氏に行く。林檎やうく盛になりて。薄紅の雪を枝に積らせたる趣あり。

廿八日。曇。食後我室に入りて。机に倚れば。一輪ざしなる林檎の花。笑みを含みて咲きかゝりたるに。山吹一枝さしそへてあり。誰がもてこしにか。

知らぬ間に咲きてぞ匂ふ佐保姫のこれや情の春のたまもの大倉氏を訪へば。庭には西洋葵ともいひつべきジュレニアムの花紅に。うで玉子を桔梗形に切りたるやうなるキューリップ。鬱金の色して咲き居たり。

あれを見よと主人のいはるゝ。タモの木の下には。大盥に水を湛へ金魚五つ六つ遊ばせて。子達三人。唱歌高らかに口ずさぶ。

芝居に行かずやといはるゝに。賛成したれば。夫人も同道にて。三人うちつれ大黒座に入る。外題は八十日間世界一週とかや云ひし。役者の名は忘れぬ。

廿九日。晴。久野に手紙おくるついでに。

りんご原うす紅に咲きにはふ盛を一目君に見せばや

歌の添削して居たりしに。女の童きて。只今大奥様が。お茶一服先生にさし上げたいと仰せらるれば。御出で下されといふ。又耻を搔かざるべからずと思へど。折角の好意なれば。座敷に行く。

客は外に二人ありき。

遅ざくら咲きて日長き窓の内に服紗てずさぶ音を聞くかな  
國澤氏を訪へば。庭のを摘ませて拵へたりとて。蓬の餅をもてなさ

る。熊笹の葉に包みたり。

嵐山を主人と謠ひて。妄想の雲も晴れぬべし。といふ折しもあれ。號外々々と呼ばはり来る。稚なき令息。大勝利々々々と叫びて。號外手に持ち。走り込みたり。海軍大勝利。敵艦轟沈もしくは捕獲の文字こそ讀まるれ。祝はざらんとするも得られず。一家庭あつまりて萬歳と呼ぶ。

やがて祝宴も開かれ。第二號外の公報も來りて。事いよく確實となる。花火はぼん／＼と響きて空にひらめき。萬歳の聲。節分の鬼は外のやうに。家々に起る。

令嬢うめ子。

すめらぎの御いつ輝く軍船向へば波の碎けぬもなし

主人。

幾そたび勝を重ねし御軍も今日の譽れぞ千代の一時おのれ。

勇ましき鈴の響に草木みな萬歳呼ばふ心地こそすれ

伊弉諾いざなぎの神の探りし河原は我物となりぬ矛の御いつに

さく花の香りを千代に残すべき春こそ來ぬれ祝へ國民

是ぞかし我國民の眞心は立てぬ隈なき日の大御旗

嬉しとは神も聞くらん辻毎に呼ばふ勝鬨萬代の聲

足もとしどろに。黄昏頃歸り來れば。雲に聳ゆる火の見櫓に。國旗の交叉せられたるが。心ありげにゆらめき居り。

夜に入りては。戦勝祝ふ行列の團體。幾百の酸漿提灯をともし。大

行燈を高く捧げて。往來織るが如く。こなたより行き。かなたより来る。

三十日。晴。

あつくて袷一枚となる。米倉氏にて胡蝶會あり。婦女新聞の福島氏に。五月の春といふ文を送るとて。梅と櫻を封じ入れたる包紙に。

君が代のめぐみ奥ある五月山なほ越えかねて春ぞたゆたふ

都人扇の風に散らすなよ夏も八重さく花の色香を

六月一日。晴。雪なき藻岩を初めて見る。

一時より初雁會あり。

五時半より。磯谷夫人の快氣祝とて。幾代といふ茶屋に招かる。軒の藤棚さきそめたり。房の長さ三寸。

二日。曇。後晴。札幌神社の戦捷奉告祭と。區民の祝捷會とを。圓山にて催すといへば。散歩がてら見にゆきたるが。社の前の廣野原は。人と旗とにて満たされ。携へ行きたる握飯を開かんとすれど。腰掛くべき木蔭だになし。歸りて大島氏によりたるに。萬歳の聲こだまに響く。道廳前なるべしとて。出で、見れば。旗行列は。四條通より橋打ち渡りて。區役所に歡呼しつゝ、行くなり。各學校員、道廳員など打ち過ぐ。

また製麻會社の行列をも見つ。軍艦二つ。馬二疋づゝにて引きたり。其外地球の上に。東郷大將の乗りたるあり。囃子の一組ありて。中賑はし。工女八百人。前後に旗持ちて行く。紫袴なるあり。海老茶なるあり。前垂掛もあれば。子を背負ひたるもありき。

二日。晴。曇。つひに雨。九時より大島氏にて。戦捷祝の歌の會あり。探題は。海軍大捷、東郷大將、萬歳歡呼、提灯行列、滿艦飾、祝捷祭、新聞號外、祝盃、花火、などにて。夕方まで語り興じつ。久野より葉書きたる。

畑の豌豆は南天と丈くらべして。實も大きくなり。雪の下一花きのふ咲き初めたり。

三日。晴。足立氏を訪ひて庭園を見る。おんこ緑に。つゝじ紅に。りんごの花は白く。えにしだは。山吹と共に口なし色なり。猶それよりも嬉しかりしは。霞み渡れる藻岩と。人馬ちひさく行き通ふ豊平橋とを。若葉の木の間に眺め出だしつゝ。鬼の面を伏せたる形の樽

前山まで。遠く指さるゝ景色なりき。かう子令嬢が一昨日の會に。

我庭は木々の若葉の茂り合ひて見えすなりけり遠近の山とよまれしは。是なりけるよ。是なりけるよ。

それより約束したる内藤氏に行く。大島、磯谷、米倉、佐藤、小田の五夫人も。同席なりき。

こゝも庭ひろくとして。若葉涼しきおんこの。龜の形したるあり。笠に似たるあり。鏡餅のやうなるもあり。八重山吹は盛に。躑躅は紅なるも紫なるも美しく。軒の藤棚。房は五六寸を出でざれども。色いと濃くて。今を時ぞと咲き匂ふが。夕日にて更に染められたり。あるじの出だされたる短冊を取りて。

言の葉の及ばぬ庭は山吹のいはぬ色こそ羨ましけれ

手製の羊羹なりとて。茶など勧めらるゝ程に。盃も浮びぬ。刺身のツマなる。紫蘇と山椒の若芽は。北海に珍しと。口々に言へば。庭に作りたるなりと。夫人かたらる。

入りし日の影に別れて山吹の花に風見る庭の静けき

短冊大島夫人の前に廻りゆけば。

若萌の木の葉まばゆき夕日影にほひぞ添はる軒の藤波

磯谷夫人。

紫の色なつかしき藤波のかけに歌よむ今日の嬉しさ

小田夫人。

庭の木の姿ながめて朝夕にそだてし人の心をぞ思ふ

佐藤夫人。

世の中の憂きに曇りし心まで晴れて嬉しき庭の面かな  
瓶には桃の枝をさし。夫人の方には白酒を出だされたれば。雛棚な  
きのみ事足らぬやうなり。

都には三月おくれて咲く花のいのち三千年のぶる今日かな

暮るれば藤棚に。七夕提灯三つ四つ燈りぬ。

開け行く世には一つになりにつけり雛の祭も星の逢瀬も

庭にもあまた蠟燭を立て。石燈籠も明るくせられたれば。更に美し  
くなりぬ。

ともし火の花をちこちに咲き出で、夜も春ある葉がくれの宿

今日くる時は。フランテル一枚着て行かんといひて。小田氏にとめ  
られしが。げにも歸りには。綿入欲しくこそなりにけれ。

四日。晴。東臯園に行きたるに。あるじの翁は牡丹を指さして。あれは御祭時分盛なるべし。多き時は。一もとに二百六十輪ほども咲きぬ。先年越前の牡丹作りと。互に誇り合ひしが。彼は百八十輪と言ひたるにて。我勝ちたりなど自慢す。

五日。曇。寒し。小田氏より注文せられしとて。岡田花園より藤二鉢もてきつ。

軒端より垂れし氷柱の面影に咲きてぞ靡く白藤の花

夜は大倉氏と。活動寫真見に行く。英國人の千鳥見物。いと面白し。六日。晴。食卓には鈴蘭と松葉菊とあり。米倉氏を訪へば。きよ子令嬢と。おたかといふ小間使と居り。いにし日かけをしたる。離座敷の庭の牡丹。二輪咲きたりと告ぐ。やがて見に行きておのれ大氣

焔となりぬ。おのれは六日といひ。きよ子は十日。おたかは八日といひたりしなり。

大君と立てゝいよく敬まはん我を勝たせし君は此君

今日よりフランネルを着る。夜も羽織なくて寒からず。

七日。雨。婦女新聞きたる。苺いちごの料理法を載せたり。都は其時節や來にけらし。こゝはまだ初花わづかに開きつるを。

九時より初雁會あり。

磯谷氏を訪ひて。卯の花一枝乞ひ得て歸る。六七分咲きたり。

今宵より寝もせで待たん時鳥花ある宿と訪ひもこそすれ

八日。雨寒し。人々給にてはとて。綿入取り出だす。夕飯時には。火鉢に火を赤々と入れたり。



大島氏の胡蝶會に行きての歸るさ。米倉氏によりたれば。牡丹多く咲き居て。林檎は花大方あらず。時の間にも變はる物かな。  
 九日。晴。卯の花盛なりとて。磯谷氏にて今日も。胡蝶會を催さる。  
 十日。晴。初雁會あり。  
 十一日。晴。製麻會社俱樂部にて能あり。番組は。嵐山、忠度、雲雀山、鞍馬天狗の四番。おのれは忠度と雲雀山とをしつ。姫は大島みつ子令嬢なりき。  
 久野よりの手紙に。紫陽花、時鳥草、れんげ草など封じ入れて。御庭のさま御覽遊ばされたく候。とあり。又七日には。中野の小學校生徒。手にく螢籠を提げて。行列し來り。二重橋にて放ちたりなど告げおこせぬ。

ほたる籠手ごとに提げて都路をねりゆく乙女見たかりしかな。今までは大がいまきを寢巻とせしが。今宵よりフランネル一枚となる。さるにても。

故郷は蚊屋釣る頃となりぬらん火桶戀しき夜さへ多きを

米國大統領中に立ちて。媾和を成功せしめんと。風説傳はる。

十二日。曇。大竹政子來る。女學校の遠足にて。手稻山に登れり。て。谷間の姫百合房やかに。コップにさして贈れり。香り室に満ち渡る。

十三日。曇。大島氏にて胡蝶會あり。

夕方より約束にて。大竹氏を訪ふ。明日より札幌神社の大祭とて。何くにも幟の柱立ち。南二條には山車の準備も出來たり。

氏が庭の白牡丹。一つは咲き初めぬ。二つはまだ蒼なりき。  
 十四日。薄曇。床屋に行きて髪刈らす。何くも祭らしくなりて。竹の子くと呼び来るあれば。お花く芍薬に牡丹と。活花賣りゆく女ども。足しげし。札幌神社御祭禮と書きたる大幟は。遠近にひらめき。軒灯提、辻提灯出で。國旗に風のどかなり。  
 節子川を渡る。

雪よりも白き家鴨の影二つうかべる水に夏は來にけり  
 十五日。雨。中野清子より。直して返したる詠草の禮をいふとて。時鳥の初聲よりも嬉しうて。と有りしかば。こなたからも櫻の花かきたる氣高に。都こひしき春風ぞ吹く。  
 又牡丹の花びらの落ちたるに。

花の名の二十日三十日と數へつゝ都に歸る日こそ待たるれ  
 と書きつけて。久野におくりつ。

朝は赤飯に煮染そへて出ださる。故郷の祭おもひいでられたり。  
 夜は少しの雨間待ち得て。町をそゝろあるきす。拓植銀行のイルミ子ーション。花よりも美しく。丸井呉服店の前なる慈善市にては。夫人令嬢真心こめて。御素通はなりませぬなど言はる。神輿のお渡りは。雨のために遂に無かりき。  
 十六日。晴。宇野氏を誘ひ。大島氏を訪ひ。米倉氏を訪ふ。神輿の渡御ある頃。俄雨降り來て。車上の神官。祭服も烏帽子もしと、なるを見つ。

十七日。曇。今日立たんとするを。大倉氏送らんとて來て。まだ時

問あれば。東臯園の牡丹見に行かずやといはるゝに。伴なはれ出づ。花守の自慢話も誠になりて。黄金の蕘。猩々緋の花びら。色も匂も園に溢れぬ。

培ひし人の心の深見草まれなる花の色に見るかな

黄にて桔梗の長きやうなるを問へば。北海道特産の萱草なり。それも由仁ゆにあたりより。早來はやきた、苦小牧くまこまいの邊り。十四五里内外の地ならでは少なしといふ。

停車場には。見送の方々待ち居らる。四時四十二分の發車なり。大沼によりて。北海道の松島を見る考なるよし語れば。宿りは紅葉館とて尋ぬべしと。教へらるゝもあり。夜汽車なほ寒し。風な引きそと。注意せらるゝもあり。

汽笛鳴りぬ。顧みれば。招魂碑の森も早あとになりぬ。(三十八年)

## ○日光 嵐

小山—思川—鮎狩

### 一 おくれがめ

寒の鮎狩又一興なるべしとて。日光おろしに吹かれがてら。下野の小山さして汽車に乗らんとす。門松まだ新らしき四日の十二時二十分なり。

待ち居らるゝはかの地の山口氏。同じ車にてと約せしは。故郷を見舞はんとする大槻氏なるに。遅かりき。二三分の怠りにて。煙を目の前に見ながらも。俊寛となりたる身の悔しさ。足ずりすれども既

に及ばず。

寶舟乗らんとしつる初夢のさめて悔しき戀もするかな

茫然として見送り居る赤ゲットの境界。そも大晦日に。大祓せざりし罪の報いか。次の汽車までは三時間もあれば。其よし電報出だし置きて。淺草までそろあるきす。何やら手が淋しきとて。思ひ出づれば。又こそ失策。杖をかの電報かく時に。プラットホームに忘れて來りしなり。北海道よりつきて歸りしサビタのなれば。惜しさ悔しさ物に似ず。

忘草つむと知りせば老の坂杖はつかでも越えまし物を

老いたりとは自ら思はねど。酒の科とは人や見るらん。乗りおくれざりせばと。汽車のみ恨めど。死んだ子の年なるを如何にせん。

## 二 冬の夕暮

蓮田を過ぎて日は入りぬ。燐を残す西の空に。漆畫の如き富士うつくし。まばらに立てる田中の枯木に。見えつ隠れつ。ながめらるゝ程に。早くも栗橋過ぎて。利根川を渡る。

赤かりし空は。口なし色うすくなりて。暮れそむる水の遠近。遠くは一帶の煙に包まれ。近くは旅泊の小舟に燈火を見る。あなさびし。寒梅の苔に似たる星の光は。三つ四つ五つ。水に浮びて。七十里の大川。流れいよく白し。

## 三 山口氏に宿る

小山來りぬ。迎へられて下りたるに。袂をさぐれども切符なし。八

犬傳行徳のくだりの小文吾が。姿繪失ひたる時の如くに。懷をさぐり。帯の間をさぐり。はては外套のかくし隈なくあされども。遂に見えず。驛長は乗りたる室をさがし。もし有りたらばと車掌に頼みなどして。宿りに行くまでの猶豫を與へられしを命に。山口氏に着きて衣をとき改めしかば。ころりと落ちたるは嬉しけれど。面目なさは。かの乗りおくれにも。杖忘れたるにもまさりたり。さるにても是にて三四の厄おとしはすみたれば。

運の直る年の始めと笑はるゝ門に吹くなり春の初風

早くも春風暖かに。盃を浮め出だして。思川の鮎は。膳にも話にものぼりぬ。

あるじは雪消え梅咲きて。アイソの取るゝ頃に至らば。ふる年の鮎

も更に肥え。丸太の洗ひなどもゝてなし申さん。其頃重ねてといはるゝを。いや秋の初茸狩も興あらん。千本しめぢも味よきを。鮎は瀬につく前とし。四季の内に最も珍重せらるゝ時期なるをと。大槻氏また再遊をも三遊をも説かる。

明日よりは梅咲く春と思川思ひや瀬々を離れざるらん

思ひしよりも暖にして。今夜は日光おろしも吹かず。赤城嵐も見舞はず。

#### 四 河 狩

夜は明けたり。空晴れ渡りて。憂ひたる風の音もなし。

時刻よしとて導かれ出でしは。十時頃なりけん。町を過ぎて宇太さ

んといふ漁夫の家に行き。山口氏は舟の事など謀るべし。かなたの岸より河原に下りて。少し上へ行けとの事なれば。大槻氏とおのれとは。観晃橋としるせる長き板橋を渡る。下りゆく水は鮎の名香ばしき思川にてうねり／＼二筋來りて。末は二つになる流れいと面白く。見渡す天の一方には。雪を蒙りたる日光山まがふ方もなく。その右には那須の嶽。左にはまだ白からぬ。太平、赤城の山々あり。猶左にとたどらば。富士も見ゆべしと教へらるれど。あまりのゝどかさ。霞隠れしたるこそ惜しけれ。橋を真直に行けば。朽木街道いと廣し。右なる河岸には掛茶屋ありて。婆々一人居れば。大槻氏たばこの火を借るとて立ち寄るに。店先に小さき釜ありて。芋焼く煙あたゝかげに香り出づるを。一つ呉

れずやといへば。婆々は蓋あけて見て。まだなり／＼少し待ち給へといふ。

日なたは暖かなり。舟の用意もまだらしければ。その焼くるを待ちて行かんと。二人床几に掛けて茶など飲みつゝ。子供の母にせまるやうに。まだか／＼と。幾たびも問へば。問はるゝ毎に蓋を取りては。もう少しなり／＼と言ひては。打ち返し箸つきさして。出來たるや否やを試む。さながら芝居の幕明前に。太鼓を打ち。拍子木ならして。見物人を退屈がらせぬ趣あり。蓋とる毎に顔さし出だして待ち遠がる客人。孫もある身にと笑はゞ笑へ。幕明き待ち兼ね幕の間に首さし入れて。舞臺をのぞく長松まなぶも。人情には。老と若きとの二つあるまじ。

芋も熟しぬ。舟もよしとて迎へ來たれば。河原をや、下りて乗るに。山口氏は竿とりて待ち居り。漕ぎ出づるまゝに。深き處に至れば。鮎多しとて。大槻氏はヤスの柄さしのばして立つよと見るまに。ねらひすまして。一突に鮎一つ得たり。今日の占方いとよしと。皆々勇む。猶も下れば。漁夫は別に小舟浮めて。待ち居たりしを。河の中は寒ければ。河原より見るべしとて。おのれ等は舟を捨て。汀に添ひて。此たびは上へくと行く。鵜繩と稱する一筋の白繩は。引き伸ばされて水の中にあり。その片端は陸なる一人に握られて。たぐり寄せらるれば。鮎の道は之にせかれて。繩ゆく方へと一ところに集まるを。漁夫二人舟に待ち居て。

網を投ぐ。二たび三たびは。只一つ二つの得物なりしが。やうく運命は我手に落ちて。一網二十三十の多きを來しぬ。舟にも勇み陸にも勇み。興いよ／＼闌にして。早くも真砂の上に。産むしろは打ち敷かれぬ。まづ休戦してと。主客こゝに集まり。山口氏は兵站の事務とる長官となり。河原の真砂を並べて土突を作れば。かの宇太さんは部長となりて。得物の魚を串にもし。鱈にもして。襖一つの隔てもなき千疊敷の座敷に運ぶ。さるにても此すゝけたる爛鍋の古風さは。高倉院の御代にありけん仕丁の宴にも。用ひられたるやらんと笑へば。失念し來りて。近き家より借りたるなればと。山口氏説明す。林間ならねば折り焚く紅葉はなけれど。題すべき石は河原を満たすに。

詩のなきのみこそ今日の疵なれ。

日は正午を過ぎて。雪の山をば近くに見ながら。暖かき事梅さく頃にも劣らず。一眠りもしつべきばかりに酔ひて。外套さへ忘れて立てば。漁夫は又一網せんとて舟漕ぎのぼす。此川の流れを堀にして。田原藤太の城かまへたりといふ岡あり。里人は今も城山と呼ぶ。先の年よりは。世に亡き星亨氏の別荘となり居れば。その樓上にて一酌せんとて。山口氏更にしるべす。

水の景色遠山の姿。又おのづから趣をかへて。我乗り捨てたる舟も畫の内に入りぬ。

思川おもひのこして二荒山再びとはんあいそ取る頃

山口氏は菜種の美しきを説き。その兄人は千本しめぢの秋こそと異

論を立つ。(四十一年一月)

## ○河 千 鳥

小山——思川——あいそ狩

小山に着きたるは十二時前なりき。書もて招かれたる大槻君は。佐藤病院長。山口旅館の主人と共に待ち迎へて。此雨にいかゞと思ひしかども。あいそ狩は。今日をおくらされぬといふ眞盛なり。舟の用意もさせてあれば。晝飯すまして直にと急がさる。水上の雨景かへりて妙ならんなど語ひあひつゝ、勇むほどに。車夫も揃ひて河岸なる船頭の家に伴なはれぬ。

流れて利根に入る思川の水は。平假名の「く」の字を逆さまに書き



たるが如く。欄干の下を流れては。歌ひ躍りつゝ走り行く。かなたの岸には目もはるかなる若木の林ありて。花よりも美しき新芽の打ち煙り。薄紅に見え渡るも面白く。晴れたらば富士の見ゆるといふも同じ眺めの末ぞかし。林を縫ひゆく雨傘の月影。おぼろながらも一つ二つ折々に見ゆ。

あいそ網打つ瀬やいづこ簀着たる舟人見えて雨ぞ淋しき

やがて魚田にもしフライにもして。大皿に盛りたるを肴にと盃を勧む。

あいそは鯉と鮎との間に位すともいふべき形して。縦に引きたる紅の筋美しく。味も鮎に似て軽く。小骨の多きは鯉以上なるべし。さて此魚の季節はと問へば。梅の散る頃より産卵し始む。之を瀬につ

くと稱へて。苔のつかぬ清き小石ある處を撰びて。群集するところが。苔や、滑かなる石を好む鮎と反對なり。よりて絶えず河瀬の石を拾ひ上げては。洗ひ清めて投げ入れおくを習とす。かくて花咲き花散る頃を最もよき時期とし。五月の末に至りて。やう／＼捕れぬやうになり行くなりと。佐藤君は語らる。

いざ河にといはれて。百何十間といふ長橋を渡れば。屋形したる舟は岸の下に待ち居たり。乗らんとするには。蛇籠七つ八つ斜に積み並べたる上を。はだしになりて傳ひ下らざるべからず。人には二階の階子おるゝ心地なるべけれど。肥滿せる我身のためには一の谷の坂落し。大汗になりて辛く船ばたに取り付きたり。

船には長机ありて。之を中にしつゝ相向ひ座すれば。臚なる厨に老

漁夫の居て。針金を下げたる自在の下には。早くも柴打ち煙りて。すゝけたる大薬罐の蓋は躍りつゝあり。舟河上へのぼる。右には岸高く。田原藤太の古跡といふ城山ありて。松杉の青き間より。花白く見ゆ。誠に盛は今なるべし。林の奥に家あるは。世に亡き星亨君の別荘にて。この一月に遊びたる處なれば。いとなつかしきを。雨に隔てられて。まだ三時なるに薄暮の氣色なり。

まだ網入れぬに。魚は再び膳にのぼれり。此度は白焼となり。更に味噌汁に浮き沈みます。盃も打ち置きて。さながらの鯉こくなりと舌鼓打てば。いな鯉ならでアイソコクなり。祖國を愛すとは。名こそめでたけれと大槻君戯むる。

君がため名もなつかしき父母の國をもてなす舟の内かな

君の故郷は小山なるが。此頃歸省し居らるゝなりけり。

是のみならで。水を肴にし。雨を肴にし。花を肴にして興する程に。いつしか日も暮に近からんとす。いざ一網をと促せば。捕るゝか捕れぬか試みんとて。いと小さき舟に五人打ちのせ。石顯はれたる淺瀬のかたに漕ぎ寄せたり。雨をやみなく。岩かむ水凄き程に白し。網を左の臂に廣げ掛けたる一人。水踏み分けて前に進めば。之に續きてから手の二人。鷺の如くに水の面をねらひつゝ行く。何くか瀬に附くと。偵察の事を掌るならん。

ざぶりと投げおろす網と共に。二人走り寄りて。網の端を兩方より押へたり。網に源三位の矢の鋭どさありや知らねど。にがさじと全

力こめたる猪の早太は。一騎當千のつはものと見ゆ。  
 漏れたるをば素手にてつかみ。かゝれるをば網ながらに引き上げ。  
 船板に打ちあげたるを見れば。腹白く脊赤く。鉢の金魚をすくひ上  
 げたるならずは。渦巻く瀧壺に梅と紅葉をこきちらしたる様なり。  
 愉快々々と人ごとに褒むれば。漁夫は我物がほに。今日はまだ獲物  
 の少なきを説く。數へて見たれば。大小ませて八十ありき。  
 河原には。小舟を傾けて風よけの壁とし。雨傘一つ立て、天井に代  
 へ。焚火して酒など飲み居る一群あり。何ぞと問へば。あいその捕  
 るゝには時ありて。夜も折々出で、は網打つ事なれば。漁夫のかは  
 るゝ河原に居て。夜を明かす番小屋なりといふ。  
 せばき家ひろき天地住む人やいかにわびしきいかに楽しき

楽しみは盡きねど。風寒くなりたれば。橋のかたに向ひつゝ舟漕ぎ  
 下す。とぼりゝと渡り行く人も少なくなりて。城山の花なほ。薄  
 墨色の雲に透かして。面影を殘せり。  
 かしこに燕がといふ人あり。いな黒からずして尾の長ければ。鶺鴒  
 ぞと又一人いふ。鶺鴒は今居る筈なし。あれは河千鳥といふ鳥に  
 て。河原の石の色したれば。見分くるに難しと。山口氏は懇ろに其  
 形まで言ひ聞かせたるにて。争は止みぬ。びよゝと鳴く聲。よし  
 きりかとも思はれたり。

打ち連れて遊ばん物を早からは友なし千鳥日の暮れて鳴く  
 顧みれば番小屋のともし火一つ。暗を破りて螢よりも淡し。  
 山口旅館に歸れば。あるじ紙持ち出で、歌をと云ふ。やがて筆さし

ぬらして。

思川思ひをこめて打つ網にはづさぬ宿の榮をぞ知る  
明けなば立たんとて枕に就けば。魚なほ夢に來りてはねつゞ躍る。

(三十一年四月)

### ○雨の高尾

高尾橋を渡れば登山口となる。今は緑こまやかなる櫻の林の木の間より。分け入るべき山路はるかに見入れられたり。

こゝに茶屋一つあり。入りて休めば。豆の入りたる搔餅に。入れたての煮花をすゝむ。

自轉車にて來りし人。人力車よりおりたる人など。外にも腰掛ける

て。雨にならねばよいがと。口々に危ぶみ居る間もなく。さつと音して。店の前なる石燈籠はぬれそめたり。

夏の日によられし草もぬれてこそ山路の色はみやびやかなれ  
不動院といふを右に見て。少しのぼれば。岸にしたゝる山水の。集まりて糸の如く落つる處あり。初見の瀧など稱ふるにやとて。山内の繪圖を見れば。清瀧といふ名を書きたり。此あたりより始まりて八十八箇所の大師様は。散在して山内至る處に祭られ給ふ。

登山者たる身は。一つ／＼に巡拜して過ぐべきなれども。あまりに多ければ。果は粗末にならん事を思ひ。代表者たる御一體に御斷を申し上げんとて。まづ一番のに懇ろに低頭す。雨小降りになりぬ。片山道の靜なる處を行くに。山紫陽花の半ば開けたるも。まだ蒼に

て玉の如きもありて。岸の上より逆さまにこなたを向きて。枝打ち垂れたるが。葉ごとに花ごとに。雪より白き露を持ちつゝ。風もなきにときくゆらめく。牡丹ともいへ。百合ともいへ。いかでか是にと。めでつゝ傘を傾けて立てば。空より降るものはさはらずなりぬ。

道より折れて右に入る。登りに蛇瀧を見て。下りに琵琶の瀧を見るが。便利上よかるべしと。先の茶屋にて教へられたるによりてなり。雨はやみたれど。峻しき坂道。すべる岩根を踏みしめく。恐る恐る下る。苦しきは苦しけれども。藤袴あり草萩あり。何となく香ばしき山土のぬれたる匂ひを。かぎつゝ行けば。足に豆の出でつゝある事も。いつしか忘れて。早くも瀧の見ゆる處まで來にけり。

瀧はさして大きからず。はた高からねども。仰ぎ見る巖の間より。老いたる獅子の狂ひ躍りては飛び落つる如く。たばしる白玉霧となりては。水垢離とる人。隠れては見え。見えては又姿を失ふ。

瀧のもとには參籠堂ありて。信徒はこゝにて衣類をぬぎ。又みづから米など持て來て炊くもあり。今日は折しも數十人の講中。此せまき處に集まり來りて。瀧のあたりは人ならぬ方なく。しぶきにぬるゝ處までおり立たんとするに。餘地なければ。再びあともどりして。別の道より上りに向ふ。

そもく此瀧。蛇の文字を以て名づけしは。昔この處にて。蛇の樵に殺されたるを。一僧の見つけて助けしより。其報謝にとて。龍王の授けし瀧なればなりと聞きて。

瀧の名の八俣おろちの八乙女を呑まんと開く口やこの口  
 上る山道にて。美しき花ひとつ見つけぬ。莖の色して五角星の輪廓  
 をなし。葉は昔ちさの葉ともいふべきなれば。假に流行の詞を借りて。  
 星すみれ草と名づけつゝ。心を留むれば。こゝにもかしこにも草陰  
 に笑み居り。

時にかなたより來りて行き違ふ中學生徒。見れば此花を手にして居  
 たれば。名を知り給ふかと問ふに。岩菜の花なりとぞ答へし。

花守はいはいはなん残しおかば瀧見る人の踏みもこそ折れ  
 摘みてはふところ紙の間に挟み。根ながら掘りては鉢にせばやと持  
 ち行く。

道急になりて呼吸くるしく。玉なす汗は眼鏡を曇らす。暫くハンカ

チーフを手にし立ち居るに。慰め顔なる小鳥の聲は。高き木の梢に  
 聞えぬ。ひよどりなるべし。

古へのひよどりごえもかゝる時一聲きゝて名づけそめけん

本道に出づれば。左右に立て並べたる板札の垣根あり。杉苗百本、  
 千本、萬本など。奉納の數をしるして。おのゝ國里の名と姓名と  
 をあらはしたるが。幾町も幾町も續きたり。

行く人も歸る人も。讀むともなしに之を讀みては。こゝに金持庫藏  
 といふがある。慾張つた人なるべし。あれには手賀きくとあるなら  
 ずや。女の名なれば裁縫の名人ならんなど。たわいもない事語り興  
 じ行く。足の疲れ忘れしむるには。よき藥なるべし。

西南のかた遠く見やれば。もやの間より白きもの見ゆ。川にやあら

んとて猶見渡すに。山を越して海こそありけれ。川と見えしは。馬入川のうねりゆくにて。海は即ち相模洋ならし。道やう／＼盡きんとする時。雨また俄に篠つくやうに降り來りて。一つの絹傘にては凌がるべくもあらねば。人々一しぼりとなりて。山門内の茶屋に駈け込む。

我も其一人にて。わづかに床几の一隅を占めたれども。たゞ一つの軒下に。同じ木陰を頼む老若。臂突き合ひてくつろぐべくもあらず。晴れたらん日は。見出だすながめこそと思はるゝ一方。さながら海の如くになりて。眼にすべき物もなし。

三抱へもあるべき杉の並み立てる神山くらく雨は降り來ぬこゝにてサイダーを飲み。くだものを食ひ。携へ來つる握飯をも盡

したれど。雨なか／＼止まず。

時は十二時を過ぎたり。遂にぬれながら出で。本堂を拜し。高き石段を鐵のくさりに助けられつゝ。飯綱權現堂にのぼる。寶前を守護する烏天狗の立像。處からいと物凄し。

登山者の拜みめぐる處は隈なくめぐりて。下山にかゝるに。うす日さし來ぬ。十二國見晴臺にと。心は飛び立つ如くなれども。遠近の雲霧。いまだ江島大島のながめをばゆるさじと思ひて。只一みちに琵琶の方へと志す。

道細うして草の露滋く。谷深うして鳥の聲幽かなり。それかあらぬか底の方より山彦かへす物こそあれ。聞くだに身にしむ心地して。急ぎ下れば。參籠堂の板屋の軒先づ見おろされつゝ。落つる山水。

いまだ何くよりとも姿を見せず。  
 不動堂ありて。其前に出張せる僧のひかへ居る處は。其うしろやが  
 てかの板屋の堂にて。瀧に打たれに來る精神病者の。絶間なく參籠  
 する室なりといふ。

不動堂の山を右にめぐれば。即ち瀧のもとなり。瀧は名に似て。琵琶  
 を立てたる形したるに。糸は四筋五筋ならで。千筋八千筋。猶そ  
 れよりも數多き糸を。天女の手ならぬ。修羅王の手よりつかみつゝ  
 るが如く。集まりては雲間に躍る神龍となり。散りては盤上にまろ  
 ぶ白玉となりて。山を響かし巖を動かし。ぬれつゝ立ち給ふ不動尊  
 をゆるがしつゝ。四絃一聲帛を絶つともいふらん聲して。さくなだ  
 り落つれば。岸を埋めて咲き誇る紫陽花。寒さに堪へずや。花も枝

も絶間なくふるふ。こなたの小高き處には。辨天神女の石像一つ立  
 たせ給へり。

今しも精神病者三人ゐて。瀧壺の處に直立し。ひとしく合掌しつゝ  
 何やらん口に呪文を唱ふれども。瀧のひびきに打ち消されて。詞は  
 聞えず。落ちくる水は。頭を打ちては全身を掩ひ。針と散り氷と碎  
 け。煙となりては。顔さへ姿さへ隠すかと思へば。又ほのかに面影  
 を見せ。此世の人ならぬ心地のせられて。凄さいはんかたなし。監  
 守せる人ありて。こなたより鯉呼ぶ如く手をたゞけば。それぞと知  
 りて上り來る。かゝる人かの堂には幾十人も詰めて。變るゝ時  
 間をさめてあびさするとぞ。  
 かの堂の前なる床几に歸りて。瀧川を下に見おろしつゝ。暫く休む。



病者の間には。只の人もあびるが多し。おのれもとかの堂守は勧めたれど。聞くだに震はるゝ心地して。さる勇氣も出です。此たびは二軒屋といふ茶屋の前を過ぎて歸る。足いと軽くなりつゝ。早くも高尾橋の茶屋まで歸りぬ。あるじの女茶を持ち出でゝ。紅葉の頃ならばといひつゝ。其美を我物顔に説き誇る。(四十一年八月)

### ○波 枕

房總鐵道——銚子——曉鷄館——犬若

#### 一

一日二日汐湯あびて來んとて。兩國より汽車に乗る。二月廿二日の午後なり。よもやと思ひし空は。誠になりて。ヒのかたちの硝子に。

晝が、れそめたるは。千葉過ぎてなりつらん。

佐倉より銚子までは。夜に入るまゝに。瀧なす大降りとなりて。見るものもなければ。たゞ我ともに旅人三人。三等室の廣間を三分して。おのゝ其一を占むるのみ。曉鷄館まで行かんといふ車夫なければ。一夜の枕を大新旅館に借る。

土地の紳士の送別會とかにて。隣の春は堂に満ちたり。西陽關を出づればなどいふ吟聲。三つの緒琴の絶間々に聞ゆ。

#### 二

明くれば空晴れたり。朝飯もてきたるに。ゆうべも今朝も魴鮓なれば。又かといへば。此頃は魴鮓と。ムツばかり取れますといふ。牡

蠣はと問へば。川牡蠣とちがひ。冬は海荒くて底にもぐる事かなはねば。夏こそ其時節なれと答へぬ。

箸おきて川口に遊ぶ。小高き明神の岡に登れば。右には漫々たる太平洋。寄せくる波の。折れ歸りては。磯に碎けて吼え叫ぶ聲。仇見たる虎とも聞きつべし。

水を隔て、打ち向はるゝ常陸の國。出つ入りつする。海岸を縦に眺むるけしき。地圖に物いはせて見る心地す。

波の花霞む鹿島の十八里百里の春も是よりや立つ

海ならば鯨とも見ゆる一かたまりの。雲か空かの間に立てるは。戀の淵となる水原なるべし。

春なれや筑波遠山二つある峰とも見えす打ち霞みつゝ

七十四里の旅の歩みを。こゝに止むる阪東太郎は。左の方より急ぎ來りて。かなたとこなたの洲先の鼻にて。打ち狭められ。さながら分銅の形したるが。碧色濃き春の水には。海の花散らしたるやうに。帆掛けてのぼる舟こそ。あまた浮びたれ。

町に歸れば。我もくゝと面桶めんつうドラ手ん手にかゝへて。船頭どもこのなたに來るは。是より漁りに出でんとなるべし。えいやくゝと掛聲合はせて。六七人の舁き行くを見れば。六尺に餘るマガロにてぞありける。

## 三

曉鷄館に至れば晝に近し。今しも丁度。湧きたりといふ汐風呂に入

りて。更に風光壯大を極めたる。大海原に向ふ。岩づたひしつゝ。鷗の遊ぶ長崎は。右にあり。中空高く立ちて。夜は船路を照らすべき犬吠の燈臺は。左にあり。泡と渦巻き素麵と流れて。波の寄せかへる磯を前にしつゝ。歌おもふ心地。誰かは知らん。昨日は四疊半の紙の間に。置きかねたりし此身ならんとは。

女やがて一枚の板もて來り。お肴はと問ふ。刺身はメヂなりといへば。魴鮓ならぬこそ幸よとて。それに定め。君ずしとは何ぞと問へば。鮓飯にしたる肴に。玉子の衣かけたるやうの物なりといふ。それもよからんとて。誂へたるに。羹の蓋を開けば。猶こそ魴鮓は顯はれたれ。

仁王のごと立つ岩雄々し獅々のごと荒るゝ波凄し寄せて碎けて

物にしるして盃出だせば。女は早くも何くか行きぬ。

## 四

湯かたにドテラ重ねたるまゝにて。磯づたひしつゝ犬若まで行く。外川とがはは全村漁戸なるが。老若男女の百人ちかくの人々。濱に出で籠打ち積みて物語し。笑ひ興じつゝ。待ち居るさまなるは。光ある希望や。目前に近づきぬらし。沖には綱引の大舟小舟。列をなしつゝ。波のまに／＼ゆられ居るが見ゆ。

村を過ぐれば右は山なり。春いと早くして。枯生を装ふたんぼの花。摘まば諸手に餘りぬべし。薄紫なる大根の花をも。一莖見出でて手帳に挟みぬ。

犬若は入口見に人の來る處。波間に美人を眺め送りて。歸りし昔は。十年の上を四とせ過ぎたり。

犬若の沖まで高き春の日を置きてやいなん貝や拾はん

## 五

晚酌の肴は。魴鮓の天プラに葱の鍋。陶然として。隣の部屋の鼻唄  
淨瑠璃聞き居る程に。日は暮れたり。

星一つ空には見えぬ春の夜の波の上淋しともし火の影  
燈臺の外には。漁火も見えず。汽船も通らず。鐵瓶に水さす女は言  
へり。明日は雨になりませうと。

波まくら夢見る程もゆるさぬは何に夜を守る犬吠が崎

## 六

夜も明けぬ。女は我を欺かざりき。

朝日見んと雨戸あくる手に散りかゝる雫つめたし沖暗くして  
今朝は海獺あしかじま島など打ち眺めつゝ。海づたひに歸らんと思ひし物を。さ  
は言へ海上の春の朝雨。ひとりにて見んは。惜しからずしもあらず。

泡と散る銚子の海の波の上に黒き影あり鷗一つ飛ぶ

汐湯に入りて。朝飯の箸取る。魴鮓の味噌汁に。瓜の奈良漬。物こ  
そ變らね。調理の變りたるは。宿のあるじの心用ひを知るべし。波  
は一つの波なれども。雨に嵐に朝に夕べに。盡きぬ眺めの。味はる  
るこそ楽しけれ。

## 七

降られて銚子の停車場を出でしは。二時何分といふ上り列車。揃の赤ゲットをコートにかへたる。三人づれの女に。浅草邊に歸るといふ丁稚。農夫三四人。兵士一人。たゞそれのみにて室内いと淋し。佐倉よりは新陳代謝ありて客もふえ。成田歸りといふ北海道紳士の快談には。誰しも耳を傾けぬはなし。この廿日に。雪の六尺もある處より出で、來りしが。今日のやうな寒さはまだ知らず。不思議なるは暖國の寒氣よとて。物語は。北海鐵道中のストーブの事に及び雪に移り熊とかはり。開墾の苦辛。物價の高低。酒の良否。さまざまの事に渡りて。まだ春ならぬ室内にも。詞の花をぞ咲かせたる。兩國に着きて。長きプラットホームを行くに。風横に吹きて。袖にかゝる物こそあれ。白きはとて見れば雪なりき。さても此雪。今朝

立ちて來たる曉鷄館にては。雨なるべし。かの人の話にせし北海道にては。猶一二尺の高さを。加へつゝやあらん。(四十一年二月)

### ○やどり蟹

東海道——米原——北陸線——金澤——和倉——舟遊

#### 一月

やどり蟹の佃煮は。能州和倉の名物なり。はるく贈りおこせて。待ち居るといふ友あるに。そゝのかされ。家を出でしは。八月十八日。門の内庭。今しも松葉牡丹の盛なりき。

新橋にて赤切符を買ひ。占めたる席は。左の方の一隅。前には。底髪花色袴の一婦人あり。小學先生の歸省なるべし。

動き始めては風ありて。思ひし程の汗も出でず。

何くまで夜汽車の友となりぬらん晝の月高し品川の海

秋の日は程なく落ちて程が谷の谷ふところに日ぐらしの鳴く

山北いで、山路にかゝれば。撫子多くして。起き伏し靡く。

名に似たる花こそ見ゆれ旅人は家なるちごや思ひ出づらん

夜半に濱名湖を渡る。思ひし如く月さえて。黄金の鱗波間に躍り。

吹き通す汐風。帷子の上に。羽織ほしくぞ思はせつる。

彦星に我身なりぬる心地して月にぞわたる天の中橋

## 二 露

米原にて。乗換を待つこと長く。辛うじて北陸線の車に移れば。夜

は琵琶湖より明けそめたり。

敦賀すぎて。日の影漏れぬ山道となる。谷川雪を散らして。彼方より来れり。

車おりて寢覺の顔を洗はまし朝露あまる野路の葛原

歸るさは花にやならん山川の岸の秋萩露なびくなり

福井よりは。力士二人乗り込みて。互の話いたく賑ふ。勝ちたるなるべし。

## 三 鳥

金澤にて下車して。日中を過し。再び乗りたるは四時なりしが。跡見かへれば。百萬石の城下は。既に蓮田のにはひの内に隠れぬ。

夕日は入りて。邑知瀉おふらの水。なほ紅なりしも。いつしか水色の空に  
 歸りて。七尾に着けば。暮れ果てたり。

月を明りに夜道を走らす。露うちきらめく稻穂の中道。二里とはい  
 へど。三里もあるらん心地せられて。和倉に入りぬ。招きし友は。  
 旭屋の樓上にあり。おのれもこゝに。名物ならぬ宿かり蟹と。なら  
 んとするなり。

欄干に凭れば。辨天島は目の前にて。池とたゞへたる海原ひろく。  
 かなたの能登島。月の光に限なく見えて。南には。灣の口なる屏風  
 崎。さながら壘み寄せられたる如くに立てるは。風送らんの心にや  
 と。いと嬉し。

鳥姫の手に取る琴や拂ふらん月も半の夜半の松風

さても此島。八年前に來りし時は。水を隔て、向はれたるに。今は  
 其間を埋め立て、橋のみ名残を見せたるは。如何にと問ふに。さ  
 ればなり。此岸と島との間には。藻の生ふる事おびたゞしければ。  
 刈り取るに要する費用。年に百圓を下らず。唯これを吝むとて。村  
 會にて議決し。先頃より着手したりしが。速にかくは成功せしなり。  
 あたら名所を。いかに愚なるわざならずやと。友は憤慨して語る。

#### 四　湯

かくて旭屋にある事。一週間。朝とく散歩して歸れば。湯に入り。  
 夕飯の膳に就かんとする前には。又湯に入る。おほよそ一日二回を  
 度とせよと。教へられて。之を日課と定めたり。

湯の質などを語るは。我事ならねば。こゝには言はじ。帯をも解き去り。浴衣一つになりて。風呂場の板戸引き明くれば。香もなく色もなく。底まで見ゆる薬の泉は。温き烟をあげつゝ。早入り給へと迎へ顔なる。内湯なれば何よりも嬉し。

友はいふ。獨逸の萬國博覽會に出で、世界第一等の證明を得たるは。此鑛泉なり。飲みてもよく。嗽うがひしてもよし。されど餘りに過ぐれば。のぼせるといへば。乳より上は出だして入るべしと。

いつも流しに来る正直な男あり。おまへの名はと問へば。吉なりといふ。吉藏か吉六かと問へば。そんな事は知らず。皆さんが吉さんと呼べば。吉さんにてすみますと答へて。にこゝと笑ふ。罪なき先生ぞかし。

ある日の事。生れはと問へば。塗物の産地なる輪島なりと。答へしかば。かねて聞きゐたるは。輪島の蒔繪屋は。船に乗り沖に出で、すると。いふ事なるが。今もさうかと問ひたるに。いやゝ今は土藏の中にて。土用の内でも。火のそばを離れぬ事なれば。弱き職人は大かた長く續かず。など語る。語りて見れば。中々なりける愛嬌もの。親切なりとて。かはゆがらぬ客なし。

### 五 朝

寢過して起くれば。窓の硝子は既に赤し。戸を打ち開くに。今日も紅粉色の丸き鏡は。東屏風ひがしひやうぶの少し左の空にぞ。燃えつゝ昇る。五時半なりき。遠くの山は淡く霞みて。帆掛けたる舟もまだ黒し。



鳥打帽子手に取りて。散歩しつゝ圓山の岡にあがる。海たゞ一目にて。東南には俎崎を前に。須曾屏風の岬を。かなたに打ち望み。北西には。烟むつましく立ち並びたる。和倉の里を打ち越えて。猿島の切戸を遙に見渡し。海は能登島もて限られたるが。さながら蒲鉾を置きたらん形して。緑の色いと美し。

歸るとも行くとも見えぬ舟一つ浮びて廣し秋の朝なぎ

岡の上には。小松の間々に。餅柴の實のまだ青きが見え。女郎花の二つ三つ咲きたるが。珍しきとて。手折らんとすれば。羨ましとや。葛の花の紫なるが。たゞ一つ。松の上より打ち招く。

いざとて崖をよちんとすれば。友は留めて。踏みはづさば。岩おそろしき谷なるを。危し〜と叫ぶ。さなり〜と言ひながら。一二三

歩ゆけば。なんだか惜しいと獨ごちつゝ。今度は友が取りに行かんとす。妻君におよし遊ばせといはれて。其事は止みたるが。坂半ば下りたる頃。どうも執心が葛に残れり。竹竿もちてや行かんと。妻君あともどりせらるゝを。今度の留め役はおのれなりき。いかにも黽こつこの忠告。世の有様を目前なりとて。互に大笑す。

あやふしと諫められたる圓山の巖うらめし葛の初花

露なほ滋き稻の中道。にはひにぬれつゝ歸り來れば。机の上なる和倉焼の一輪ざしに。撫子の花の赤白しぼりなるが。さして有り。お玉と云へる。宿の乙女の志なれば。

なでしこに掛かれる見れば手折りこし君が名うれし露の白玉

と巻紙の端に書きて與へたれば。今日はあいの風（東風）ですから。

一日涼しう御座いませうと言ふ。

### 六 舟

九時すぎて。いざよしと言へば。島めぐりせんとして。小舟に乗る。舟に友あり。海に風ありて。あな樂しといふ程もなく。早くも灣を横ざりて。まづ着きたるは机が島なり。島は松もて覆はれたれば。机の形したりとも見えねど。魚木にのぼる影の緑は。さし寄する竿にも。觸るゝ心地こそせらるれ。

肱つきて今日は涼まん文机の名もむつましき島の岩根に上りて見れば。硯石とて。飯炊く釜程の穴の明きたる。大石あり。形を喩へば。石は鯛の頭にして。穴は其目にや似たるべき。船頭得

意げに語りけらく。是は昔し弘法様のお明けなされし穴にて。深さは中に水の干たる時見れば。二尺位なれど。それより横に抜けたるは。幾尋かあるらん。之を量れば海が荒れるとて。誰も試みたる者は。御座らぬといふ。

これに續きては。種が島といふあり。陸の方には。瀬嵐といふ村里も。近くに見ゆ。やうく照り附けらるゝ暑さに。水ほしがらぬ人もなければ。長浦といふに又舟を附く。和倉は水乏しくて渴し居たるに。御心のまゝにといふらん顔して。汲めども盡させぬ岩井の水の。凹めたる諸手に受けられたる。嬉しさ如何でか。氷に飽きたる都の人に分るべき。藪の奥には。つくつく法師しきりに鳴き居り。東して猿島、水島などを見る。猿島は猿の面を伏せたるを。横より

見たる姿ぞしたる。

北の方は兩門ひらけて。始めてなれど紛れぬ形の。能登富士こそ。遠く見やられたれ。舟の中に二人の乙女あり。八つなる妹は。鉛筆いだして寫生せんとし。十なる姉は。三十一文字を一つ綴りつ。

能登富士のお山の上に雲が出て降らねばよいが夕立のあめよく出来ましたと。船頭の翁まで褒めはやす。

ビールの酔も七八分なる頃。半の浦はんに着きて下りぬ。浦に寺あり。妙満寺といふ。山の上にて涼しければと。本堂を借りて休む。庭にはミソ萩いと盛なり。

古寺の老松が枝にはひのぼるぬかごの青葉あき風ぞ吹く  
鐘撞堂の新しきを見て。檀家の富みたるを知りぬ。

是より和倉に歸らんには。東の風こそ頼みなるに。神の御助なればとて。舟を先づ南に向ひて進め行くに。南は即ち須曾屏風にて。前に衝立島を控へて立つ。衝立は屏風に對して名づけたるべけれど。その薄きのみ衝立にして。形はさも見えすと。一人が言へば。頭ありて前に垂れ。脊骨の峙ちたるさま。駱駝とや名づけん。又一人言ふ。鳥甲とりかぶとなりとの修正説も出で。鴛鴦うんおうならんとの異論も起りつ。駱駝の脊には松あり。靡く尾花は毛の如し。

小門のかなたに。天あまぞり立てるはと問へば。立山たてやまなりと言ふ。立山がよく見ゆると。雨か風になると聞きしに。如何にぞと言へば。船人大丈夫なりと答へて。憂はしげなる面持もなし。

能登の海の夕波廣く秋晴れて雲井に青し越の立山

須曾すその下より鋭角をなして。舟を乾いんかに返す。左には石崎屏風あり。少し行けば俎崎あり。盆島といふは。げにも盆伏せたるやうなるよ。と言へば。樹木なくして坊主なればならんと。一説を試むるもありて。舟の内つれづれならぬに。いつしか辨天島は前に立てり。旭屋よりは。主人若い衆女中までも。總勢岩に立ち磯におりて待ち迎へ。今日は九十度を越えたれば。船中にも。如何にお暑かりしならんなどいふ。暮るゝを待たで。待たれし金波はきらめき初めたり。

波の上に伏せたる盆の島よりも丸き月こそ澄み昇りけれ

月清し辨天島の松陰に松風うたふ聲も聞えて

明日は陰曆七月の十五夜。晝見し立山こそ心がゝりなれ。

## 七 雨

和倉になじみたること一週間。立たんとする曉は。雨になりぬ。圓山の麓をゆく。顧みれば。別れし方には。燈火三つ四つ見えて。名残惜し。山の上には。手折り残し、女郎花の面影。今なほ靡く心地して。又いつかはとあはれなり。

朝夕に涼みし島の松陰もおもへば明日は雲の遠方

と昨日よみしは。いよゝゝ事實にならんとす。

七尾に着けば。まだ早くして。驛に驛夫も見えず。火だに燈りてあらず。時計を見れば。發車には。猶一時間あり。

暫くありて。提灯螢の如く。雨を縫ひつゝ。車を駈けさせ來りしは。少しおくれたる。友の一行なりき。中に旭屋の主人あり。來ん春の

能登めぐり。必ず御供申さんと曰ふ。  
汽車出でたり。雨晴れて夜は明けたり。

露おもき粟生の鳴子鳴れとだに風もさそはぬ朝ぼらけかな  
蓮田の香りに迎へられつゝ。金澤に入りぬ。友はこゝにて下り。お  
のれは一人旅となりて東に向ふ。(四十年八月)

### ○紀の路の春

和歌山——和歌の浦——紀三井寺——根來

#### 一 和歌山に入る

汽車にて紀の川を渡る。雨傘さして。子守しつゝ釣垂るゝ女あり。  
蓑着てさし下す舟も。二つ見ゆ。右も左も。木々淡く家遠く。烟れ

る中を。水白くゆたかに流れて。昔戀しき眺めなり。

地藏の辻とて。人々に送られて別れしは。此のあたりならん。高野  
寺の塔は左の方に。和歌山城は正面の方に。いとなつかしく。立ち  
たり。

十年へて見れど老いたる色もなし城山の松紀の川のみづ

わが此里に入るは。四度目なれど。いつも同じ人には迎へられずし  
て。新しき友を訪ふも奇といふべし。井上氏は今山口にあり。吉村  
氏は今福岡にあり。渥美氏は今東京にあり。此度は。福島より來れ  
る。近藤夫人を訪はんとす。夫人は我が家に物學して在りし事三年。  
別れて十七八年になりたるが。今は和歌山病院長に嫁して。こゝに  
住めるこそ嬉しけれ。

下車して湊通町までと。車夫を雇へば。どこにておろさんと問ふ。近藤さんにてといへば。院長さんですかとて。やがて門前に附けられたり。

夫人いたく喜ばれて。何はさて措き。昔語始まり。おさがさんは如何に。おしめさんは音づれなきか。小穴さんは惜しい事でしたなど。夫人が同宿同學の友の上のみ問ふ。先生のおあるきながらの御眠りは如何など。言はれて見れば。昔戀しくもあり。耻かしくもありとて。主客大笑ひす。間もなく主人も歸られ。隔なき鼎の足の圓居となりぬ。

庭には高野槇を中心として。松あり檜あり。大輪の赤椿など。飛石の上に散り居て。苔の色あたゝかに。降る雨ものしづかなり。入合

の鐘近くより響く。

湯に入れば。夫人手づから。襷掛にて流し呉れらるゝを。珍しがりつゝ。子達うしろより附き来て見物す。

主人此頃謠を始めたりとて。謠本取り出ださるゝを。見れば喜多流なり。夫人は我家に居たりし時。習ひたるが皆有りとて。寫本持ち來れるは。玉葛、熊野、西王母など。五六番あり。世に亡き慶子の。上書きせし物さへ交じれり。

熊野一番謠ひなどして。夜更けたればとて。主人も夫人も。みづから手を下して閨を設け。ランプを置き替へなどしつゝ。さまざまに氣を附けらるゝ。いと嬉し。机には硯もあり。水もあり。提灯もあり。安心して枕に就きたるが。朝の五時までは知らざりき。

夫人にしろるべせられて。城山の麓にある。物産陳列所を見。それより天守に登る。

## 二 城に登る

二十年近くの以前に來りし時は。門番に乞ひて入りたる事とて。道は草に埋もれ。藜身あかざの丈に及ぶ程なりしが。今は公園となりて。手入も届きぬ。いと愛らしき躍子草。道を装ひ顔に。薄紅の花を見せたり。

蒙古襲來の軍人形を陳列したる下屋より。二階を経て。三階に至れば。四方隈なき。天然のパノラマこそ美しけれ。

鱗なす市民の住家を越して。紀の川帯の如く。河原に布晒したるさへ。雪のやうに見えて面白きに。汽車ゆく鐵橋は。人ゆく板橋と二つ並びて。横たへられ。其かなたなる平原には。菜の花の黄なると。麥畑の緑なると。小田一面の蓮華草の紅なると。霞み渡りて目も綾なり。

紀の川尻は。やうく廣くなりて。河に入る處。かゝれる舟の帆柱の。林なしたるは。青岸といふあたりにて。それより南に廻れる。河邊の松原畫の如く。海は眠るが如く穩かなるに。白帆いくつといふ事なく。霞の中に透きて見ゆるは。鷗の浮ぶに似て。のどけさ喩へん方なく。夢のやうにて面影見せたる淡路島。反魂香の烟の内なる。李夫人の心地もするかな。

夫人は一つくゝに。市内より始めて。山まで海まで説明せらる。和歌の浦は。山のあなたにて見えねど。紀三井寺の名草山は。かなた

へ姿を現はしたり。近くには。師範學校附屬の女生徒。綠廣げられたる芝生の上に。花と散りかひ。遊び居るも見えつ。

あの森の霞む東や昔來てむつびし友の住みし家のあたり

岡山公園の藤。白きも紫なるも盛なりき。

### 三 紀三井寺に遊ぶ

和歌の浦さして行く道に。名所圖會にて名高き。根上り松あり。今は大方枯れて。只一もとのみ残れるに。笈摺かけたる西國めぐり。菅笠ぬきて。其あたりに休み居り。

浦に出で、東照宮を拜し。南龍神社を拜し。漁村すぎて出島の濱に出づ。今しも漁舟の歸りたる處とて。鯛を擔ひつゝ。運び行く人。

貫ひに来る人。見に来る人。女や子供や老いたる若き。がや／＼と集まれり。濱には鱈を干物にしたるが。乾し連ねてあり。

玉津島神社に詣づ。

ひろふべき渚をしへよ世に知らぬ言葉の露の玉津島姫

神社の山をば。隴山と云ひ。又奠てんぐ供山やまといふ。獅子の頭の形して。

岩もて作られ。松青く。躑躅は今しも紅なり。風景第一と聞きて登る。げにも眺めに漏るゝ隈こそなけれ。

わが乗りし和歌の浦舟今も猶波にぞ浮ぶ霞みながらに

舟にて渡りしも昔になりぬ。不老橋といふ長橋かゝりて。車もとゞろに。四方のけしきを。見わたしつゝ行くなり。

海に臨める拜殿の手摺に倚りかゝりて。汀を眺め居る女づれあり。



影うつる方へと。眼を注げば。白き鳥立ち居て遊ぶ。一つは鶴。残りには雪より清き。鶯鳥なるべし。海には海苔柴積みて。漕ぎ歸る舟に。赤裳うつくしき海士乙女も乗りたり。

歸るまで汐な満ち來る蘆田鶴の立てる渚におりて遊ばん

紀三井寺の繪馬堂。人多し。六角堂、二重の塔、鎮守權現、大師堂など廻りて。樟神祭れる楠の木陰の。茶屋に休む。赤きハンカチーフを帯に挟みたる娘。茶を持ってく。海を見。島を見。道ゆく參詣の人々を見おろす眺め。こゝも又かしこに劣らず。大釜に沸かしたる。甘酒をも賣るなり。いつぞや持て來し酒の壺を割りて。樂しみ空しく。此甘きを飲みてあきらめたる事など。思ひ出でらる。

田鶴の鳴く和歌の浦橋はるくくとわたりもはてぬ夕霞かな

傍らなる堂に。御鬮判じ所と。張り出だしたるあり。田舎娘五人並びて。かはるく受けたるを出だしては。説き聞かせて貰ひ居り。祈る處。嫁入口にや。奉公口にや。

紀三井寺君に逢はんと合す手のねがひも慈悲に漏れぬ春かな  
歸るさには拜殿に昇るに。夕汐やうく満ち來て。鶴は龜岩の上  
に居り。時々鳴く聲。霞める空に響き渡る。

こゝにて名所の繪葉書など求め。妹脊山を廻りて。蘆邊屋に上り。  
汐湯をあみなどす。

波靜にて蘆に音なく。ともし火花のやうに。二つ三つ遠くより見え  
初めたるは。酔をすゝめて。美人よりも優れり。

今はとて車に乗れば。朧なる星影。空を埋めて。恰も眞盛の梅林

を、仰ぎゆく心地す。

#### 四 根來に行く

花見る處はなきか。といへば。根來ねらは如何にとて。必ず行くべきを  
勸むるは。主人なり。そは賛成なりとて。同道せんといはるゝは。  
夫人なり。九時二十分の汽車にて。行く事となる。

仕度既に調ひ。車も來りたるに。料理屋に言ひ附け置きたる。折詰  
の鮓飯が。まだ來ぬとて。女中走り。小間使走り。下男走り。出來  
たるだけでもよこせとて。出だしやられしが。時計は進み。使は歸  
らず。主人は病院に出らるゝをさへ躊躇して。遅し〜と心配せら  
るれば。待ち居る車夫も。一人走り。二人走りぬ。

おのれは重ければとて。残る一人の車夫に挽かれて。先へと馳せ行  
く途中。はだかなる鮓飯折を兩手に捧げて。蓋よりこぼれ出でぬや  
うにと。注意しつゝ走り歸る車夫。一人また一人に逢ひぬ。跡にて  
思へば。滑稽なる有様なりき。

かくて行きたれど。既に遅かりしかば。次の汽車待つ隙にと。鷺の  
森の御坊を見。朝あさくら神かみ社を拜し。高野寺に立ちよりなどして。再び  
停車場に來りても。まだ時間あれば。蛸茶屋によりて休む。是はも  
と泉州街道にありて。汽車なき頃は。二三度も晝飯しに寄りたる處  
なりしが。今はこゝに支店を出だしたるといへば。名もいとなつか  
し。店の中央なる大テーブルには。樺色つゝじの見事なる枝を。天  
井低しと活けたり。

時間來りて發車す。わが室には乗合三人。新聞屋にや。實業家にや。何れも背廣の洋服に烏打帽。旅をして世の中に遠ざかれれば。何事のあるのも知らず。など言ひつゝ。賣りに來たる新聞の。種類を問はず。皆買ひ取り。三分して讀む。

高野を下つたは昨日なりしが。二三日も立つたやうなりと。一人が言へば。之を食うて見給へ。實にうまいよとて。紀州柑子をポケットよりつかみ出だし。一人は二人に渡す。極めて親しき友たちと見えたり。

紀の川を渡りて。岩出いはでに着く。こゝより一里八町の道のり。車ありと聞き居たるに。今日は一つも有らず。さらば辨當をこゝにて開き。手ぶらにて行く用意をせんと。うどん、そば、すしなど。行燈に書

きてある家を。見つけて入る。

奥より六十ばかりの坊主の。一盃のみたると見ゆるが。出で來りしかば。車は頼みても有るまじきかと問へば。何くへと言ふ。根來ねころまで。それならば車にてもつまらず。げんげ花など咲きたるを見つゝ。あるきてこそ面白けれと。諭すが如く言ふ。こやつ中々奇人らしければ。何くれと問ふに。言ふ事ことごとく意表ならざるは無し。

うどんそばと記してあれば。出來るかと問へば。あれは花の間なれば。張りかへんとして。まだ果さゝりしと言ひ。根來はもう遅櫻も無かるべきかと。問へば。花よりは葉櫻こそと。風流人めきたる事を言ふ。

辨當出だして。携への酒を飲み居たるに。坊主も用たしがてら。案

内者たらんといふ。それこそ幸なれとて。残りたる折詰。壇の酒など之に持たせて。こゝを立ち出づ。町を離れて。若葉涼しき森來る。岩出の大宮。神さびて祭られ給ふ境内を。通り抜ければ。一木の櫻ありて。花まだ遅からず。青葉の中に。雲か雪かと仰がれたり。世界第一の名木なりとて。坊主呵々と笑ふ。

是より打ち開けたる田の中道となる。大根の花白く。げんげの花紅なるが。一望十里。末は霞めり。紀州富士なる龍門山りうちんざん。東の方に薄紫の衣着て。真近く向はる。

西坂本さいさかもとなどいふ村過ぎて。間もなく根來坂となる。根來川は右の方に歌ひ來りて。谷やう／＼に深く。左には鏡なす池ありて。大門池だいもんいけ

と呼ばれ。大門の屋根早くも指さゝれぬ。

門の前には。廣やかなる平地ありて。櫻の林。春全くは歸りてあらず。山より落ちくるは。こなたよりと。かなたよりと。こゝにて一つに出合ひ。根來川となりて流れ行くなれば。此景色見るとて。土手の上には。草を薙にビール飲み居るも有りき。

春暮れて歸りし花の根來寺山彦さむき水の音かな

末はる／＼と見入れらるゝ。境内の兩側に。立ち並べるは皆花なり。されど此あたりは。大方緑新しくて。風のみぞ心地よく渡る。甘露門としるしたる傍らに。老木の枝垂櫻あり。散らすの櫻とて。名高しといへど。名に背きたるを如何はせん。

とこしへに花し散らずは朝車乗りおくれても人は恨みじ

奥へくくと入れば。庭に池ありて。築山おもしろく。若葉の楓。影さしかはして。山の上には。大師の祠高く立てるあり。八十八箇所の巡拜所さへありて。御詠歌の聲々。花には賑ひし處なるらん。錐鑽きりもみ不動堂の山門の前にも。作り庭ありて。花の木楓の木多し。かの坊主又いふ。世界第一の庭とは是ぞ。夫人戯むれていふ。世界第一の和尚とは是ぞと。

門の板敷に休み居る。大師めぐりの善男善女。四十にして赤き袖口なるも優しく。白き笈摺に梵字を書き。寺々の印判あざやかに。紋の如く跡を留めたるも。花の外の花なり。

こゝやかしこや廻りくゝて。再び山門の前に歸る。山靜にて寺は太古の如く。水さやかに響きて。鳥の聲浮世の夢を醒ませり。

谷の流れを見おろしつゝ。かなたの山と語るべき處に。茶屋ありて床几を置く。こゝにて又残りの酒を暖めさせ。かの世界第一和尚の勞を謝す。

川の岸には。シャガの花白く咲き出で。青葉の陰を装ひたり。

なごりなく晴れし心の白雲を櫻に掛けて今日見ましかば

此寺にとは。しばし思ひ起して。得果さゞりし事十年になれるを。待てば甘露の日和に逢ひたるぞ嬉しき。

時計を見れば四時なり。夜にならぬ先にと急ぎて。坊主にはこゝにて別れ。やがて下りに向ふ。雲雀歌ひかはして。夕日やはらかに霞めり。

五時すぎて汽車に乗る。龍門山の名残をしさ。やらん方なし。

夕雲雀こゑは残らぬ大空にかすみて立てり紀伊の富士の嶺  
和歌山に着けば。ともし火つきぬ。

五 佛前にて謠ふ

契りおきつる白樫氏より。迎の車きたれば行く。五時少し前なりき。  
庭の白山吹。なつかしく咲き出で。雨にぬれたる。何ともいふべ  
くもあらず。六つなる令嬢。一枝折り來て。をち様にとて。さし出  
だしつ。

こゝは二十五年以前に。一週間ばかり宿りつる處なるが。今は新築  
せられて。蜜柑の木陰に我が行水せし庭も。座敷となりぬなど。聞  
き居る程に。七十三にならるゝと云ふ母君出で。久しぶりとて喜

ばる。あるじが妹御のりつえ子も來りて。思ひも寄らずと。昔語こ  
まやかにぬ。

旅にある身をも忘れて嬉しきは君と語り合ふ今宵なりけり  
亡き父君は謠を好まれ。毎夜同吟せし事など。誰もく言ひ出でら  
るれば。一曲手向けばやと言ふに。佛壇を開き。御あかし捧げて。  
いかに喜ばんなど獨ごちつ。涙拭はるゝは母君なり。

佛前に進みて。誓願寺を謠へば。我ながら懷舊の心たへがたくして。  
袂もぬれぬ。

花散りて鳥は歸れど歸り來ぬ佛かなしき春の夕ぐれ  
暇を告げて出づるに。雨なほ止まず。城山くらき中に。さびしく立  
てり。

## 六 吹上寺を弔ふ

明日立たんとする日。雨間待ち得て。吹上寺すのじやうじなる本居藤垣内翁もとをりふぢがきつをうの墓を弔ふ。草深く露しげく。薺なづななど咲き満ちたり。小篋せうけつを拂へば。蜘蛛の巣いづこよりも。手を差し出だす。

近藤氏の庭より折り來し。椿の花を墓前にさせば。車夫は寺に行きて。水桶借り來らんとせしに。何れも漏りて。役に立たずとつぶやく。

摘む人も摘まるゝ花も春雨にぬれて悲しき墓のもとかな

草の花をも摘み添へて。内遠翁うちのつとむの奥津伎おくつぎにも額ぬかづき。寺を出でゝ。

日前ひのくまくにが、す國懸くにがきの二宮に詣づ。二宮は境内を並べて。宮村といふ處にあり。竹林は御社を覆ひて。晝なほ暗く。鳥の聲奥深く聞えて。若葉の香

り物静なり。社務所には。神官の影だに見えず。

花もなき神の社の竹林音せぬ雨に春や知るらん

夜は別の盃とて。いたく勧められたるが。先生シユトウは如何と。

主人の言はるゝに。四五年前にしたるまゝなりと答へて。一座大笑になりぬ。病院長の問なりしかば。植瘡しよく瘡そうの事と思ひしは當らで。

此邊にては。鹽辛を酒盜とはいふなりけり。

文字を見て酒ぬすびとを狂言の名かと思へば是も當らず

明日は奈良に一泊して。藤を見ばやといへば。猶龜井戸の春こそとて。夫人は又しも書生がたりに歸る。

夜は更けたり。空は晴れたり。別れの近くなりゆくぞ悲しき。(三十九年春)

## ○秋の和泉

岸和田——牛瀧寺——水間観音

上

「菊にて埋む住吉公園。」と大書せる廣告板を跡にして。紅葉見の一  
行。泉州に向ふ。

岸和田よりは。一人加はりて。賑はしく語り行く小田の中道。日よ  
く照らして。外套も脱ぎたき程なり。

何くを見ても。今を盛の刈入時。老人夫婦が刈りたる稻を。小娘二  
人して束ぬるもあり。赤襷したる花嫁を頭に。年頃の女四五人。茶  
摘のやうに並びて。鎌を使ひ居るもあり。扱く人。運ぶ人。落穂つ

いばむ庭鳥の群れまで。秋ゆたかなる村つゞき。垣根の菊のみ留守  
居顔にて。黄なるも白きも打ち香る。

久米田といふ村に出づ。道より少し入りたる松林の中に。光明皇后  
陵としるしたる石の立てる岡あり。謂れは知らねど拜して。久米多  
寺といふを通り抜ければ。山門の前に。廻り八町ばかりの池ありて。  
風景よし。

寺には。隆池院といふ白河樂翁公染筆の額懸かりゐて。境内に。橘  
諸兄公と和泉式部の墓ありと聞けど。式部のは分らず。公のはあの  
白堀の内に三つ有る一つが。それぞと言ふ人もあれど。文字も何も  
無しと。岸和田の齋藤氏は言へり。

池は木の葉色づく遠山を。屏風のやうに廻らして。水いとゆたかに。



鳴の浮び居る事。恰も赤飯に掛けたる胡麻よりも多しとて。數へ見たれば。三ところに群れかゝるを合はせて。五百には下らざるべしと。いふも有り。此池一つにて。二十八箇村を養ひ居るとぞ。

あたゝかく冬の日霞む水の上に鳥も晝寢の夢しづかなり

かへりみれば。大阪灣の緑に。白帆もて胡紛の點打ちたるも。手に取る如く。ゆくてには葛城かつらぎの山高く。雲にも隠れずして仰がるゝ有り。道は平らかなれば。登りになれるとも知らぬ間に。早くも二里來れりと云ふ。

積川つがといふ處に酒造家あり。信貴氏といふ。齋藤氏の親戚なれば。所有の蜜柑山も見物しがてら。晝飯せんとして。しるべせらるゝに任せて。立ち寄る。

綠奥ある竹林を。片手に受けたる廊下あり。山路に入りたる心地しながら。書院めきたる座敷に通れば。南は打ち開けて。平地より築き上げられたる幾尋の處に。我が肱を置く欄干あり。廣き庭みな蜜柑畑にて。黄金の玉の。枝を連ねて光り渡れるに。半ば染みたるも。まだ青きも交じりて。ながめやらるゝ。二月の花よりもとは。是よりとこそ。思はれたれ。

しるべせし人の携へ來れる。鱧の鋤焼。さはらの作り身など。席上狭しと並びて。此家の盡きぬ泉は。流れ出でたり。

あるじの。盃いたゝかんと言はるゝに。紙持ち來給へ。まづ肴せんとして。

此宿は木の實うつくし山吹の花の下水くむに任せて

同じくは山まで携へ行くを。許されずやと言へば。それこそ安き事なれとて。大きなる壇詰にして。二つ恵まる。いざよろめかぬ間にと。暇を告ぐれば。是より蜜柑山にと思ひしを。言はるれど。道の暮れなん恐あれば。歸りに残して。此村を立つ。

高橋といふ橋ありて。名の如く高く。水いと低く流れゆくは。かの信貴氏の。藪の後ろや廻れるならん。岸には枝打ち垂れたる枇杷の木あり。花盛にて。梅なき頃の梅よりも珍し。

家をめぐる吳竹青く竹の奥に枇杷の花しろし冬枯の村

稻穂懸け干す里又里。寺あり社あり學校あり。あれは橙ならんと。一人が言へば。柚子なるべしと一人は論じ。軍木の紅葉いと美しと。

褒むる傍へより。梔はせの木なるを知らずやと嘲る。若き人々の言葉戦ひ。いつ果つべしとも見えざりしが。一人拔駈して。石垣の上なる家にと登れば。あるじの女は稻こきやめて。此水はなんぼあがつても。酔ひませぬなど。打ち戯むれつゝ。茶碗を出だす。

立ちよりて清水乞ひたる一つ家の垣の菊こそ忘れがたけれ

やう／＼牛瀧川に沿ひつゝ登る山道となりて。日は暮れたり。薄の穂先。始は白く靡きゐたるが。遂にはそれも暗に消されて。山松の木の間をのぞく。星の影のみ凄し。

夕陽いまだ。木々の梢を別れぬ内にとこそ。思ひしものを。秋の日の足早さ。急げど／＼追ひつく能はず。道は暗し。寺は遠し。かの山吹の影汲みし里より。二里ばかりと聞きつる道も。三里四里ある

心地して。暗きゆくてに。寺の白壁見つけたる時の嬉しさ。萬歳と呼びたる人の有りしは。疲れし足の。我のみならぬを知るに足りなん。

行き暮れて宿借る寺のもみぢ葉を星の光に透かしてぞ見る

山門は敲かねど。開きて有れば。入りて案内し。大玄關より通りて。一室に席を占む。居ながら紅葉の見らるゝ處にやと。問へば。兩戸二つ三つ繰り明けて。向の山が眞ッ赤でおますと。火鉢もて來たる女いふ。川は谷底低く流れて。欄干に觸るゝ風いと寒し。

三つ四つ隔たる座敷に。五六人の客あり。歌ふ躍るの大騒ぎなれば。何くからぞと。かの女に問へば。近き渡りの村長さんなり。といふ。紅葉の陰を俗了すると。憤るもあり。和尚に面會したしと。

言ひ込みたるに。來客ありとて。出で來らねば。無禮なりとて。鋒は又そなたに向きたり。

辛うじて。誂へたる膳來る。ゆば蒟蒻に。高野豆腐の羹。かの女人して。山寺料理の行き届かぬを謝す。されども酒は持參のが有れば。さしつさゝれつ。こなたも謠うたふばかりの。機嫌になりぬ。

かの蕙にては。女もまじりて。目隠し遊び始まり。由良さんこっちななどいふ勢ひになりて。廊下までも。逃げ出す。追ひ行く。折しもかなたより。一人通りかゝりしに。組み附きて離さねば。ちがひますと言へども。無我無中なり。やうく誰か來て連れ行きたるが。村長なるべし。よそのお客に失敬をしたれば。行きてあやまれと言

ふ。はては後見つきにて。我が座敷に辭儀に來るといふ始末にて。こなたも答へに究しつゝ。皆へい〜と言ひつゝ頭かく。賑はしかりしも漸う静まりて。更け行く夜嵐。松の梢にも音づれ來らず。あはれ一聲だにもと。思はるゝ鹿は。此山に住ますやと言へば。かの一丸の筆にて名高き。權十鳴かすべき風流和尚も。見えぬものをと。笑ふもあり。鹿よりも狐こそ訪ひ寄るべけれ。油揚げにせん餅はなきかと。戯むるゝもあり。鹿は知らねど。猪のしゝは出でゝ。田を荒す事あれば。今日來し道の處々に。藁など火にたきて居たり。猪のしゝは火を恐るゝとて。追ひ歸すべき豫防なりと。齋藤氏の語るにて。話はまじめになりけり。

たき火してしゝ追ふ山の一つ寺やどる人あり秋の夜長さ

枕を取りて。一寢入せしかど。夢は破れがちにて。心は山にのみあくがるれば。雨戸を明けて廊下に出づ。

庭に雪ありて。飛石ことに白く。雪の上に黒き木の葉を。かき亂したるは。桂男の寝られぬ夜半の。筆ずさびぞかし。

寺山のあかつき月夜影さえて庭に墨繪の紅葉をぞ見る

庭下駄も無ければ。苔の上つめたく。はだしにて出づるに。月は梢の露ときらめき。霧は遠近の山を包みて。静なる天地あめつち。只神ひとり來て。我とぞ遊ぶ。

中

夜は明け初めたり。まだ青からんかと憂ひし山は。霧の戸張の開く

ると共に。色どられたる梢を見せて。今しも七八分といふ盛の朝紅葉。峰より麓まで。にほひ合ひたる美しさ。濃きは火の如く。薄きは紅の如く。黄にして雌黄の色したる物。樺にして。口なしに紅粉を解きませたる艶ある物。一つ／＼に數へもて行かば。目も届かず。心も及ばじ。

山を焼く木の葉の焔ほの／＼と水の煙のゆくへにぞ見る

水は山の裳裾を浸して。解き捨てたる帯の如くに。走り行くを。見おろす欄干。下より仰がば。又面白き景色なるべし。

いでや本坊にといひて。一人が行けば。我も／＼と石段を登るに。坊の前なる三もとの楓。殊に色よくて。霜の情の深きを知るべく。その岡つゞきに大師堂あり。開山堂あり。二重の塔もあれば。鐘樓

もありて。紅の木の間に見え隠れする。古畫の秋げしき。疊まれぬ先にと。さかしき山路に踏み入りて。かの水の水上を尋ねんとす。流れ急にて。三段の瀧を成したる處あり。畫圖をしるべに。いはゆる牛瀧は是ならんといへば。あの水に打たれ居るが。牛石ぞと。知りたる人は指さし示す。落ちては碎け。碎けては散る水。霰よりも雪よりも白く。眺めやる川下の紅は。朝日照り添ひて。ます／＼美し。寺に歸りて朝飯し。ゆる／＼と出で立つ。是より山越して。犬鳴山に遊ばんと。説もありしが。そは夏に残して。今日は歸るさに。水間の觀音に詣でんとするなり。

昨日は暮れて見えざりし道を。薄き朝霜。踏みしだきつゝ行くに。色よき龍膽。こゝにもかしこにも。枯草を装ひて咲けり。高く仰が

る。蜜柑山には。黄金の林。雫したゝらんとす。  
 山瀧村より道分るれば。小學校に立ち寄り。尋ねたるに。折しも休  
 みの時間なりしかば。先生門まで出で。懇ろに近道を指し示し。  
 あの山を越ゆれば。少し急なれど。二十町ばかりは得なり。されど  
 迷ひ給はん恐あれば。登口まで御案内申させんとて。生徒二人附け  
 呉れたり。

少し後れたりし齋藤氏。先生々と跡より呼ぶ。振り向けば。杖一  
 つ參らせんとて。五六尺もある砂糖黍を。人の數ほど持ち來り。め  
 いくに一つづゝ分配す。あつぱれ一舉兩得の山越道具。あるく時  
 は突き。喉かわけば折りて嚙む。美なる事甘露の如し。

山路を下り果つれば。津田川といふいさゝ小川ありて。かなたに渡

り。こなたに渡る。風吹橋といふ名を。欄干の柱に彫り附けたり。

山越えて燃え立つ顔に吹く風の橋の名うれし暫し涼まん

時雨俄に來りて。傘なき一行。急ぎに急げども。借るべき軒もなし。  
 辛うじて松の下陰見出だして。馳せ集まれば。小さき祠ありて。平  
 たき石や瓦に穴あけて通したるを。幾つともなく。掛けて供へたる  
 が有り。

何ならんと。一人が言へば。思ふ事の貫くやうにとの。祈願なるべ  
 しと。解説附くるもあり。あないとほしと。神のあはれみ掛け給は  
 ん謎なりと。戯むるゝも有り。折しも一樹の陰に休み居たる。鍬持  
 つ翁のあれば。それに問ひしに。耳の聞えぬ人が願を掛けて。聞ゆ  
 るやうになりたる時。お禮に手向くるなりとぞ。答へし。耳の穴の

明きたる意味よと。皆打ちうなづく。

前には廣き池ありて。眺めさやかに雨は晴れたり。此名はと。又かの翁に問へば。此御堂が薬師様なれば。薬師の池と申すぞと言ふ。行き／＼て。木積こづみといふ村に出づ。楠神様くすがみさまといふ社あり。詣で、見るに。楠太郎といふ人の。奉納したる額ありしを。クスノキ太郎と讀みて。楠公の子孫にやと。いぶかる傍らより。楠二郎もあり。女には楠子といふも有るはと言ふ。さては神の御名の一字を附けて。其子の健康を祈る習慣なるよと。我も伏し拜みて。こゝを立ち。釘なし堂といふに行く。寺の名は孝恩寺。神龜年中の建築にて。釘を用ひずに作りしより。里人のかく呼びなしたりと云ふ。

齋藤氏の知る人として。この村の小學校長三宅氏。鍵持ち來りて。扉

を開き。堂内ねんごろに。住持と共に案内せらる。古佛あまた並びて。本尊の御うしろに。居給ひぬ。

釘打たで千年ゆるがぬ古寺の柱を君が教とはせよ

と書いて贈れば。三宅氏なほ。水間までとて伴なひ來る。

観音堂いとかめしき建築にて。菩薩たふとく。御あかしの光にかいやくき給ふ。

寶物の中に。龍の爪といふ物あり。これにて此御本尊を。池の中より捧げ出でたるを見給ひて。行基菩薩。龍すら佛恩は報ずるに。人として功なかるべからずとて。みづから一切經を紙に書寫し。こよりとなして。作られたるが是なりと。取り出だすを見れば。げにも木石を凌ぐ固さに作られたる。百八の數珠なり。龍の爪も有難け

れど。それよりは此數珠こそと。一人づゝ手に取りて見ては。其精緻に驚く。

門前の茶屋にて。晝飯する程に。三時になりぬ。岸和田まで猶三里ありといへば。空もやうもわるし。車にてと尋ねさせたるに。一つならでは有らず。人々は歩み。おのれのみ乗る事となりて。先に行けば。雨又さつと來りて。風横さまに強く吹く。

幌の中より。狭く景色を見出だし居たる程に。早くも楫棒をおろしぬ。齋藤氏の店先なりけり。岸和田高等女學校。右の方に見上げらる。

今宵はこゝに一泊す。庭は菓物畑くだものばたけにて。西瓜の大ききして。枝さしかはしたる内紫。鉢合せするばかりに。數へも切られず。(四十一

年十一月)

## ○夢の水海

上野——我孫子——小林附近

十二時四十五分のにて。成田に行かんと。上野に急げば。こは如何に此列車は平行たひらにて。成田線へは接続せずと。掲示してあり。次のまでは。一時間あまり待たねばならず。是もせん方なしと。あきらめ居たるに。驛夫はリン振り鳴らして。平、水戸、成田と呼びあるく。

さては接続するかと問へば。接続すると言ふ。あわてゝ切符を買へば。いにし日の洪水に線路切れて。途中に舟渡が有るが。よいかと



注意す。よろしいと答へて。乗り込めば。昨夜より降り居たりし雨。殊に甚しくなりて。窓より散り来るしぶき。さながら瀧のもとにて打たるゝやうなり。

千住も來らんとするに。空まで浸す大水の中に。獨り立ち残りたる寫眞を。新聞にて見たりし小塚原こづかばらの地藏尊。今日は水引きて。土の上には有れど。近くの家々。壁落ち屋根崩れて。名残のけしきは。只ならず。

北千住を過ぎ。龜有を過ぎ。金町を過ぐ。乗る人々の。疊みて持ち入るゝ傘の雫は。室内に池をたゝへつべき様なるに。思へば我身は。例の事とて。傘なしにてこそ出で來にけれ。いつもならば。車より車に送らるゝ事なれど。今日は舟渡あるといふが。心に懸か

れば。二つなき衣を濡らさんも。本意ならずなど。おもふく我孫子に着きぬ。

さて乗替はと問へば。今一時間ばかりすると。上野發の成田行が來ると言ふ。愚なりき。矢張前のは。接続せぬ列車なりしぞかし。されど此待合を利用して。辨當賣に。傘一本買うて來て呉れずやと頼めば。快よく諾なひて。走せ行きぬるが。久しくありて持て來りしは。二度と使へぬ番傘の悪しき品にて。開かぬやうに。紙よりもぞ。輪を掛けたる。

布佐を過ぐれば。手賀沼の水は。田を襲ひ。畑を浸して。一面に落口を廣め。木下出きおろしでゝは。利根の濁流。版圖を四方に求めて。慾望極まり無き勢を示す。

柳六七本。梢ばかりを見せたるは。暑き日防ぎし道にやあらん。小舟に乗りて。穂末のみ見えたる稻刈り居るは。乙女が肩に赤だすきして。田植賑ひしあたりなるべし。池の河骨かうほねところぐくに。風打ち靡く心地するは。月見に堀らんとせし芋の葉の。助舟乞ひ顔なるこそ。心細けれ。

小林より。行く事數丁にして。汽車とまりぬ。驛夫扉を開きつゝ。下車して舟に乗れと呼ばるは。かの渡場に来れるなるべし。

見渡す限り。漫々たる大湖水となりて。線路はこゝより。水にさらはれ。切れたる間は百間あまりと聞けど。廣さは數字もて。測り盡さるべくもあらず。

雨は礫の如く。風また吹き加はりて。傘を開けば奪はれんとす。辛

うじて下り口に作られたる。棧橋めきし處を。下駄の齒挟み取られじと用心して。堤に出づれば。泥深く岸急にて。舟は待てども。踏めば凹くぼみ。進めばすべりて。たやすく乗場まで行かるべくもあらず。

この一列車の。一二三等すべての人を載するに。舟は平たき田舟にて。わづかに二艘。身輕の客は。先を争ひ乗り終りて。一艘は既に出でつ。

残る一つに足踏み掛くれば。重くて危し。今一つ有りしは。客載する舟ならねど。是にと招く。おのれ先づ乗り。ついで被布着たる令嬢、令閨。蝙蝠傘を杖に。よろめき／＼乗り來りしが。之も忽ち満員になりぬ。

鱸とこもなるは櫓を押し。舳先へさきなるは竿を取る。右に左にゆらめく毎に。肝を冷やす人もあるべし。誰やらん問ひぬ。こゝは常に川か沼かと。いな／＼雨もしあばれざりせば。秋ゆたかなる。一望千里の稻田なるものを。

ともすれば。空まで續かんとする水の面に。現はれ出でたる大島小島。竹藪のみにて。根を水に浸さるゝもあれば。松のみ聳えて。柱傾き軒落ちたる家の。横たはるもあり。泰平ならば。秋の祭に。村相撲賑ふべき鎮守の社は。きざはしの下まで御洗みたらしを湛へ。彼岸詣の孫子まごこらが。花手向くべき道も知らぬ。墓の石碑は。信女信士の文字まで沈めて。百本杭のやうに。頭のみ立ち並べり。

遠くもあらぬに。村と村との通路絶えたる。島々のあはれを。松島

を舟遊するやうなりと。いふ人もあれど。おのれは寧ろ北海道にて見たりし。大沼小沼の風景を。うつしたりとこそ思はるれ。

先ゆく舟を見れば。夕立かゝる露島に似て。傾きゆらく傘の數々。あつぱれ晝にもせばやと思ふに。我が舟はいかゞ。重なり合ひたる。傘と傘との間より。落ちたる雫は笥の如く。衣にしたゞりて雹よりつめたく。嵐と共に横より突く矢は。全身を襲ひて。血汐ならぬ。水をぞあびせ掛けたる。

思ひもよらぬ御参りよと。泣かしげに聲立つるもあれば。不動様からお釣を取らねば合はぬと。戯言いふもありて。苦しき内にも。打ち笑ひつゝ。梅の木の梢を。芦の葉分と乗り越して。舟やうやく着きぬ。

待ち居る列車に乗りて。ぬれたる袖をしぼるもあれば。傘の雫を振り切るもあり。顔見合はせては。誰もくくひどい目に逢ひましたと。溜息を突く。肩より腰より褌先まで。しとゝならぬ人なし。安食あじきのあたりも。猶水出でゝ。簀着たる男の。五人三人。河上の稲穂つみ居るも見ゆ。あはれなる秋にもあるかな。(四十年九月)

○岩 つばめ

車中——日光——中禪寺

上 ゆくさ

心に懸けて寝たりしかば。一時に目さめつ。まだ早しとて又寝したれど。熟睡も出来ねば。遂に三時に床を出で。空打ち仰げば月霜の

如し。食事はせぬつもりなりしかど。時間あればとて。火もおこり茶も暖まりたれば。少しものして。車夫のくるを待つ。

待つ人は如何にと柴の戸を押せばまづ有明の月ぞさし入る。四時に家を出でゝ行くに。夜は静にて行き逢ふ人なし。

水道橋を右に見る所にて。荷車に大根を積み。八つ九つの女の子二人。跡押をして来るに始めて逢ひつ。練馬あたりより。神田の朝市にと急ぐなるべし。

いたゞきて出でつる月は拂へどもちらぬ霜とや身につもるらん是より人氣ひとけやうく繁くなりて。壹岐殿坂の豆腐屋にては。二人して石碓廻し居るさへ見られぬ。

上野の廣小路過ぎて。山下に掛からんとする頃。女生徒の一隊の。

停車場さして行くを見る。何の氣なしに乗り越さんとするを。大和田先生と呼び留むるあり。早くもわが同行せんとする人々なるぞ嬉しき。學校は跡見。組は五年生。けふ日光へ修學旅行せんとするなり。五時二十分に發車す。生徒の數は廿九人。教職員は六人にて。室内いと賑はしく。甲は昨夜の寝られざりし事を語り。乙は一時間に十返以上空を見たりとて。笑はれし事を語る。

夜はほのくくと明けて穗並そろひたる晚稻田。きいろく見ゆ。紫だちたる雲の棚引きたるを。清少納言の書きたるはあれよといへば。美しいくくとて。皆ひんがしの山際を指さす。

荒川渡る時。山茶花の色したる朝日はさしのぼりぬ。拍手して喜ばぬ人なし。

けふ分けん紅葉の色を空高くまだきに見せし日の光かな

生徒の手にくく携へたるは。赤き。青き。緑なる。紫なる。さまざまの信玄袋。さては風呂敷包なりしが。今は打ち積まれて網棚の上にあるを。そろく取りおろす人こそあれ。中より出でくるは。梨子あり柿あり林檎あり。源氏豆もあればサンドウイッチもあり。或はボール。或はビスケット。栗にカステラに甘納豆に。我とところに廻りてくれれば。一つづつ手の平に取りては次へおくる。いつぞや京坂の汽車の中にて。本願寺がへりのお婆あさんが。袋の金米糖取り出だし。一粒づつ分けて車中隈なく振舞ひしを。趣味ある贈物と羨みたりしが。それにもまさる贈答交換の共進會。むかし物せし雛遊の樂しみも思ひ出でらる哉。此碁石の如きはと問へば。スターと

て今はやるお菓子ですはと。隣なる一人教へくれたり。桃色なるも薄紫なるもありて。甘き内に香りある心地す。

何くよりか小さき文の結びたるが傳はり來りしを。明けて見るに。

師の君のお身の重さにいつよりも進みの遅きこの車かな

とありしかば。

大石の重しもなくは山風に四方の庇の飛びもこそすれ

と書きて返したるに。額さしよせ開きて笑ふ聲のするは。庇髪の謎と分りしなるべし。

やうく道の長きに倦みて。水なき處に舟漕ぐもあり。誰やらん發議して。電話といふ遊びを始めぬ。十人二十人車座に並び居る内の一人。何にても文句を作りて。隣の人の耳に移せば。甲より乙。乙

より丙と。順々に耳より耳に傳はり行く。その長き間には。まちがひく。終の人の處に至る頃は。思ひも寄らぬ言葉となりゆくを。一興とするなり。さまざまありたる中に。「百鬼夜行の日光ゆき」といふが出でたるを。「明き屋のにこく」と傳へたるこそ大笑なりしか。

文挾驛ふはさみのほとりに小學校あり。テニス遊びして居るが見えしかば。

紅葉しぬ車おりても見て行かん君が手にする文挾の里

といふを示して。此歌のお化けを捜し給へといへば。御褒美はと壺人がいふに。ビスケツト一つとて笑ふそばより。テニスくと右よりも左よりもいふ。

日光へ着けば十二時も過ぎぬ。同じくおるゝ學生の團體。お茶の水

の女子師範學校あり。浦和の高等女學校あり。小學校もあれこれ見ゆるは。縣下の近くより來れるなるべし。わが一行は時間を急げば。休みもせずして。杉の村だち群がり過ぎつゝ。日光町を爪先上りにのぼる。大谷川（だいやがは）の水音。早くも歓迎するに似たり。

神社の參拜は明日に残して。川ぞひの道ゆく人々。離れてうしろより眺め渡すに。髪なるリボンの色。蝙蝠傘の色。さながら花をこさちらしたる如くなるに。三十人一樣なる紫の袴は。藤を下むきに咲かせたる心地して。美しとも美し。始めこそ咲き揃ひたれ。次第々々にちり／＼になりて。三人五人とおくるゝもあり。先立つもあり。おのれはいつもしんがりして。足の遅き仲間を相手とす。

河向の岸の木の葉は。まだ紅とまでは至らねど。やう／＼黄ばみた

るけしき。露の力は見えそめたり。含滿の淵は是ぞといへば。おくれたる二三人のぞき見て。あな恐ろしと小さき聲す。

うす紅葉水を隔てゝ匂へどもものぞけば寒し淵の渦波

水は溯りゆくまに／＼いよく清く。白妙といはんよりも青みを帯びて。いはゆる水淺黄の色すごく。岩を噛みては岩に碎け。廣き處に泡を浮べては。狭き處に瀧をなし。車輪の如くまるび。矢束（やたば）の如く突き進む。

打ち震ふ足を踏みしめつゝ。ゆらめく板橋かなたに渡り。こなたに渡り。暫し大谷川に別れて道二俣の處に至る。眞直に行けば足尾道。右に折るれば中禪寺道なり。はや馬返しに來れるかと喜びたりしが。猶遠しと聞きて。力落したるは我のみならず。

是より再び川に添ひつゝ登るに。河原いと廣く。水は笙の笛を。幾百人も吹き立てたる響して。流れきたる。中洲なるも汀なるも。雜木林の薄らかに黄ばみ赤らみたる。又得もいはれず。

辛うじて。馬返しに着きぬ。一時なりき。神橋みはしより二里半なりとぞ。こゝには諸學校の生徒。既に幾組も休み居て。蔦屋の樓上樓下。人界の花紅葉をぞ引きちらしたる。

わが一行は。居ながら欄干に倚りて紅葉見らるゝ二間を占め。辨當ならぬ此屋の膳に向ふ。此大人數に二人の給仕女なれば。盆の通路中々忙がし。

皿につきたる煮肴を。中禪寺湖にて取るゝアイソなりといへば。桃子女史。是ぞあいそ狩の御文章にある魚なれば。よく味はゝれよと。

生徒中に語られなどす。あいそ狩はこの春かきたるおのが紀行の題目ぞかし。

おのれは下駄にて通さんと。一人きばりゐたりしかど。止めよくと留むる人のあれば。草履にはきかへて出づ。女は何れも草履に紐の引つけかけをし。男はおのれを除きてみな靴なりき。進む事暫くにして。風穴のある山を右に見つゝ行く程に。山せまりて。信州の岩鼻めきたるにきたる。先なる人の傘の柄上げて仰ぎ示すを。後なる人々顔を空にしては。皆美しと褒む。今しも頭の上に落ちかゝらんとする數十丈の大岩。紅葉の錦もて掩はれぬはなし。をとゞし遊びし耶馬溪の佛岩など。思ひ出でらる。

稻荷川の右より來りて。大谷川の落ちあふ處を三澤みさはといふ。渡る板



橋いと危げにて。流の急なる。百千の矢を一度に放ちしが如し。  
 女人堂の前過ぎて山道にかゝらんとするに。すべりて草履の脱げん  
 とする事いくそたび。誰か引つかけしたる布の切端持ち居給はずや  
 と問へば。私に御座いますと。袂より取り出すあり。

あな嬉し河瀬にあらぬ山路にもかくる情の布のきれはし

結んで上げませうとて。生徒の両手を。右左より掛けられたるこそ  
 有難けれ。

山は入るがまに／＼。さまざまの梢の色どられざるはなく。遅き速  
 きの差別こそあれ。折よき日にも來れる哉と。口々に喜ぶ。

茶屋ある處より。谷を隔て、瀧二つ見る。左なるは般若。右なるは  
 方等。紅葉の間に挟まれ落つる水の清けさ。山彦こたへて。神の音

樂谷に満ちたり。

瀧二つながむる山の薄紅葉うすれて秋の日は入らんとす

足の痛さもいはずなりて。紅深き林の中道。唱歌たのしく行く程に。  
 中の茶屋に來りぬ。阿含の瀧は向の山に。絹糸の如く細くかゝれ  
 り。崖に垣根を結び廻して。熱心に油繪かき居る外國人あり。

是よりいはゆるいろは曲りとて。羊の腸の如く。山をめぐり／＼行  
 く事。四十七返なりといふ名高き處なるが。エス(S)の字に行く  
 處を。ドル(D)の字の縦棒の如く近道を行けば。一里も近しとて。  
 大方は荷持に勧められつゝ。そなたを貫き進む。

かくしては紅葉が見られぬとて。しんがりしたる三四人。暮れなば  
 暮れよとて。遠き本道をゆる／＼と行けば。馬上にても徒歩にても。

歸り來れる外國人の幾組にも逢ひつ。

かの稻荷川の川上は。數百ひろの谷底を走りて。かなたの高山。今を盛の百しほ千しほの満目の紅葉こうえふ。夕日を受けて時ならぬ躑躅を咲かせ。恥ぢらふ美人の顔ばせを見せたる。その美しさ。春野焼く火も。これにはいかでと思はるゝ景色なるが。中に一むら林の。殊に深紅しんくなるありて。焔は山を焼きあまりて。空まで焦がさんとするの勢あり。是には一首こそと。一人のいふに。

美しと昨日は思ひし燃ゆる火も色なき山の夕もみぢかな  
谷に別れては山に入り。又めぐりては谷に臨む。かなたの紅葉やうやうに遠くなりて。名残は盡きねど。山道は盡きんとするに近く。水音も耳より別れて。やがて大平おほだひらに着きたり。

此邊の木々には。霧藻さがりをるが珍しとて。誰もく傘の先などさし出だして取らんとすれど。枝高くして届かず。

深山木にかゝる霧藻の緑のみ秋の外なる色のさびしさ

華嚴の瀧見る處に至る頃は。暮れ初めたり。岸の紅葉は薄衣かけたるやうになりて。色さだかならぬ巖の上より。さくなだりに落つる七十五丈の大瀧。瀧壺に落ちては霧となりて。谷一つ渦なす雲の中に巻き入る。時刻遅ければ。飛び遊ぶ岩燕も見えず。天地たゞ千軍萬馬の聲あるのみ。

薄墨の夕山寒し谷一つ息吹いぶきになして神の歌ふ聲

瀧の水上に添ひつゝ行くに。水の光なほ明るくして。紅葉の林ほのぼの見ゆ。四十雀の聲も梢に絶えて。遙なるともし火。鬼火のやうに

凄し。何やらんかゝるよと空を仰げば。時雨の二粒三粒來れるなり。  
 別れ來し瀧のしぶきや夕山の時雨となりて慕ひ來ぬらん  
 それも忽に晴れて。木の間に見えし中禪寺湖は。隈なく前に廣げられて。汀に出でぬ。

左には落口を渡り。歌の濱の方へ行く道の橋ありて。そのほとりに橋本といふ宿屋あり。橋本の人丸といふを聞きて。人丸にあらず人とまるなりと。相槌打つ人の顔も臙になりぬ。

全く暮れて米屋に着きぬ。先着の人々ははや湯より出でたるもあり。水を窓より直に望む座敷を占めて。皆々火鉢を取り圍む。月の夜ならねば。水のかなたの景色は見えねど。窓の内には笑ひ合ふ生徒の聲々。いと樂しげにて疲れたるさまもなし。寒暖計は四十六度の温

る度を示せり。

夕飯も終へしかば。生徒に繪葉書持ち來給へ。紀念に一枚づゝ書くべしといへば。我もくゝと。手に手を重ねてさし出だす。三十人の人々に。別々の歌をとて始めたれば。四五枚の間こそよけれ。同じ華嚴の瀧が十枚も十二三枚も連發せられし包圍攻撃。遂には四面楚歌の聲聞く心地して。筆よりも先づ頭かゝれぬ。

今四五枚残りたる處にて。床を取る事始まりしかば。明日に残して。おのれも枕に就きたるが。空の事心に懸りて。赤鼻緒の日光下駄踏みならしつゝ。表に出づれば。雲のあなたながら。薄月夜こそあらはれたれ。

誰が乗りて來りしにか。山駕籠五つ六つ。軒下に並べてありしに。

よし子女史まだ乗つた事がないとて。中にはいつて座したりしを。井深校醫先棒をかき。おのれあと棒を肩にして。かつぎ上げたり。ポンチ家あらば中々の材料なるべきに。外に誰も居ざりしこそ幸なれ。打ち笑ふものは杉吹く山の嵐のみ。

舟うけて歌の濱寺見に行かん中禪寺湖の有明の月

とこそ心には楽しみみつるを。あな憎や雲のけはひのゆるすべくも見えず。

花蹊校長におくらんとて。紅葉おしたる葉書に歌かく。

共に來て見せばや君に薄く濃くいろどる神の筆の力を

中 中 禪 寺

夜は湖水より明けそめて。歌の濱かなたに見ゆ。その右手なる上野島も。うすぐろきながら指さゝれぬ。

廊下に出づれば。明くる待ち兼ね。起き出でたる生徒たち。こゝに三人かしこに四人。女中の持て來し火鉢を圍みて。座蒲團を掛け。炬燵のやうにあたり居り。いざ近きあたり見めぐらんとて。我もくと争ひ出づるを伴ひ立て。先づ中宮祠に詣づ。

うしろはさながら兜など伏せたるが如く。急斜はげしき男體山。麓より半腹かけて。枝さしかはす老木若木の紅葉のいろく。松の緑を残したる處は。嵐山の風情もあるに。紅深く染めたる方は。高雄の面影ありともいはまし。歌よむ人もよまぬ人も。拜み果ては。顔を空になしつゝぞたゝずむ。

いにし年の山崩れに埋められて。今はおはさぬ立木の観音。はしり大黒の跡など見つゝ。湖に向へば。鏡の如き水の上には。一葉の舟の小さく見えて。打ち振るハンカチーフ。鷗よりも白し。あれは桃子先生なりと一人がいへば。其次なるは誰々さんよと。又一人が數へ渡す。さては先陣せられし舟遊びごさんなれ。今一艘を出だすべしとて。汀に急ぎ歩みをめぐらすあり。又は見ぬ人の爲めとて。土産物買はんとするもあり。おのれも土産物の一人にて。さわらび。霜ばしら。冬ごもり。さては繪葉書など。名物を調べて歸り來れば。今しも米屋の裏より舟一つ出でんとす。恰もよし。いざ乗らんとて呼ばれば。先生に乘られては舟が沈むとて恐るゝもあり。呼ぶ人さながら隅田川の能の如く。呼ばるゝ人

先生を俊寛にして見んと。戯れ言いひてはどつと笑ふ。船頭なさけありて。つひに舳先に座を占むれば。ゆらり〜と波路を遠く出でゝ行く。顧みらるゝ男體山の紅葉。近くてよりは更に美し。

染めにけり秋うつくしき男體の出した林松を殘して

かなたには歌の濱あり。上野島あり。面白き眺めは何くを見ても盡させぬ中に。雲井に白き峰こそあれ。何くぞと問へば白根といふなり。

二荒山神の湖秋ふけて初雪しろし白根遠峰

歸りて朝けの膳につく。會計つかさどる石山君は。見事なるあいそ  
の焼きたるを三つ皿に盛らせて。是は今釣りに來つるなりとて進め

らるゝを。箸にして見れば。きのふの馬返しのより遙に勝れつ。  
あいそよき君が笑顔に足引の山のつかれも忘れつるかな

下 歸るさ

はや出立とて。草履の紐引きかためつゝ。生徒はひしめく。  
おのれは例のしんがりせんとして。先づ人々を先きに行かせ。歸りも  
又五六人してゆるりゝと跡より歩む。井深校醫洋服に赤鼻緒の下  
駄はきてしんがり軍の先達に立たれぬ。昨日は日暮れて見えざりし  
が。松の木ともいはず杉の木ともいはず。火よりも美しき蔦のまと  
ひ餘りては。紅の髯をのばしつゝ垂れ居るもあり。  
よし子女史は之を見て。松は先生蔦は私。かよわきものが。大きな

木の陰にまとふこそをかしけれ。といはるゝを。

松の木の待つともいはぬに執念しよねくも纏まとはりけるか蔦のかづらの  
とて笑へば。先生ひどいとはとて。女史の御機嫌よろしからず。

朝の華巖を又見んとて。今日は谷ひくゝおりて行くに。百年せきとめ  
たりし天の川の水を。一度に水門放ちたる如く。地軸も碎けよと落  
ちくる水勢。物すさましく轟き渡りて。萬木ふるひ萬山叫び。踏み  
居る木の根もゆるぎ崩れんとす。

束ねつる千筋の糸を一たびに解くや華巖の法の大瀧

いろは曲りの真中に來たれば。喉かわきて水ほしくなりぬ。折しも  
柿を出だして一人の輿へられたる。花もあれど紅葉もあれど。此お  
くり物こそと喜べば。柿の實のお歌を短冊にと。乞ふ事急なり。

契りおく事は忘れじ短冊に歌柿の實の賜物ぞこれ  
行くさは夕べ歸るさはあした。紅葉の色おのづから變りて。更に名  
残は盡くべくもあらず。紅の林を出で、紅の林に入る人。その顔ば  
せ鬼ならぬはなく。美人ならぬはなし。

石に詩を書く人はあらん木のもとに酒あたゝむる人はなくとも  
げに面白や處からなど。口ずさみつゝ。早くも女人堂まで下り來に  
けり。

雪の下のやうなる草ありて愛らしければ。摘み取りぬ。秋の雪の下  
とや假に名づけんといへば。知る人ありて。大文字草といふ花なり  
と教ふ。

東山雪の大文字おもかけに見えて身にしむ花のいろかな

げにも三瓣大きく二瓣小さく。白リボンもて結びつる。大文字の形  
こそしたりけれ。

馬返しにて此度は携帯の辨當を開く。時間を急げば。床几に腰かけ  
たるまゝなり。十一時や下りけらし。

かくて東照宮を参拜せんとの豫定なりしが。それをしては汽車の時  
間に間に合はず。時間を延ばさば夜の歸京が遅くなるべしとて。遂  
に止めたるよしを發表す。口惜しがらぬ生徒はあらず。

神の手の美を盡したる山もとに又人の手の美をやめでまし  
と思ひしにと。いふく歸さは足いと早く。山道過ぎて野や畑の中  
道となる。

莖長くさし出でたる松虫草の紫なる。赤まゝと稱へて。子供等がま

ま事に用ふる蓼の花の紅なるなど。摘みては束にして持つ。  
 是こそ古今集にりうたんとよみたるりんだうよ。葉の形笹に似たれ  
 ば。笹りんだうといひて。源氏の紋に用ふるなりと語れば。我もく  
 と。それよりりんだうの採集にかゝりて。枝の折れくねりたるは。  
 釣花活によからんなどいふ。

一さかりくねりし花の女郎花小さくなりて秋ふけにけり

今は五六寸の高さなるが。たま／＼咲きまじるもあはれなり。

川下はるかに神橋の見ゆる處にて。雨ふり出でぬ。今朝より催し居  
 たる空ながら。旅の衣にはいとわびし。

しぐれけり神の前橋うつくしく紅葉の外の紅葉ぬらして

町にては日光唐がらしなど求めて。停車場に急げば。今しも着車せ

しと見え。今日くる男女諸學校の團體。町を上り來るに逢ふ。此雨  
 に氣の毒といふべし。

二時過の汽車にて日光を跡にす。時雨と思ひし雨はまめやかになり  
 て。杉の村立霧の中に包まる。窓の内には言葉の花咲き。笑ひどよ  
 めく聲。大谷川の水音よりも高し。

疲れて居眠るもあり。四五人丸く集りて。互に脊中に顔を押し付け  
 合ひつゝ居たりしは。畫に書きたる獅子の毛か。又は紙にて作れる  
 風車にも似たる形よと。さゝやくも知らず。

畫をよくする人ありて。鉛筆とり出だす間もなく。車上午睡の寫生  
 は出來たり。かなたは夢や瀧のあたりに迷ひつゝあらん。こなたは  
 髪なるリボンの色までゑどり果つるも白川夜舟。湊は何こ。驛は早



くも宇都宮々々と呼ぶ。(四十一年十月)

### ○師走の月

龜崎——半田——武豊——桶狭間——知立——八橋——  
 豊橋——長篠——新城舟——豊川——岩屋観音——波多  
 野文庫

#### 一 うつせ貝

暮れて七時過。龜崎に着けば。約しつる教子は。提灯さげて迎に来て居り。月おぼろにて。寒の入り前なれど。春の夜の心地ぞせらるる。教子は。海潮院といふ寺の離座敷を住居とし。障子を明くれば。海も月も目の前にて。松の隙より遙に見やらるゝ對岸の三州。ともし

火三つ四つ。雲間の星かと思ゆ。

本堂の方より響く鉦に目さめて。朝とく海邊を逍遙し。洲先に行けば。小さき帆立貝の雪の如きが。幾つも落ち散りてあり。

磯に出で、踏めば音あるうつせ貝うつなりけり夢のゆくへはあはれ家なる子供つれ来て。など獨ごち居れば。朝飯熟したりとて女の童呼びに來りぬ。

#### 二 砂の上の月

今日は半田武豊に遊ばんとて。先づ高根山公園に登る。高き處に戦死せし郷人の招魂標あり。松の木の間より見渡す海原。衣が浦々のこる處なし。あれに煙突の見ゆるが半田。遙に出でたるは師崎もろさきにて。

そのかなたなるが伊良子崎なりと。教子さしゝめす。

知多の海を抱く師崎いらご崎手にも取るべき目の前にして下りて停車場に行きたれど。待合の時間なか／＼長ければ。半田まで歩む事に定めて。三社に詣で。土焼の人形作り居る乙川など打ち過ぐ。さすが海邊なればにや。菜種の咲きたるがあれば。手折りつゝゆく。風いと寒し。

契りあらば春日の長き暇道士筆つみても行かましものを

阿久井川を渡りて。半田に入る。町いと賑はし。一時近ければ食事やせまし。など言ひて時計を見れば。汽車の時間迫れり。寧ろ武豊にてこそとて乗り込む。驛に柳多し。冬至も過ぎたればにや。何となく青みわたるやうに見ゆ。

武豊を一めぐりし。煙波樓といふ辻看板見附けて。横町に入りたるに。料理屋らしきものなし。

やゝ行けば。小川を前にして風流なる門あり。ともし火のガラスに。「なべ」の字見ゆ。鴨なべか柏なべかとて。近づき讀めば。わたなべといふ醫士の苗字を。假名がきにしたりしぞ可笑しき。

なほ少し行けば。軍用旅舎といふ札打ちたる家あり。のぞきて見れば。料理屋らしくもあらねど。外になれば聞きて見んとて。障子を開き音なへば。女出で来てこちへとしるべす。

飛石づたひに。四疊半なる離座敷に行けば。日あたゝかに照して。寒き風もこゝまでは追ひ來ず。庭には冬椿さき居て。池には鯉にや鰻にや飼ひ置くやうなる。籠など漬けてあり。

こゝにて晝飯し。歸りの汽車は五時廿分なれば。それまで休らはんとて。歌などよむ。教子まづ筆とりて。

師の君の御供つかへて冬さむきあらしの音ものどかにぞ聞くおのれも。

子供らが陸月一日を待つ如くまちしは昨日けふの嬉しさ

少し早く出で、武豊橋を渡り。港まで行かんとせしに。いと廣き松原に出でぬ。龍と臥し虎と蹲りて並び立つ老木。舞子をさながら持て來しやうなり。

鞍掛けて乗らば千里に翔るべきいきほひ見ゆる松の這ひ枝

海原遠く眺めやられて。かゝり居る大小の汽船。ともし火うつくしく輝く。

夏ならば螢と見まし濱松の木の間光る船のともし火

乗り込めば暮れはてたり。水色の空に黄金色の月。寒き窓より。天地平和に見いだしつゝ行く。

龜崎に歸りて海を望めば。三河の方は霞み鎖して。波に聲なく。沖にかゝれる船の火影を數ふれば七つ。明滅しつゝ破軍星めきたり。

のどけさは春にも似たり船の火の影も動かぬ波のうへの月海潮院の表門より入りて。濱座敷に歸るに。わが影いと黒し。

さやけさは秋にも似たり濱寺の松の影ふむ砂の上の月

今夜は心あくがれて。雨戸を開きては時々見いだすに。萬頃の金波。見る／＼皆わが物とこそなりぬれ。

垣根まで満ちくる海の潮寺月に今宵や寐られざらまし

今日は桶狭間かきはざま尋ねんとて。大府まで汽車に乗る。日よく晴れたり。大府より乗り換へて。大高まで行かんと思ひしに。一時間ばかりの待合あれば。こゝより歩みて直行する事にせしこそ。跡より思へば失策なれ。

### 三 菊の枯葉

茶屋の老婆の言葉を使りに。畑の中道より松林に入るに。道二つに分れて。右か左かの疑問起りぬ。

桶狭間問へど頭を打ち振りて松葉かく子は何も答へず知らぬにやと。猶あふ人毎に尋ねくゝて。あの山をや越ゆべき。あの森をや曲るべきなど。言ひつゝ行けど。中々來らず。二里と聞きしに三里は來ぬらんと。かこてど恨むべき相手もなし。

遂には桶狭間のどこへ行くかと問ひ返され。古戰場といへども。そんな處は知らずと答へて。要領を得ざる事甚し。

地圖を開きて説を立てゝも。せん方なければ。如何にすべきとつぶやきつゝ進むに。教子も始めてなるが。まづ道の立石を見附けて。オホシミチとあるは何ならんといふ。「大」の字の下に「しみち」と假名がきしたるなればオホにはあらず。ダイシミチにて。弘法さまの御参り道ならんといへば。さなりく。今思ひ出でたるは。桶狭間に大師堂ありと聞きたるやうなり。さらば之を目當にせんとして。桶狭間を止めて。大師様々々と問ひつゝ行けば。おぢゝもお婆々も。よく教へて呉るゝのみか。指さしても教へたる石も。引き続き立ち居て。迷の雲は晴れそめたり。

ゆき／＼と一つの大伽藍に着きぬ。山門ありて清涼院と額打たれ。本堂いかめしく。大師堂は。巡禮の札もて埋められたり。しるして新愛知西國一番といふ。

されど古戦場めきたる處なし。小僧に問へば。東海道の國道に向に越えてからなりといふ。げにも今朝見たる愛知縣獨案内には。國道より入る事一丁とありつるものと。今思ひ出だしても十日の菊なり。

辛うじて。目ざしつる古戦場の地にも着きぬ。枯野の薄。半は折れて。敗れし軍の。鎗の穂先にも喩へつべく。岡邊の松。嵐眠りて。骨朽ちたる大丈夫の。夢ひやゝかなるにも似たり。七つの石ぶみの下に涙を濺ぎて。治部大輔の墓前に立てば。線香の灰白うして。昔

を語らんとする蟋蟀の聲。糸より細きは何くよりか聞ゆ。

里人の手向け捨てたる古塚の菊の枯葉に風ゆるく吹く

冬の日には山のあなたに落ち果てゝ矢の根ほる子も今日は來らず

雨風の音は昔になりはてゝ小春の野邊に雲雀なくなり

四時間ばかりも迷ひあるきて。晝飯いまだ物せざれば。清水茶屋に

入りて。饅頭をと言へば。若き女は絞りの布に物さし當てたる手を

留めて。澁茶二椀盆にならべつ。

折しも馬車の通りかゝるを呼び留めて。乗られずやと言へば。馬を控へつ。

されども既に六人乗り居て。割り込むべくもあらぬを。強ひて入れては貰ひたれども。身を横にしても筋違にしても。二人腰掛くべき

餘地あらず。

是も一興よと笑ふ程に。有松きたりぬ。

有松の店ごとに賣る布よりも今日はおなかぞ絞りなりける

腹をねぢられ頭を打たれ。へりたる腹は夥たしくへりて。鳴海も來りしかば。約束の如く。輪ちがへ屋の前にて。おろしくれたり。疲れざりせば。輪ちがへはせぬかと。戯言も出づべき處ならましを。此町第一の有名なる宿屋と聞きたれば。如何なる大厦高樓なりやと思ひしに。いとくすぶりたる平屋にて。店のシカミ火鉢を抱へ居たるは。六十あまりの老婆なりしが。目を見張りつゝ。よく御出でなされたとだに言はず。泊るにてはなし。夕飯をし。風呂に入れて貰へばよしと言へば。それならばどうにかしませうが。お泊りでは。

どうも御氣の毒様でと言ふ。間毎に客ありて繁昌の様子なり。

辛うじて書生部屋めきたる一室を得て。壁の樂書など讀み居る内に。思ひの外早く。酒も來り膳來り。終れば湯にさへ。一番鎗の功名を與へくれたり。こゝに於てぞ。かの老婆の顔もかはゆくなりぬる。かくて大高さしつゝ車上にて歸る。月空にあり。同行者一人ふえたり。

#### 四 雪の知立

いつも見やらるゝ三河の大濱。一度は渡りて見んとて。汽船の乗場に行きたるに。今朝七時半に出でたれば。明日までは無しといふ。さらば和船はとて。又その渡船場に行きたるに。高濱までならば。

今すぐに出づるといへば。乗りぬ。

乗る時は。無類のなぎよと言ひ居たるが。俄に空かはりて風烈しく。船は右に左にゆらめき出でたり。されど眞ン眞ともなれば。矢よりも早く。かの岸に着きぬ。

高濱はさしたる處にもあらねど。境内廣き春日神社ありて。松林の奥に。擬寶珠もなき欄干のきざ橋。拜殿たふとく眺め入れらる。

こゝより眺むる知多の入海。やうく狭くなりて唐辛しの先の如く。境川に接せんとする處までも残さず。かなたには龜崎を左にして。有脇、藤江の村々。立ち昇る煙ゆたかに。呼ばらば答へもしつべし。

年明けば萬歳となるべしと思はるゝ一行と。馬車に相乗して刈谷ま

で行き。停車場前の茶屋によりて。晝飯ありやといへば。牛肉鍋に稻荷鮓そへて持ち出でたり。隣の間には。「拂はおれがする」「いやおれがする。」と互にりきむ鐵道工夫の酔語りを聞きつゝ。こなたにも鶴龜の附きたる盃を手取る。

知立<sup>ちりや</sup>まで一里あまりといへば。歩みて行くに。道よりすこしづゝちらつき初めたりし雪。知立神社の鳥居入る頃は。綿をむしりたるやうに降り來りぬ。

松立て、春まつ門にまだ咲かぬ花もちりふの杜の初雪

此町より東にゆく事。半道ばかりにして。牛橋といふ村あり。それより北に入りて少し行けば。無量壽寺といふ寺あり。近き頃より出で來りし八つ橋の名所は。こゝぞと聞きて境内に入るに。業平池と

しるしたる池ありて。杜若の枯葉のみ立ちたるは。いつ植ゑたるにか。あの白い物は何ぞといふに。立ち寄りて見れば。寺男のわざにや。大根の切屑あまた捨て散らしたるにてぞありける。

なくもがなと思はるゝ立札のみ多ければ。見さして歸るに。風は吹き強りて。車にて行く長畷の道。横にや倒されんと。いと危し。

刈谷に來れば暮れぬ。長く茶屋に待ちて出でたるに。顔にあたる物こそあれ。汽車の待合所に入る後ろより。教子の外套をはたきくるるに。始めて見れば。満身たゞ白くなりぬ。

鶴の毛か何ぞと人に拂はれて袖の雪しる薄月夜かな

面白しと見つるもわづか。大府より後は跡だに見えず。月は夜毎に冴えまさりぬ。

### 五 年の夕暮

大晦日の夕べにもなりぬ。

日の入りて後。そらありきするに。海の上は油の如く、三河の山々。烟の如く淡きに。湊の舟にや濱の家をや。ともし火赤く附きたりと思ふ間もなく。たき火となりぬ。こなたに掛かれる舟も。松飾して朝待つさまなり。

あれよといふ間に。美人の上唇と思ふ光は。山を離れて。見るく澄み昇る光。波に黄金の鱗を散らして。明るさ晝に似たり。陰曆の霜月いざよひとぞいふなる。

町に行けば賑ひ一方ならず。床屋にて順番待ち居る獵師の子供。十  
一二人並び居て。五百羅漢の孫めきたり。門松の下なる盛砂。半ば



は埋めていと狭き町を。人毎にあちへよけ。こちへよけて歩む。  
歸りて窓より又月に向ふ。仙境しづけき年の暮なり。

千鳥なく洲先の月を市人の火影はなれて見る今宵かな  
百八の鐘も聞えぬ波の上に二とせかけて月をこそ見れ  
磯ちかく碇おろし、大船のともし火消えて夜は更けにけり

### 六 初神樂

起きて時計を見れば。二時半なり。戸を打ち明くるに。月は隈なく  
照らして。海にはほのぐらきともし火。二つ見ゆ。鐘さへ何くより  
か聞えて。楓橋夜泊の心地こそせらるれ。

よる波の砂を洗ふ外に又月の夜がらす聲も聞えず

一眠りして夢破るれば。明治も四十と呼ばるゝ年の元旦。寺の勤め  
は早始まりて。木魚の音はるかに聞ゆ。盃を提げて井戸にゆき。口  
すゝぎ顔を洗ふ。手はつめたけれど。水はあたゝかし。

是もまた旅のめぐみぞ有明の月の影くむ年の若水

近くの神前神社かみさきに初詣です。廣前には大篝をたきて。人あまた當り  
居り。まづ拜禮して海に向へば。波は一めん紅になりて。東の空美  
しく。帆柱並べてかゝり居る舟。影は静に水の上にあります。  
下らんとして。石段半ば來つるに。笛の音起り太鼓の音聞ゆ。うし  
ろ髪引かるゝやうにて。再び登れば。今しも神樂の始まる處なりき。  
神子は十二か十三の娘が二人。緋の袴に白のチハヤを掛け。天冠を  
着て。神前に並びつゝ扇と鈴とにて舞ふ。

乙女子の立ち舞ふ袖に見えそめてのどかに返る年の初風  
舞姫の袂を見れば紅梅のうへに雪ちる心地こそすれ  
歸りて窓に向へば。初日ゆたかにさし昇りぬ。朝毎に見る光ながら。  
かはるは人の心ぞかし。

砂の上に松と我とを畫がきけりのぼる朝日の年の初影

庵のあるじは學校に式ありとて行き。おのれは炬燵かゝへて試筆す。  
いにしへに立ちも歸らで年の波いそちを一つ越えにけるかな  
時に樂隊の喇叭響き。君が代の歌。森を隔て、山彦かへす。かの御  
社にて。町民の祝賀會ありといふなり。

七 長篠の懐古

知多灣に別れて。豊橋に來りし又の日。長篠の古戰場見んとて行く。  
教子なほ同行して道しるべせり。

汽車を下りて。南の方に少しゆけば。寒狭川かんさがはの渡しあり。兩岸岩そ  
ばだち。碧潭底深くして面白き處なるが。教子はいへり。夏は鮎よ  
く取れて。味ひ美濃の長良川の次に位すと。

行きくゝて大通寺に入り。物問はんとて。和尚を尋ねたるに。法事  
に行きたるよしにて。つんぼの老尼出で來たれど。はかゆかず。畫  
圖と長篠戦記とをば持ち出だしたれど。價分らぬさまなれば。定價  
附を讀みて拂ひたるに。うなづきたる面持なりき。

寺を右に廻りて。うしろの山に入れば。落葉沈み重なりて。水溜り  
たる處あり。石ぶみ立ち居て。水盃の井と云ふ。武田氏の兵。とて

も長篠城を落す能はざるを知りて。戦を止めん事を諫むれども。勝頼聞かず。よりて將卒討死を約し。此泉を汲みて。水盃をなしたる舊跡なりとぞ。

大丈夫が汲みかはしけん盃の缺けぬ節を千代に見るかな

寺を出で。林重三郎氏の家を音なふ。氏が歴代占め居る邸こそ。奥平信昌の苦守して。寄せ来る甲州勢と戦ひし。長篠城の本丸の跡なれ。

北より西には。石垣築き廻したる土手ありて。老松枝を垂れ。垣の内には。柚の實の黄金を連ねたるが。美しく榮えたり。

あるじ幸に居合せて。雨戸を開かせ。いざとて座敷に通さる。南を受けられたれば。日よく照らして暖かさ春の如く。雲雀も歌ひぬべき空

なりと。口々いふに。廣やかに見やらるゝ庭は。麥畑にて。三四寸のびたる葉末には。風少しも動かず。遠くに鍬取る男ありて。かちかちと響く毎に。太刀の折れなど堀り出しはせずやと。問はまほし。こゝにて記録地圖。さては英雄の遺物など見たりし中に。古びたる一幅あり。眞黒にてさだかにも見分け難きは。何物ぞと問へば。さればなり。是こそ信玄公兜入れの不動尊とて。先祖より厨子に納めて。見るを許さぬ習なりしかば。先年國貞知事の巡廻せられし時。その事を語りしに。今は熱田の神劍さへ。年に一度は出だす事なれば。苦しがるまじと言はれしをもて。それより人様の御目にかくるに至りしなりと語りぬ。

勝軍いのる心を巻きこめてのこすか千代の國の御ために

城の地形を見めぐらんとて。東の方なる小高き岡に登る。帶郭おびぐるわと名づけて。狭く長く。非常を知らせの半鐘臺。其上に高く立ち。春忍ばしき梅の若木は。岡の陰にぞ蒼を膨らす。

霜雪に圍まれてこそ梅の花千代の香りは世に残しけれ

見渡せば。東より來る美和川みわ。一名板敷川は。北より來る寒狹川と出で合ひて豊川となり。更に西南さして流れ行く。その出で合ふ鼻の。三角になれる處こそ。我が今立ち居る城跡にて。其出先なるは野牛郭。其右なるは本丸、彈正郭。野牛郭の東なるが此帶郭。それに續きて。巴郭、瓢郭ふくべぐるわなどが有りたりといふ。

豊川になりたる流れに。釣橋かゝれり。名づけて牛淵うしぶちの橋といへるは。水の高低により。折々牛の吼ゆる如き音を立つる故ぞとかや。

矢叫のこゑ水底に千代かけてのこゑ響きか牛と聞きしは  
角に火をつけたる牛の古も思ひや出でし矢叫の聲  
鳥居の濱松に使せんとて。水底くゞりしも此あたりにやなど。懐古の心は湧き出で、止まず。

くゞり出でし水は歸らず歸り來て答へし言葉千代に枯れせず  
岡を下りて。野牛郭のあたりを見るに。岸高くして板立てたるが如く。下には雪と散る波。見おろせば目もくるめく。

美和川の川岸たかし敵の恨み沈めし淵や何こなるらん  
さし立て、守りし矛の面影に冬枯ひろき桑ばやしかな  
夕雲雀草に落ちても落ちざりし城のあと訪ふ麥の中道

是より新城しんしろまで二里あまりの間は。豊川兩岸の風景。畫にかくと

も及ばじ。舟にて行けば。快きこと矢を射るが如し。されば東久世伯も。いたく喜びて下られたりなど。あるじの曰ふに心動きて。おのれも歸りを舟にせばやといへば。人走らせて頼みやりたるに。恰もよし。下り後れたるが一つ在りといふ。有難しとて雇ふ事に定めてこゝを出で。小高き處の茶畑の中に。馬場美濃守の墓を吊らふ。冬木の櫻。夢しづかにて。柳ふさ〜と。信房殿戰忠死碑と彫りたる石を覆へり。

青柳の折れぬ節を櫻花ちりての世々に來て忍ぶかな

信昌寺に入れば。鳥居權現と稱へて。鳥居強右衛門勝商の靈屋あり。また玉垣し渡し。扉かたく鎖したる中に。知海常通居士と彫りたる。野づらの碑あり。是なん君のために使して君を辱かしめず。磔の刑

を敵より受けて城を全うしたる。天晴忠士の屍埋めし處なりける。花筒には櫛あを〜と刺しはやして在り。

わが君の命にかはる玉の緒の絶えても絶えぬ名こそ千代なれば。磔にせられたる畫像を見。その刑を受けたる地をも見て。岸を下れば。舷高く。舳臚尖りたる山川舟は。船頭二人。棹を片手に待ち兼ね居り。

### 八 新城舟

乗り移れば。釣橋を跡に見ながら。舟は直に下り始めぬ。

浅き處は棹を取り。深き處は櫂もて漕ぐに。其聲高く。うなるが如く。吼ゆるが如く。豊橋邊にて。大軒かく人を新城舟と名づくるは

是なりと。船頭の語るに。教子ほゝるみて我顔を見る。酔ひて居眠る先生の躰と何れぞ。

岩また岩。巖また巖。白きは雪よりも白く。黒きは墨よりも黒く。獅子の鼻突き出だしたるもあれば。虎の伸ばさんとして。首ちゅめたるもあり。あれは何ぞといへば。玉菜を二つ三つ束ねたるやうなりとの説も出でぬ。都近からば。大黒岩とも夷岩とも名づけらるべきに。一つも名の附きてあらぬこそ幸ひ。よみ人しらすの作にこそ。古今集の歌も名吟は多けれ。

浅瀬來りて水急なる時は。躍るが如く打ち越えて。雲なき時雨を身にあびせられ。數丈の大岩前に當りて。踏ん張り留めんとする時は。棹をあやつりて之をよけつゝ。舳先早くも左に向ひ。一めぐりして

又右に向ふ。

少しの暇を得て見上ぐれば。屏風立てたるが如き上には。人家まれまれにありて。庭の南天。逆さまに赤き珊瑚を水に移し。道と橋と岸と林と。見えては隠れ。隠れては見ゆ。

柴人を雲井に渡す棧の龍の腹見てゆく舟路かな

岩の間より落ち來る瀧あり。水の廣き處に至れば。筏いくつも作り並べて。葛もて岸に繋がれたるあり。其上を人あゆみつゝ。矢立もてしるし行くは。下さんとする材木の數を調ぶるならん。

岸また岸には。鎗立て並べたる寒林の。天を摩しつゝ來るかと思へば。常磐の影の續けるもあり。水を呑まんとする岩の口には。逆さまに垂れたる枯苔白髯の如く。綠まじらぬ一むら薄は。岩を縫ひつ

つ嵐なきに靡けり。  
 水やう／＼ゆるく。碧いよ／＼廣くた／＼へて。上り來る白帆。幾つも幾つも顯はれたるは。千幅巻き終りて。更に一幅を披くの思あり。魂迷ひ心あくがる程に。蜂の巢といふ處にきたる。  
 軒の如く差し出でたる一枚の巖。廣さを測らば。家幾棟にか餘らん。形の奇なる。色の奇なる。それらの事は姑く措き。すべて蜂の巢のやうに穴明きたるは。神の彈丸を受けたる跡か。其下陰に舟さし入れて天井を仰げば。さながら釣鐘を下より見るやうにもあり。昔は大船五艘を入れたりしが。今は缺け崩れて。小さくなれりといへど。猶三艘の夕立避くるには足りぬべし。  
 妙なり妙なりと感じて止まぬを。船頭更に向の岸を指さし。あの芝

原に立ち並べるは。皆櫻なり。春は花見がてらに來給ふ人々。引きも切らずといふ。さては舊地頭どの、花の木を植ゑて。櫻淵と名づけられしはこゝかと問へば。さなりと答ふ。  
 さて此天然の大文章。波瀾あり抑揚あり頓挫あるかと思へば。收結千鈞の力もて。名殘惜しくも新城に着きぬ。  
 時計を見れば時間迫れり。大汗になりて走りたれば。汽車の俊寛をば學ばずし止みぬ。乗りての後も。馴れたる豊川。ある時は見え。ある時は隠れ。遂に言葉なくして別れし間もなく。同じ名の停車場きたれば。下車しぬ。いはゆる。豊川稻荷の參詣もしてこんとてなり。

## 九 岩山の観音

汽車にて東海道を行きかふ毎に。いつも仰ぎ見らるゝ岩山の観音。詣で、見んとて。海道と新道との間に入る。坂少しゆけば早麓にて。茶屋あり。こゝに外套も帽子も預けて。藁草履をはき。岩かどに這ひ附き。小松の枝を力にしつゝ。あぶなしすべるなゝど。戒め合ひてぞ登る。

頂には。我丈を二つ合はせたる大ききの御像。弓手に荅の蓮華を持ちて。東向きにぞ立ち給ふ。

其御膝元に腰打ち掛けて。遠く見やれば。東には只足もとを。東海道ゆく汽車の。轟き過ぐるあり。西に向へば渥美灣内。手を伸ばさば握らるゝ如く。端田鼻は右より。大洲崎は左より。差し出でたる

間を埋めて。白帆の浮び並べるあり。

千里まで今日は霞まぬ冬の日のめぐみ渥美の海を見るかな

携へ來ぬる蜜柑を佛前に手向け。教子と共に喉を濕ほしなどして。御堂のある處に下る。固く鎖して人もなし。

かの佛像の御膝の下は。いと大きな洞に爲り居て。入れば山彦ものすごし。始めて人の岩屋と呼ぶは。岩山の訛りならざるを知りぬ。

## 十 羽田野文庫

観音詣よりの歸るさ。平井氏の紹介にて。羽田野文庫を見る。文庫は八幡宮の神官たりし。羽田野敬雄翁の創建にかゝり。珍書奇藉ほとんど三萬卷。今は二代目となりて。手を入れざれば。蟲ばみたる



も多けれど。猶外へは散らさずといへるぞ嬉しき。その建て方は。土藏づくりの神社かと思はるゝ姿にて。白壁に瓦葺の屋根いかめしく。軒には注連縄張り渡して。入口には神代文字にてカムナガラのの五大文字を書きたる奥に。天保四癸巳六月十八日應羽田野敬雄需。平田篤胤書。としるせるを板に彫りて。藍を入れたる額を掛け。その一つ奥には。積中外諸典。權大納言實萬。と白字にしたるを掛け。兩開きの扉には。向ひて右の方に。須賣神能秀庫の能書波外邇波出佐受。左の方に。讀麻久能欲祈牟人波此所爾參來禰。と彫らせらるこそ。此志深きあるじの翁が筆の跡ならめ。さて入りて見めぐらせば。豊けき年の里に積みたる米俵よりも多き。本箱ごとに部門をしるし。猶書名までも委しく書きつけたるは。い

たく心を盡されたと見ゆるに。いつの頃より掻き亂されけん。目錄に合はせ。蓋の書名に合はせて搜らんとするもの。必しも箱の中に在らずなどして。今は繰り出だす事。とても叶はずと。平井氏はひそかに語りて歎息しつ。

薪を舟より投げ上げたるやうに。豎横十文字に打ち積まれたる書。いくつもく有るは。寫本など多きやうなれば。一つ二つ手に取りて見るに。翁が歌文集の下がき。さては手控隨筆の様なるが多し。表紙に記したる年號を追ひて。打ち揃へ見れば。間に抜けたるも有れど。嘉永元年五十歳と。しるせるを始として。明治八年六月一日より。七十八榮木老人としるしたるまで。二十七八冊ぞ見出でられたる。始は袖びかへと記し。後は机上日記として表紙の傍らに。さ

かきぞの」といふ翁の家號を。酒氣園。椀園など書き。釋迦棄苑と戯むれがきにせるさへ有り。

しるせる事は。歌文稿を始として。祝詞のりとの下がき。文庫に寄附の受取がき。よみたる歌の抜がき。見聞の控など。筆のまゝにしたるものにて。物考ふる時のすさびにや。畫や字や樂書せる處も多し。

翁の面影忍ぶには。いとよき便りなるを。只衣魚しみてふ虫の住むに任せて。開かんとすれど。べりくと音して。中々離れず。綴糸の切れたるも。表紙の無きもありて。惜しき事限なし。

おのれは常に。藏書のため苦しむものにて。亡からん後を思ひやれば。只此さまよと。獨り涙に咽ばるゝのみ。

君ならで誰かは知らん尋ね來てしみの室屋にそゞく涙を

### ○北山里

那谷寺——山代温泉——蟋蟀橋——山中温泉——雌鳥岩——東海道

#### 一 那谷寺

和倉わくらよりの歸るさ。山代山中やましろやまなかの湯あみも試みんとて。動橋いぶりはしに下車せしは。九時半頃。すぐ前の茶屋に行きて。朝飯あさけをと言へば。裏の離

整理の事を。くれぐれも平井氏に語り置きて出でぬ。あるじは外に出でたる由にて。遂に得逢はざりしこそ。遺憾なれ。

宿りに歸れば。夕暮近し。新聞を見れば。東京は雪なりしと云ふ。

(二十九年十二月より四十年一月まで)

れに案内す。窓の外は。今を盛の蓮池なり。何か有りやと問へば。鮒と烏賊とのみ。鮒を刺身にして上げませうと曰ふ。やがて膳出づ。約束の刺身に雀焼をも添へ。又烏賊の煮たるを盛りたり。鮒は名高き柴山湖のなりといへば。よからんとて箸を下すに。烏賊また中々の美味なりき。

こゝより車を雇ひ。那谷寺なたでらに行く。一里なりとぞ。車夫ホヤ掛けませうかと言ふ。我頭いまだ禿げざるにランプあつかひ奇怪なりと。つぶやきたるこそ誤なれ。幌をこゝにてはホヤと云ふにぞありける。寺は加賀の國江沼郡にて。村をも那谷なたと呼ぶ。小流れの石橋を渡りて。境内に入れば。左右に杉林などありて。日の光も漏らす。苔青き石燈籠立ち連なりて。奥深き處を幾町も入れば。左の方に寺あり。

尙入れば廣やかなる池ありて。苔もちたる蓴菜は水の面に浮び。かなたの山は皆岩にて。上より軒のかぶさりたる如き處。洞になりたる處。臺めきたる處などに。観音の石像六七體あり。耶馬溪の羅漢寺を。小さくしたる面影ぞ見ゆる。車夫いふ。あの池に臨める梢は皆紅葉にて。今六十日も遅く御出にならば。美しき盛を見給ふべきにと。こゝの紅葉と。山代の松茸とは。秋の遊山として。珍重せらるゝ物ぞと云へり。

水のうへをおほふ緑は悉くもみちなりけり霜の戀しさ。池にかゝれる橋を渡りて。石段高く登り行けば。清水きよみづめきたる舞臺ありて。本尊の觀世音は。岩の中深く。御堂立てゝぞ祭られ給ふ。寺に案内させたれば。袈裟掛けたる僧は來りて。御扉を開き。鉦打

ち鳴らしては。普通品を讀誦し。又一卷の縁起を讀み聞かせ終りて。更に其大意を説明す。中に言ふあり。此山もとは岩屋寺と稱へしを。花山法皇御駐錫の日。一番の那智と。三十三番の谷汲とを。兼ねたる地形なりとて。其頭を一字づゝ取り。那谷寺なたでらとは名づけ給へりと。導かれて本尊の後ろに廻れば。岩の中ほのぐらく。豆人形の如き。三十三體の金佛かなほとけは。箱庭のやうなる中に。肩摩り合ひつゝ立たせ給ふ。

寺によりて寶物を見。車急がせて山代やましろに行く。二里ほどの道なり。車夫また我が體量の多きを褒めて止まず。求むる心なきにしも非じ。

## 二 山代の湯

山代に着けば。くら屋あら屋とて。二つ並びたる湯の宿あり。何れも一二を争ふ家なりと聞けば。あら屋の方に行く。

玄關に並びたる下駄の夥しさ。さながら嵐の後の落葉に似たれば。繁昌だなあと言ふに。出で來たる女中。返事もせずこちへと言ひしが。泊りならずと聞きて。園かじみと標札打ちたる。四疊半に押し入れたり。宿の繁昌は賀すべしなれども。客の閉口は弔はざるべからず。庭は岩山の壁にて覆はれ。風も來らねば日の目も見えず。

まづ湯にとて行けば。浴室は新しくして。硫黄の香りある鑛泉。なみなみと沸へ。晝飯の時刻なればにや。女客二人あるのみにていと静に。桶は木をくりたる物にて。お鉢の形したるは。聊か心を慰む。永くあびて出づれば。廣き室に椅子ありて。腰かけ涼まるゝやうに

出来ぬたるも。次に氣に入りぬ。

又穴室あなむろに歸れば。卷帯にてだらしもなき女。來りて膳を据ゑる。奪ふが如く茶碗を手に取り。横向になりてさつさと盛る。實は一酌と思ひしに。此無愛嬌さに。飲みたくも無くなり。二膳ばかり無言の内に濟まして。是から町を見物するといへど。案内しませうかとも言はず。

服部神社に參詣し。岡つゞきななる公園に登る。奥も知られぬ松林あり。秋萩は半ば花となりて。梢には時雨るゝ蟬の聲いと繁く。樂隊の稽古場も。かくやと思はる。

湯あみして登る山路の松林汗も氷れと秋風ぞ吹く

打ちよする波かとはかり立ち並ぶ湯里の軒を木の間にぞ見る

一夜は泊りてと思ひしかども。後ろ髪引く物なければ。山中さして直に立つ。此道も二里といへり。

### 三 蟋蟀橋の一夜

山中温泉の寫眞は。新橋停車場に掲げられて。見る度毎に。遊びたき思の燃やさるゝ事。四五年になりぬ。今日こそとて樂しみつゝ行けば。道の暑さも物ならず。

川のかなたに大きな岩見ゆ。車夫指さしつゝ。あれは山中の猫岩とて招猫の形したりしが。十八年前の地震にて缺き落され。大事の首と手とが無くなりぬ。惜しき事してけりなど。語り行く程に。着きぬ。

三十餘戸の温泉宿。何くも客溢るゝの大繁昌といへば。よき座敷は。とてもむつかしからんとて。まづ綿屋より問ひ始め。家毎のやうに車夫頼みくるれど。間の明きたるといふ家なし。遂に何がし屋の別荘といふまで。尋ねたれど。断らるゝ事同じ様なり。

車夫曰く。こゝの人間は薄情にて。一人の御客と。一晚泊りの御客とは嫌ふなり。困つた處で御座いますと。我西行さいぎやうならねば。歌よみたりとて。ゆるす江口の君も有るまじきを如何にせん。留めぬとならばせん方なし。かねて聞く蟋蟀橋こほろぎはしの茶屋まで行きて。夕方まで涼み。大聖寺に歸る外は有るまじ。如何にと言へば。大聖寺の車は三臺居たれど。皆御客を載せて歸りぬ。こゝからは行く者も無からんと。眞心を満面にあらはして語れば。さらば蟋蟀橋こほろぎはしの茶屋に事情を話し。

一泊させて貰ふやうに。頼み呉れずやといへば。一つ骨折つて見ませうと。かひなくしく受合ふ。

間もなく恵比須樓としるしたる家の前に。楫棒をおろせば。家の名の福神めきたる亭主は。にこやかに出で迎へ。大黒天のやうにふとりたる妻君は。愛嬌こぼして。こちへとしるべす。

始めて同情者得たる心地して。どちらぞと問へば。三階なりと答へながら。階子を下へと降れば。いぶかりつゝ。随ひ行くに。座敷を通り抜けては。又階子を降る。げにも三階下によき座敷ありて。欄干に倚れば。名もなつかしき蟋蟀橋は。虹の如くに懸りて。間近く向はれ。かなたもこなたも。高さ數丈の切岸にて。下は岩切る水の走り來りて。淀める處は。藍よりも青き淵をなし。甲斐の猿橋。さな

がらこゝに面影を見せつ。

橋より上には。石白き河原あり。岸の半腹より汀に掛けて。床几を並べ。ケツト敷きたるに。酒盛しつゝ涼み居る女づれも見やらる。起伏さまゞの岩の姿。喜怒いろゞの水の流れ。幾日見るとも飽くまじきは。此山川のながめぞかし。

石和川いさわがはの日蓮上人は。宿を断られたるが爲め。辻堂に入りて。鵜飼の翁を成佛せしめ。今の我身は。山中に留められざりしをもて。人の宿らぬ幽邃の境に。夜すがら山靈の音楽を聞かんとす。事こそかはれ。嬉しさに二つやは有る。

車夫の相談は快諾せられて。泊る事になりたれば。湯かたに着替へなどして。近きわたりを散歩す。橋より振り返りて。我樓の岸に片

懸け作られたるを見れば。文人畫の山水も。筆限りある風景といふべし。

歸れば乙女茶をすゝむ。年はと問へば。十六と答へ。名はと問へば。ゆうと答ふ。名物の鮎を焼きて。酒をといへば。はいと返事して行きたる間もなく。林檎の切りたるを肴に。銚子持て來たり。心は幼なけれども。客には馴れて。酌をよくす。

肴は言ひ附けたる外に。鮎の魚田。麩の吸物。鰻の蒲焼など出でつ。餘りの快さに思はず過して。いざ御飯をといふ頃。母なる人も來りて。頻りにもてなし。あつき煮花を入れて。うな茶にしませうかなと言ふ。

この家に男の子あり。東京に奉公させたるが。今は名古屋に移れり。

戦争の年は。凱旋ある毎に。穴門あなもんの寫眞を。皆送りたりとは。母の話の一節なりき。されど私のやうな者は。東京も知らずに死にますわいの。東京は小石の數ほど。人様が詰まつておいでる處じやさうな。など問はず語りして笑ひぬ。

水の音に一夜の宿を惜しみつゝ、あたをなさけと知る夕べかな思はず轉寢して居たるに。亭主來りて山中の湯に御供しませうと言ふ。今夜は酔ひたれば。明日にすべしなどいふ折しも。俄に降り來る大夕立。暫しは水音にも打ち勝ちたり。是も程なく止みて。いつしか暮れはてたる秋空。星物凄く照らしたるに。橋ゆく一つの提灯。暗を破りて美しく見ゆ。

橋のうへを秋の螢の渡るかと思れば影あり山に歸る人

月を待たんと思ひつるに。床取らせたりといへば。筆持ちて蚊屋の中に入る。雨戸をしめたれば。いと暑し。夜ふけて早足に。階子を下り來る人あり。誰ぞと問へば。私ですといふは。女あるじなり。何しにぞと問へば。どこかお加減でもおわるいかと思うてと言ふ。くしやみをしたる聲の高さに。驚き覺めたと事わかり。大笑となる。かの山中のつれなさ。此蟋蟀の親切と。くらべては。山と水との相違のみならんや。

#### 四 蝸の聲

閨の苦しさに起きて。雨戸を開けば。天地まだ半ば眠れり。

橋わたる人まぼろしの心地して夜は水よりぞ明けそめにける



階子を下りて。いな上りて。表の戸を開かんとするに。固くして動かす。物音聞き附け。亭主も起きて。一枚明けて呉れたれば。出でて山水に口すゝぐ。

同じくは日の出でぬ内にと。あくがれ行けば。片山陰に鳥居あり。石立て、。長谷部神社としるしたり。

源平の合戦の幕明に。高倉宮の藏人として。襲ひ來る敵を討ち退け。武勇の譽れを青史に遺し、。長兵衛尉信連は。此地に領所ありて。鷹狩に來りしが。傷つきたる鷺の。蘆間の流れに足打ち浸すを見て。靈泉のある事を知り。中頃絶えたる温泉を興して。諸人に利せしめたりといふ事。由來記に見えたれば。之を祭れる社ならんと。草葉の朝露。踏み分け、。少し登れば。拜殿と正殿と立てり。

それより山中の町を過ぎて。河邊に出で。黒谷橋を渡る。蟋蟀橋の方より來れる水は。こゝに又青淵をなして。淵の半なる大岩の上に。橋柱は立てられたり。

橋柱岩根に立てし危さも知らでや月の夜は渡るらん

おのれも渡る、河上を見れば。うねり、來れる水は。面白き岩の腰を洗ひ。其上に亭の立てるは。酒飲ます家の物なるべし。川下の方は水やう、淺瀬を走りて。岸には卯つ木に似たる花の。むらがり咲きたるあり。

東山遊園地といふしるべのあるに。そゝのかされて。下駄の齒を食ふ朽木橋を渡り。つゝらなりなる細道を。蜘蛛の巣かき拂ひつゝ登る。露もつ薄は顔を撫で。踏ま、く惜しき萩女郎花は。道を遮る事

もしば／＼なり。

高みに立てば。煙ゆたけき山中町。木の間より一目に見えて。いづこなるらん木魚の聲聞ゆ。

山もとの朝のつとめの聲すみて古城さむし松の下露

古城跡の石ぶみ。淋しげに立ち居り。

下りて更に。町の西なる醫王寺に登る。石段いと高し。

境内清らかに。苔を染めたる百日紅の落花。露の白きと半して。踏み亂す朝詣の人もまだ見えす。寺男やう／＼起き出で。釣瓶を井の底におろしぬ。佛前の額は白河樂翁公の筆にて。國分山の三字を書きたり。

石の數かぞへて登るきざはしの上に寺あり日ぐらしの聲

かの東山は。大聖寺川を前にして立てる姿。さながら京都のに似たるを以て。名づけしにもあらん。今この醫王寺は。大井川こそなけれ。又西山なれば。法輪寺なども云ひつべし。歸りて朝飯の膳に向へば。鮎は更に風味をかへて。春切となり。鹽焼となり。照焼となりてあらはれたり。乙女は給仕盆を團扇にかへ。箸とる客を扇ぎくれつ。來年の夏も遊びにこよと。くり返し言ふ。いざ道明が淵を見に行かんといへば。御案内しませうとて。亭主先に立つ。蟋蟀と黒谷との間にありて。藍よりも青く湛へし水の。瓢箪なりになりたる紐附の處に。丸木五つ並べたる橋あり。薄氷を踏む心地しつ。渡れば少し高き處に。芭蕉の句碑あり。山中や菊は手折らじ湯の匂。の文字見ゆ。

いざ我も薬の水を身にあびん手折らぬ菊の香り尋ねて

### 五 山中の湯

亭主に別れて町に入れば。浴場は二棟ありて。一つを菊湯といふ。平湯ひらゆと稱へて。湯銭は一銭なり。一つは梅湯にて五銭なれば。まづよき人の入る處とす。菊には中に着物おく室なきにや。入口に小娘五六人。客の浴衣を預かり。いく枚も打ち重ね。肩に掛けつゝ立ち居り。

梅の方は。おのゝ釘に掛け置くやうになりゐて。人も左程に込み合はず。湯は熱からずぬるからず。清らかなるこそ嬉しけれ。

再び歸りて。瀧に冷やしたる西瓜を切らせ。名残は残れど人に契り

し事もあれば。大聖寺一時十四分發の。上り列車に乗らんとて立てば。妻君土産の焼鮎を持ちて。遠くまで見送り來る。川ぞひの道。葛の花いと美し。

### 六 跡もどり

停車場の加納屋といふ茶屋にて。休むこと一時間餘。この列車にて。菊舎ぬしの金澤より歸ると出であひ。長濱まで同行して。竹生島に遊ぶの約束なりしに。我が乗らんとするを押し戻して。ぬしの一行皆おりきたる。何故ぞと問へば。大洪水にて。東海道の汽車。不通なる處多し。少なくとも二週間は恢復の見込なしといへば。途中にて逗留せんよりも。寧ろ山中に入湯する事に定めたり。是非今一度同

行せよといはるゝなり。それも憎からずと。此度は馬車一臺買切にして。總勢七人いと賑はしく。又中山に跡もどりす。宿は昨日断られたる三谷屋の別荘なるが。多人數ならば屹度とむるとて。加納屋の主人の紹介せしも著るく。三階を二間貸し呉れたり。庭には。茂る木立を隔てゝ。涼しき瀧の響を聞く。停緑園と名づけたり。

玉すだれ動かぬ日にも繰る糸の手風に靡く瀧の下草

酒めぐりしかば。昨日門前拂を食はせられしは。それがしなり。いかに情なき宿屋ならずやと。女中に向ひ攻撃を始めたるに。菊舎ぬしも。客あつかひを知らぬにも程が有るとて。更に將來の忠告までも與へたるが。末は何の話にかなりつらん。一酔一眠我事足るの大

つ切にて。早くも蚊屋の中の人とはなりぬ。

### 七 御取越

停緑園にある事一七日。朝夕二度づ、梅湯に通ふを。日課とし。筆を執らんとして窓に向へば。川のかなたの猫岩は。友となりて語るが如く。暑さに倦みて庭に出づれば。今を盛の百日紅。日中も眠らで笑顔をかはす。

日の影もうす紅の色にさく花の百日は我ぞ經なまし

ある日の事なりき。夕飯をへてから。菊舎ぬしの奥方と共に。散歩せんとて町に出づれば。賑はしく人々ゆきゝす。門徒寺の報恩講なりといふ。團扇づかひの御取越いと珍し。行きて見んとて門を入る

に。都の如く。館屋煎餅屋などの店出で。階段には板もて橋を渡し。其上に麴朶の束ねたるを。俵ならべたるやうに積み上げたれば。すべりはせざれど。下駄にてはぶく／＼はまりて。歩きにくし。御堂には。善男善女入り込みて。佛前のももし火。晝よりも明るく。若き法師の。聲は聞えねど。何やらん讀み居るやうなるは。お文なるべし。今に説教が始まらんとて。垣なす人々の後ろより。奥方と共に。伸び上り見て居たれど。何一つ分らぬつんば座敷にて。せん方なければ。歸りぬ。

歸りて聞けば。住持はまだ若き人にて。京都の大學に入り修業中なり。されば暑中休暇に歸山し居る時日の内を撰び。此三日間執行せしなりと。菊舎ぬしを揉み居る按摩は語りぬ。

### 八 雨の夷樓

一夜の情うれしかりし夷樓には。日毎のやうに遊びしが。山中を立たんとする二日前。名残の蟋蟀なりとて。皆うちつれて雨中に行く。いつも見ざりし大瀧小瀧。河岸の岩毎に流れ。近き山々は皆雲に入りて。目の前の梢まで。煙飛び散り。樓にも橋にも。人影稀なるに。川上の岩に。簑着て釣する人の。淡く見やらるゝは。静けさ限なし。

わが外に鮎の香めづる人ひとり見えてさびしき雨のたかどの例の鮎と鰻を。さまざまに料理させて。盃めぐらす。此家の妻君は。粟餅一重。煙の立ち居るを取り寄せて。子供達へと贈れり。黄なる色して美しく。味また軽くてよし。山中の名物なりといへば。外には何も名物なきかと問ふ折しも。是も其一つぞとて。娘の持て來れ

るは。鶯菜の漬物なり。

をとめ子の年も二八の春の色を常磐に見せて鶯の鳴く  
よろめきく歸りて湯に行く。二百十日も無事に済みたり。是にて  
は百姓も。牡丹餅こしらへて祝ふべしと。浴客互に語りあふ。

人毎に事なき秋を祝ひ合ひて言葉花さく雨の夕ぐれ

夕飯は殆ど箸つくる人なし。女中は通ひ盆出だしながら。旦那のお  
肴さへ。そっくりして有るはとて笑ふ。蟋蟀橋の樂屋を知らざれば  
なり。

### 九 雌鳥岩

其翌日なりき。心に掛かり居たる川上の雌鳥岩めとりいは。見に行かんとして。

夷樓に立ち寄り。娘に案内せずやと言へば。亭主にこくししながら。  
私まゐるべしとて。籠に正宗、玉子など入れたるを携へつゝ。先に  
立つ。二里ばかりの道なり。

川を左にして。十町ばかり行けば。天満宮あり。社内に三本の杉の  
木立てり。村の名によりて。栢野かやのの大杉と呼ぶ。一番大きなに。

二人兩手を廻して見たれば。五抱へ半ありき。

一步步々と。浮世を離るゝ遠く。只たま〜行き逢ふは。四角なる  
炭俵を。車に積みて挽き出づる山賤のみ。

流れを東に渡る橋あり。鶴の橋と名づく。こゝより見れば。下は早  
瀬にて水白く。くねり來りては。曲りて走る。

水を隔てゝは。壁を立てたる如き山に向ふ。山に杉ありて。賤が嶽

にて突き並べたる鎗よりもするどく。天を刺し。裾野の草原。大かた葛の花となりて。戦場の血よりも赤く。水に近くは。男郎花をとこめしのみ林を成して。時を忘れては。卯の花の盛かとぞ思はるゝ。ゆくての方なる高山こそ小富士よと。仰ぎ見つゝいふに。白き棒杭のやうなる物はと問へば。あれは陸軍の立てられたるにて。かしこに登れば。加越の海岸。ことごとく見ゆると語る。

雌鳥は來れり。河原に下らざるべからず。岸高く峻しくして。踏み掛くべき便りもなし。亭主は一つの道を見出だして。猿の如くに早おりたれど。恰も天井より柱を傳ふ鼠の様にて。己には力能はず。さりとして羽衣の天人もどきに。飛び行く鶴鴿をのみ。羨みても居られねば。下駄を脱ぎ。下より支ふる亭主の手のひらを足場としゝ。

辛うじて下りたる折しも有れ。草の葉陰の溜り池に。足踏みすべらし。見事に尻餅をこそ。搗きたりけれ。

こなたの岩の高みに上れば。流れの中央に位置を占めたる大岩は。さながら雌庭鳥の。羽づくろひしつゝ。飛び立たんとする形して。親しく目の前に向はれたり。

あしたする譏りを人に受けじとや飛ばんとしても鳴かぬ君かななど言ふく。冷酒汲みかはすに。鳥の腹打つ白波は。思ひのまゝなる聲立てゝ。人の話を妨ぐる事。おびたゝし。

亭主おりゆきて。泥つきたる浴衣を洗ひ呉るれば。裸のまゝにて。玉子など割る。のんきななるは。人里遠き山中ぞかし。

雨はらくと來りて。見る間に山も隠れたれば。こゝを立ちて。ぬ

れたる浴衣を引き懸けながら。少し元の道を。川下へと下るに。  
へ渡る幅狭き橋あり。踏めばゆらめきて。氣味わるけれど。真中ま  
で行きたるに。雨は止みぬ。

こゝこそとて。亭主は風呂敷を橋板に敷きて。すわれと言ふ。是又  
一興なりとて。二人對座し。又盃を廻らすこと數十分。下は四五丈  
もあるべく。水の色眞さをにて。淵を成し。上の方には。岸より落  
つる瀧も見え。雌鳥は猶ありくと眺めらる。

老いたる木ありて。枝を逆さまにしては。水の月取る猿猴の如く。  
其手を下に伸ばし。草も蔓も下へくと生ひさがりつゝ。鏡見る乙  
女よりも。猶うつくし。

おどろかぬ鳥こそ巢ぐへ山川の波の鼓を神は打てども

通りかゝるは。炭を脊負ひたる婆アさんなり。酒宴の蕙を片寄せざ  
るべからず。跨いで行きねと言へば。一禮して過ぐるに。菓子二つ  
與へたれば。御馳走かなとて。戴きつゝ行く。飾なきこそ野邊の花  
なれ。

次に來たるは鮎釣の翁。岩見んはかなた善からず。こなたこそとて。  
懇ろに道を教へくれたれば。あぶなき細道。たどりくゝて。大岩の  
上に攀ち登るに。前に向はるゝ雌鳥のみかは。空打ち仰ぎて。吼え  
んとする獅子もあれば。水にうつぶし。魚をねらふやうなる鱒も見  
ゆ。琴柱立てたるやうに。踏み跨がりたる洞門よりは。水眞綿の白さ  
にて潜り出で。筆枕めきたる上より。餘りし水のこぼれて越すは。盆  
の靈柩たまなに懸けて供ふる。素麵にも似たり。



我が居る岩は。穴ところどころ抜けて髑髏の如く。雌鳥との間には。逆巻く急流ありて。大瀧と呼ばれ。一たびすべりて此中に入りなば。身は渦とや消えも果てまし。

かくて酒も盡きたれば。時計を見るに二時なり。いざ歸らんといへば。亭主曰く。是より四里ばかり奥に。九谷村といふあり。焼物の事は御存じなるべけれど。聞き傳へたるには。後藤才次といひし人。ある時大聖寺の新橋といふを渡りつゝ見しに。水の色かはりたり。此水上に。陶器を彩色すべき砂こそ有らめと。水のまに／＼。大聖寺川を尋ねのばれば。流れ分れて二つになりぬ。本川は大日ヶ嶽より出で。枝川は千束が瀧せんぞくより出づるなり。又つく／＼と見て居たりしが。千束の方なりと考へ定めて。のぼり

はしたるものゝ。突き立ちたる切岸。瀧より上には。行くべき道なし。よりにて土を持ち行きては焼き附け。持ち行きては焼き附けして。やうやく階子を作りたり。名づけて今も。後藤の焼附坂と云へり。かくの如く千辛萬苦して。坂の上に竈を構へ。始めて焼きたりといふ花瓶は。一對揃ひて。村の鎮守に奉納してありけるが。先年お西の門跡の來られたる時。紀念として献じたりしより。今は一つのみ残り。此次は。旦那をかしこまでも。御案内申したきに。など語る。

又ついでに。蟋蟀橋の名はと問へば。もと幕府の頃は此橋なくして。川下の方より。向ふの村々へ通ふ事なりしが。年々橋流れて困りたり。よりにて安全なる岸を見附けて。永久の橋を作らんと。役人此と

ころまで。調査しつゝ来りしに。蟋蟀一つ。ふと草の陰より立ちて。かなたの岸に飛び渡りぬ。是なるかなとて。遂に工事を起しつるが。其始なりしと。

歸りには。蒟蒻橋などいふを渡り。姿見などいふ村すぎて。夷樓に來ぬれば。娘も母も。茶を入れなどしてもてなす。

それより采石岩さいせきいは、馬洗池うまあらひいけなどいふを見て。停緑園に歸れば。日ぐらし遠くにも近くにも鳴く。

### 十 桂の清水

暮るゝには。猶間のあれば。桂の清水見んとて行く。町より五町。大聖寺へ行く道の傍にあり。

清水を覆ふ桂の大木は。本より八つ九つに分れて。さながら素蓋鳴尊の退治し給ひし大蛇のやうに。四方八方に枝を廣げ。首打ち垂れて。壺の酒を飲まんとするも有れば。飲み果てゝ風にあたらんと。空を仰ぐもあり。身には苔生ひ宿木茂りて。血こそ流れね。見るめすさましき姿は。簸ひの川上なるにも劣るまじ。

水は木陰の岩間を傳ふを。竹の筧に受けて。岩を穿てる鉢に満たせたり。飲み試むるに。つめたさ氷の如し。

久方の月の桂の下露をくむ手に秋の立てるをぞ知る  
地藏堂ありて。石の佛は。盆近ければにや。桃色木綿の輪袈裟花やかに。立たせ給ふ。

## 十一 乗合馬車

うとくするかと思ふと。旦那々々といふ聲す。女中の起しに來たるなり。時計を見れば。四時十五分前。支度して立たんとするに。馬車のリンが鳴りたりとて。又告げに來る。菊舎ぬしに送られ。男にカバン持たせて。外に出づれば。冷氣衣を徹して。下弦の月すこく空にあり。四時半に發車す。振り返り見れば。日頃なじみたりし東山も。水無山も。まだ眠の内に立てり。

乗り合は七八人にて込み合はず。中にも大阪の人多く。箕面みのおの紅葉話など始まりたるに。よその國人曰く。箕面の紅葉見には。一度參じましたが。茶屋が一軒しかなくて。込み合ふには困りました。大坂人曰く。箕面には茶屋も多く。宿屋もあり。あなたの箕面は。ど

この箕面でおます。かの人。箕面は三の尾の一つにて。高尾、横の尾、みの尾とて。名高きに非ずやといへば。聞き居たる他の人。いやそれはミノブの事でせうと言ふに。大阪の女。口を出して。ミノブならば信州でおますがとて。大笑となる。

## 十二 近江路

暫く大阪にて遊ばんと。米原より乗り替へたるに。前には。大風呂敷を携へたる。三十四五の婦人と。わが左の隣には。其子なるべし。八つ九つの愛らしき乙女あり。蝶のつきたる白地の帷子に。海老茶袴をはき。髪はお下げを上結びあげて。桃色のリボンを掛けたり。汽車の留る毎に。「か、は、ら」の、と、が、は、ら」など。一字づゝ拾

ひて讀みゆくも。あどけなし。  
 草津にて求めたる姥が餅を。半分わけて折の蓋に戴せ。かの乙女に  
 贈りたるに。母人まづ禮を言ひ。子は嬉しげに押し戴きしが。是よ  
 り親しくなりて。我方を向きては笑ひ。時々物言ひかくれば。うな  
 づきなどす。

馬場にて。鮎鮎飯々々と賣りに來れば。いざ辨當にと買ひたるに。  
 結び固めて。携へ行くやうにして有り。打ち開きて。竹の皮の小口  
 よりのぞくに。糟漬の瓜とでもいふ様のしたれば。如何にせましと。  
 たゆたひ居たるに。それは即席に召し上る物にては無し。まづ其糟  
 を洗ひ落し。刺身のやうに薄く切りて。あつき湯を掛け。焼鹽少し  
 入れて吸物にするが。酒の肴には一番よしと。見て居たる一人が教

へくれたり。

京都に入りては。鴨川の流れ。東寺の塔。いつ見てもなつかしく。  
 生駒山やう／＼近くなりて。かの子は母人と共に。あいさつして下  
 車しぬ。

早くも梅田には着きたれど。静岡以東まだ不通なりといへば。いつ  
 箱根を越さるゝ事やら。(四十年九月)

○其日其日

嚴島——廣島——岡山——吉備津宮——生駒山——江口

一 嚴島詣

三十年前に詣でたるまゝの嚴島。此ついでにとて。廣島に遊びしを幸に。己<sup>こひ</sup>斐發の朝汽車に乗る。

打ちつれて共に遊びし古への學びの友を己斐の松原

嚴島驛より下車して。汽船に乗れば。やうく近づき來る海上の大鳥居。廻廊も金燈籠も。昔のまゝなりき。

嚴島いつかは又と思ひしにうつなりけり打つ波の聲

始めて渡りし時は。和船にて明方着きたるに。鹿まづ一つ汀に立ち居て。春の眠を覺ましつるが。今日は一つも見えず。

上陸して。宿屋多き町に行く。清め風呂などいふ看板。まづ目に着きぬ。江島めきたる土産物屋。道の左右にあり。

汗をふきく千疊閣。俗にいふ千疊敷に登る。龜居山といふ岡にあ

り。豊太閤朝鮮征伐の凱旋紀念として。奉納せし經堂なれば。桁行二十間といふ。壯快なる大建築。その中央に太閤の神靈を祭れり。來る人もく。杓子を手向けては願掛をする習として。小さきは匙の如きより。大きなは六七尺の異常なるに至るまで。柱に打ち鴨居に捧げて。何千萬といふ事を知らず。一たび捧げたるものはおろす事なし。試に記したる願の筋を。讀みつゝ見れば。さすがは受け給ふ神が神とて。「家内安全」「國家豊穰」を始とし。「敵國降伏」「戰捷を祈る」「凱旋紀念」などのこそ多けれ。中にも目に着きて高く仰がれたるは。「奉祈武運長久 會禰荒助。」「經濟界ノ發展ヲ祈ル 澁澤榮一。」の二つなりき。昔は飼ひてありたる猿。今日は見えず。

わが文字にさせんと言ひし韓國の神の心に叶ふ御代かな

こゝより見渡す海。波靜かに打ちよせて。南の方には五重の塔。雲透に聳えたり。

滿身汗になりたれば。身を清めてこそと。參詣は晝後にして。紅葉谷の紅葉屋に行く。

谷に臨める奥の一間を占めて。欄干に依るに。水は山より滔々と流れ來て。窺に受けられ。瀧となりて落つる下には。着物脱ぎ捨て、あびをる人あり。日のめも漏らぬ杉の下道。一つ行く鹿追ひ掛けて。其子にや又一つ行く。

夕方まで休みて。宮廻りせんとして行けば。百八間といふ廻廊。海の上にめぐりて。前には樂舞臺あり。傍らには能舞臺を控へて。神慮涼しげに立ち居る廣前。平相國の昔までも。思ひ浮べらるゝ處なり。

波の上に立てる鳥居の二柱二たび來ぬる契をぞ思ふ  
拜殿の傍らに。神樂舞ふ神子乙女の。白き禪ちんに緋の袴して涼み居るなど。晝に似たる中を。潮來れば浮くといふ細殿の。板踏み鳴らしつゝ。こゝにかしこに。行きては歸る。

夕月夜さしくる汐に板よりも神の心や先づ浮ぶらん

など思へども。今宵暗なるこそ口をしけれ。

御社出で。海づたひに。大元神社に行く。こゝも公園にて。山の谷間になりたる處。松青く宮神さびて。細き水の流れもあり。

白雲洞とて。西洋人を引く旅館には。安樂椅子に本讀み居る客。ステッキ提げて出で入りする客。獨乙、英吉利、亞米利加、露西亞。その繁昌いふべからず。花の名所に數へられたれば。春ならばとぞ

思はるゝ。

神松に花の木綿四手掛けて見ん舟うちよせよ春の浦波

歸らんとして棧橋に至れば。日は暮れて。御社の方ともし火林の如し。今夜は奉納者ありて。百八の御あかし。皆つきたりといふ。嬉しき時にも來りあひたるかな。

細殿は皆ともし火になりはて、涼しく暮るゝいつくしま山

舟の着くまで眺めやられたる名残の惜しさ。又こん春もなど。思ひつゝゆく程に。己妻に着きたり。

大石餅を賣る店あれば。求め歸りて。書生時代の歴史語りし。三十年前の風味を繰返す。價は當時二厘なりしが。五厘になりぬ。今少し形も太く。餡も甘かりしにと。つぶやけば。そは先生の御口が變

はりたる故ならんと。宿りし家の妻君は笑ふ。

## 二 三篠の流れ 上

昔戀しき廣島の町を散歩せんとて。日も入らんとする頃。元安橋の通より折れて。慈仙寺の鼻に出づ。昔は家もなき廣場にて。夏の夜は涼みに集まり。常に興行物などありて。相撲見に來りし事も覺ゆるに。今は家ならぬ方もなし。橋もゝとは無かりしが。明治十一年の頃に懸かりしかば。鼻に抜くる橋なりとて。誰いふとなく。辛から子橋しはしと字せられしは。記憶する人ありやなしや。

元安橋の上より川下を見れば。水に臨みて立て渡したる。旅館の數。目に親しきは。一つもあらず。昔は木原屋提灯屋などいふが有

りて。木原は己が始めて着きたる夜に。泊りたる事もあり。提灯は友人の下宿しゐたるため。しばし行きたる處なりしに。今は何こに移りけん。

左なる岸には。辻村梅坪君の家。右には町野良雄先生の家の有りしこそ。思ひ出でらるれ。小舟を水に浮べながら。岸に向ひて先生と呼べば。海棠の花ある窓より顔を出だして。おいと答へられし聲。なほ我耳にあり。

渡りて通を東に行けば。左の方には。清新堂といふ唐物屋ありて。生れて始めて靴買ひたるは。こゝなりしに。それも他の店になりぬ。伴蒿蹊翁の閑田文章を。寫本にて求めし本屋も。こゝらよと思へども。影だにあらず。

大手町一丁目には。英語てふもの始めて學びつる。外國語學校ありしに。今は警察署になりぬ。向なる田中屋。隣なる栗田屋。いづれも書生の下宿所なりしに。さる店は無くして。立派なる町にかはりぬ。猿樂町へ折るゝ角なる牛肉屋。角壽亭の名さへ忘れぬに。あるじも家も。浦島物語中の故郷と消えぬ。

蓮の夕風うちかゝる堀を渡りて。練兵場に至る。戦役の記念碑など立ちて。面目を改めたるに。土手の木陰のみは。昔のまゝなり。あはれ三篠川みさのがはの流れ。肱山の嵐。我顔を覚え居るやと。問はんとすれば。兀げて虎に似たりし肱山も。今は肥えて緑の衣に包まる。

三 三篠の流れ 下



なほなつかしさ止めがたく。又の日も又そゝろありきす。  
 白神しらかみの社は。戒善寺町なる寄宿舍より。かの一丁目の學校に通ふ道にて。毎日二度は通りし處なれば。ことになつかしくて。立ち入りて拜す。鳥居も松も昔なるに。戦捷紀念の奉納など。嬉しき物は。いと殖えたり。

知るや神森の白ゆふ三十とせのむかし掛けたる人の願を

戒善寺の門より見入れたる本堂。かはりたる面影も無きに。此寺に大きなる涅槃像ありて。二月十五日には。廣庭に帆柱の如き柱を立て。雲天井に引き上げて。老若男女に拜ませたる事も記憶す。のぞき眼鏡を見たりしに。かはいやお七が身の上は。明日まで置けない夏の牡丹餅。といふ歌を聞きしかば。レトリックの試験には。此例

をこそと。思ひし事も夢にこそ似たれ。

此本堂にては。よく書畫會などありたるが。一日謠の會の開かれたるが。床しくて。障子の外より。ほのかに立聞たちきせし時もありき。おのれまだ謠ふ事は知らざりしかど。羽衣や鉢木の文句は。母上より聞きてぞ。諳んじ居たりし。

正清院は。寄宿舍となりゐたりしかば。殊に故郷の心地す。裏門の前に。小左古こさこといふ店ありて。菓子くだ物を賣りゐたるが。かみさん善く書生の世話をして。洗濯などして呉れしかば。日々に行きては。炬燵にあたりなどしたり。其夫婦は。最早世になき齡ならんと思へど。おのれよりも年下なる息子ありしが。如何にしつらんなど思ふ程に。竹屋橋來りぬ。

これより肱山までもと思ひしが。暑き日となりしかば。近くの富島暢夫君を訪ふ。かの正清院時代の學友は。今この地にて只君あるのみ。

君も謠ふ人となりぬ。我も謠ふ人となりぬ。思へば衣笥に到る時代の事。一夢茫たり。令嬢すでに芳紀に近く。よく立ちて仕舞を舞ふ。

#### 四 後樂園

岡山に着きては。まづ後樂園に遊ぶ。

朝日川に懸かれる鶴見橋を渡れば。質素なる黒の冠木門あり。鶴鳴館といふ大廣間には。巡查の有功賞授興式とか有るとて。白衣帯劍の人々滿ちくたるが。此あたりより。園内一目に見えて。池水は

ゆたかに湛へ。島も山も亭も草木も。皆影を浸せる様。いと面白きに。鶴はこゝかしこに居て。鳴く聲雲井に響く。

遙に見れば。東には三權山みさなやまけしやま芥子山やまなど並びて。我園内の物となり。霞みながらも山の半腹に。五重の塔の眺めらるゝなど。あかぬ處なし。ましてや南の方には。城の天守の。朝日川を隔て、向はるゝ景色。畫にも如何でと思はる。

池を一めぐりして。或は梅林を過ぎ。櫻林を過ぎ。菖蒲島を過ぎ。山に登り。庵に入り。假橋を渡りなどして。如意輪の額ある堂の。仁王門前に來れば。茶屋ありて。畫葉書繪圖などを賣る。

それも買ひがてら。水邊に近く置きたる床几に休めば。桃色の團子を添へて。茶を持てく。岸の白萩の垂れたる陰には。緋鯉時々姿を

見せ。水のかなたには。島の茶屋に續きて。さし出でたる釣殿あり。棟には備前焼の庭鳥。友待ち顔に翼を休らふ。鶴こゝにも二つ居て。馴れくしければ。串なる團子を抜きて與へしに。啄みて残さず。

雲の上を慕ふか池に住む鶴のこゑ塵の世の外に聞えて

雪晴るゝあしたや如何に庭松の梢につゞく山のながめの

雪には限らず。花もよし紅葉もよしと。茶屋の女は言少なに説く。

### 五 吉備津の宮

公園より歸りて。外に行くべき處はと問へば。吉備津さんは如何といふ。時間表を見れば。一時十分といふがあり。之にてとて停車場

に急ぐ。

岡山よりは山陽線の外に。津山行と漕井行との二つあり。甲を中國鐵道といひ。乙を吉備鐵道といふ。今行くは乙の方にて。三門、一宮すぐれば。はや吉備津なり。國も備中となりぬ。

下車すれば車夫三人居り。一人雇ひて。並松の中道。長々と入りて。高き石段を登れば。御社なり。樓門の奥深く。吉備津彦命は祭られ給ふ。廣前いと静にて。青と白との幣のみ。風にも靡かで立てり。社務所の方には。神官一人。お札を書くにや。机に依りて振り向きもせず。

松屋文集の作者なる高尚翁の。奉仕せし御社なれば。知らまほしき事も多きに。歸るさ急げば。今日は得問はず。かの文集にある。拜

む拜むながめし櫻は。何れの木ならん。但馬守のと惜まれたる。高  
豊才子の葬られしは。何くの山ぞ。

御社の後ろより。山を下りに。二百餘間の廻廊あり。日影に疎くて  
冷かなれば。鼻唄うたひつゝ興じ行くに。我足音も。物凄き山彦に  
答ふ。

虹よりも長き細殿末見えて細谷小川おとの涼しさ

廊盡きて。少し小高き處に。吉備中山細谷川舊跡と。しるせる大石  
立てり。岸より見おろせば。屏風など重ねたる如き大岩の。苔むし  
たる間より。細き流れは絹糸のやうに。落ち來りては走りゆく。  
祈れば鳴るといふ釜のある社を拜して。蓮池のあたりなる茶店に入  
れば。婆アさん。梨を召せ。焼酎もありますとて。懇ろにもてなす。

鮓飯の漬け立てもありと言へば。山盛にして出だせるを。一皿試み  
しに。酢のきゝたるは。こゝの名物ぞと誇り顔をす。

日高く岡山に歸りて。停車場前の通にて髪刈らす。東京のより丁寧  
にて。耳の垢まで取りてくれたる代りに。時間も二倍かゝりぬ。

さて幾らぞと問へば。十二錢といふ。さても今日は。十二錢に縁あ  
る日にて。吉備津の汽車賃が十二錢。參詣の往復車賃が十二錢。今  
又此床屋までが。同じ直段なるこそ不思議なれ。

夜汽車にてと思ひしが。とめられて松田氏に一泊す。短冊かきて置土  
産としつ。

## 六 生駒の雨

生駒登山の約束ありて。一番鳥と共に網島に行けば。文港堂を始め。二三人待ち居て。今二分早かりせばといふ。一番列車の出でたる跡にて。二十五分すれば次のも有るなり。

電燈消えて發車す。皆さむし／＼と言ひて。窓の戸をしむ。生駒山ほのかに見やられたり。文港堂ウイスキーを勧め。手籠の中より。焼蒲鉾など取り出だす。

住道の茶屋は。今起きたる處とて。蚊屋など其まゝなり。誰も朝飯前なれば。菓子麵包羊羹など。思ひ／＼につまむ。此麵包は餡がぼろ／＼になりて。太閤時代なりと笑へば。いやそれよりも古く。土地がらとて楠公時代なるべしと。戯むるゝもあり。

こゝより麓まで二十町。車のとまりし村を。中垣内なかがいとといふ。茶屋あ

り。こゝもいま夜が明けたるにて。娘など細帯のまゝにて。お早うといふ。

是より山路なれば。草鞋にはきかへ。一本五厘の竹の杖を。突き鳴らしゆく。わが杖は上も下も節抜けたれば。突く毎にぼこん／＼と音して。鼓に似たり。

つく杖の鼓に拍子とらせつゝ歌ひや行かん長き山路を

やゝ登りたる處に。眺めよき茶屋あり。ビールなど飲む。おのれ今朝は扇を忘れたりとて。日中に困るべしと。心配したりしが。今は忘れし事さへ忘れたる。風の涼しさ。庭には鶏頭の見事なるが咲きたるなど。彼岸の心地もせられぬ。

之を始とし。茶屋は道々多く。お多福茶屋、恵比須茶屋などいふ目

出度きもあり。鬼灯の赤きが並べてあるは。子供への土産なるべく。女人堂の設さへありて。奥までは行かぬ掟なりといへど。束髪、丸髻、唐人髻など。女の参詣にも屢ば逢ひぬ。

寺よりは六町手前なりといふ處に。福茶屋といふあり。目ざしたる處なれば。草鞋脱ぎ捨て。谷に臨みたる座敷に上る。右の方には般若の瀧見え。向には寺にゆく道を。松の木の間に眺め渡し。左の方は谷遠く開けて。雲か霞の内に。木津川白く。奈良の方まで見ゆ。あれよといふに心を附くれば。大佛の屋根も黒く。興福寺の塔さへ。それぞと探らるゝやうなり。

秋の雨の古き都もほのへえて霞むあたりや春日大佛

はら／＼と降り出でたれば。まづ瀧のもとへと急ぐ。瀧は山水を石

の笥に受け。あびらるゝやうに作られたるが。二筋落ち居て。今一筋は。おのづから石を傳ひて滴り来る。却りて興あり。石像の不動尊。二童子を従へて立ち給へるが。中央なる水は。さかんに矜迦羅こんがらのつむりを打ちて。狭霧を四方に散らす。

息はんと思ひしものを生駒山瀧のしぶきの寒くもある哉

歸れば茶屋のあるじ。朝の御飯をと。笑ひつゝ言ふ。時はまだ九時。げにも遅き人は。今起くる頃なるべし。茄子の味噌汁に。高野豆腐の煮物。漬物は瓜の奈良漬なれば。澤庵など無きにやと言へば。此山中にては。神の嫌ひ給ふとて。大根を一切たべぬと言へり。

瀧ならぬ方こそ無けれ生駒山駒のいぶきや雲と渦まく

一時は烈しかりし雨垂も。やう／＼止みたれば。残りたる六町をた

どる。女郎花丈高くして。小松原の上に抜け出でたり。

吹きこぼす風うらみあり立てながら手向けんと思ふ花の白露

斜なる石段高く登りて。大聖歡喜天に詣づ。寺號は寶山寺。山門より始めて。本堂、不動堂、客殿、繪馬堂。すべて立派なり。

雨又大降となりたれば。茶屋のあるじ。傘もて追ひ掛け來り。案内す。あれ見よと言はれて。山高く見上ぐれば。一枚岩の耶馬溪めきたるが有りて。常磐木林に裾を包ませたるこそ。神々しけれ。般若の窟と寺の地を名づくるも。此岩の故とか。

木のもともぬれぬ陰なく漏る雨に佛の岩屋けふは頼まん

こちへと言はるゝ方に行けば。硝子の扉きら／＼しき。西洋造りの建物こそあれ。内には應接所らしく。テーブルと椅子とを据ゑる。二

階に登れば。上段の床の間には。有栖川故宮の御筆を懸け。次の間に蓐敷きてあれば。こゝに坐しゐたるに。袈裟掛けたる法師出で來て。茶をすゝめ。菓子をすゝむ。

是は誰に對しての御馳走にやと。いぶかしながら。茶碗取り上ぐるに。おかまひ無くは。寺に御一宿をなど言ふ。文港堂は深き此寺の信徒にて。寄附奉納なども多しと聞けば。そのための優待ならんと。僅に心おちゐたりしに。全く我名を通せしよりの事と知れしこそ。面目なけれ。身幅の合はぬ貸浴衣の出で立ち。いかに可笑しと法師は見つらん。

雨晴るべくも見えざれば。茶屋に一泊する事と定め。盃の數重ねる程に。誰か枕をさせつらん。目を明けて見れば。ランプきら／＼と

燈りて。瀧の音いと近し。

道を隔て、座敷あり。其方賑はしければ。耳を立つるに。將棊の勝敗を論ずるやうなり。客いつの間にか。七人連なるが来て居るといふ。

山風身にしみて夜も更けぬ。憎かりし物やう／＼に散りて。金米糖の如き光は。谷あひの空を満たしぬ。

旅人の袂に寒き雨ならで降るこそ星は嬉しかりけれ

### 七 信貴山詣

さて今日は。何くへ下らんかとの評議起る。もとの道を歸りて。瓢箪山へや詣づべき。野崎の観音にや詣づべき。又は向に越えて。奈

良にや遊ばん。法隆寺にや行かんなど言ふ内に。王子より汽車を下りて。信貴山に詣でんは如何にとの。一案出でぬ。そは嬉し。多年心掛けては居れど。かの山はまだ知らねばとて。立ちたるは十時過なりき。

こゝより奈良までは三里半。郡山は二里半なれば。二里半の方にこそと。近道を教へられて。茶屋の浴衣のいと軽くて。着工合よきを借りて行かばやと言へば。やすき御事。大阪までも東京までも。召させ給へと。あるじ氣輕に言ふ。

花に遊ぶ胡蝶の羽袖かるやかに千里の道や行き歸らまし

縫うてまだ誰にも着せぬといふ。蝶盡の白地木綿。合はぬ身幅をやう／＼合はせて。手には彼竹杖まだ放さず。



十町あまりも行かば。車あるべしと聞きしに。一つも見えず。奈良と郡山との分れ道なる。茶屋にて聞けば。今日は検査にて皆参りましたといふ。さて其検査は。何くにてと問へば。砂茶屋にてなり。もう歸る頃なるべしとて。道に出で首を伸ばしてかなたを見やる。運悪しき日にも來ぬるかなと。語り合ひつゝ。砂茶屋にも着きぬ。げにも警察署の前に車夫集まりて。叱るが如く諭すが如き説法を。聽聞し居る最中なりき。

くすぶりたる茶屋に腰掛けて。車の事を頼めば。今に濟むから待てといふ。暫くして濟みはしたれど。空腹なればとて。行かんといふ車夫なし。郡山までは。なほ一里あまりの道を。雨ぼつくと落ち來りぬ。

王子に着けば三時半。日もよくなりたれば。勇氣又出で。今一月も立たば。松茸の出づるといふ赤土山の松林。左右に見つゝ登る。秋の色美しく。顧みらるゝ大和國原。耳梨は隠れたれど。畝傍うねびは紛ふべくもあらず。

参詣者休まする茶屋は。生駒の如く處々にあり。晝飯まだなれば。何か少し物せばやとて。若き女の糸車引きつゝ。客待ちゐたる店に上る。

酒は色こくして。紀州蜜柑の熟したるよりも黄なるに。ウイスキーを少し交せては。飲む程に酔ひぬ。高野豆腐を心しんにしたる。海苔卷の鮓飯は。小井に山なしたりしが。早くも崩れぬ。玉子はと問へば。ゆでたるが二つありとて。持ちきたる。

此山の名物は油揚なりと。文港堂の言へば。それこそ大の好物。いざ試みるといふに。女早くも心得て。七りん鍋掛けたるを。捧げ出だせり。蓋取りて見れば。生揚の大切なるが。煙立てつゝ。今ぞ煮え始むる處なりける。

誰しも箸取る人なきに。おのれ一人舌鼓打てば。遂にはさすがの名物よと皆々雷同して褒む。腹なるかな。腹なるかな。都にては。さほど賞翫せらるゝ風味にても無きを。

赤門を入れば。山上高く見あげらるゝ堂塔伽藍。さながら空中樓閣の。俄に築き出だされたるが如く。火々出見尊ほ、てみのみことの。桂の井より眺め入れ給ひけん。鱗うろこづの如き宮殿も。かくやと思はるゝばかり。雲に聳え虹と輝けり。

宿坊は成福院、玉藏院とて山腹に地を占め。それより右に續きて。護摩堂、寶藏、鎮守の森。更に登りたる處には。二重の塔ありて。緑も深き松の林に。圍まれて立てり。本堂はと問へば。繪馬堂と共にあの寶藏の右なるが。森に隠れて見えすといふ。

高き石段多く登りて。楠公の傳にて親しくなりたる。毘沙門天を拜す。鰐口の綱の大きなるに驚き。試に両手を合はして見たれば。一抱ありき。

文港堂は信心者にて。蠟を捧げ。飯を供ふ。赤き折敷にて供へ並べたるが。既に數百の多きに及びぬ。

清水の舞臺に似たる處に。立ち出づれば。夕風涼しく袂を吹きて。山の開けたる間より。三輪山はるかに見ゆ。

歸るさは開山堂の前を過ぎて。聖徳太子記念碑を見る。馬上に笛を吹き給ふ御像。やうく暗くなる空に。光を放てり。湊町に下車して十時を聞きぬ。飯よりも酒よりも。早く歸りて寝たしと。誰もく言ふ。

### 八 江口の寺

江口の古跡が見たしと語れば。井上君しるべせんと言ふ。かくて泉君と共に君を茨城に訪ひたたるは。九月はじめの四日。今日は時刻も遅ければ。一泊して明日にせずやと。妻君諸共とめらるれど。歸京を急ぐからとて。強ひて頼みて。吹田すゐだまで同行す。

こゝには武富春二君といふあり。手紙して言ひ遣し置きたれば。ま

づ訪はんとて。泉殿神社の鳥居前にて。富春花園としるしたる。枝折戸を敲く。

あるじは田園趣味の鼓吹家にて。淀川といふ雑誌出だし居らるゝと聞きしが。室内は書籍古器もて。満たされたり。

あるじの井上君に語るを聞けば。江口の寺には。耳しひの尼ありて。頑固なる事おびたしく。誰が行きても。木像を見るを許さぬのみか。皆叱りては逐ひ歸す。始末にならぬ女なり。されば先年も行きて失敗しつ。今日は近村にて勢力ある。大西氏を頼み。尼に説得さすべしと。

打ちつれ町を離れて。通農橋といふを渡る。橋錢を取るに。羽織着たるは五厘。着ざるは只なりといふが。可笑しければ。何故ぞと問

ふに。着たるは旅人。着ざるは地の人といふ意味なればと。武富君語る。

ゆき／＼て神崎川の堤に出づ。秋の水ゆたかに湛へて。右には高濱橋見え。左には遠く神崎橋を望む。橋のかなたに森の見ゆるこそ。江口の里よと。指さし示さる。撫子美しく咲きたる草原。道いと長し。

江口の里は。此神崎川と淀川との。分るゝ三角の洲先にありて。古は遊君もて聞えたる繁華の地。今は跡とふ人も無き寒村ながら。嚴島神社など見えて。あしき處にもあらず。

村を横ざりて。淀川堤に登らんとする處に。寺あり。法華宗にて。法林山寂光寺といひ。江口の君を祭りたりとて。君堂きみだうとも稱ふ。大

きからねど清らかにて。鐘樓の下には。鳳仙花と鶏頭とを作り揃へたる花畠あり。西行法師と問答の歌をしるしたる。大石も立ちたり。「さては是なるが江口の君の」と。謠の文句口ずさみつゝ。井上君は入りて。草取り居たる老女に詞を掛け。東京から御客様が有るか。お木像が見たいが。見せては下さるまいかと。庵主に頼んで呉れずやと言へば。入りて其よしを言ふに。井上君も附きて行きぬ。庵主は本堂に居て。半ば姿も見ゆるを。老尼と聞きたるとは違ひ。年は四十にも足らじ。つんぼにも有らで小さき聲さへ。よく聞ゆるなり。

庵主曰く。今日は遅ければ。明日又來られよ。井上君曰く。私共は近くなれば。いつにてもよけれど。東京の御客は遙々來られたるな

れば。又とはむつかし。強ひても見せて下され。庵主曰く。是は尊い君様の御像なれば。拜ませてとこそ言はるべけれ。見せてとは尾籠なりと。つんぼと齡との話こそ違ひたれ。頑固は聞き及びたるよりも一層にて。日蓮流儀の鋒ほこさきするどく。論じ掛くる折しも。大西氏は來れり。

氏も兼ねて持てあまし居る事とて。にがみながらも入りて乞ひたる効能あらはれ。遂にこちらへと云ふ事とはなりぬ。昔は西行法師にすら。宿かさじと拒みたる。江口の君の一刻主義。今も寺守の守り居るにやと。今は笑へど。一時は餘りの權幕に。退去令を布かるゝやと。心配しつ。

尼は心や解けたりけん。鼠色の法服に。香染の袈裟を掛け。佛前の燈籠に火を移し。口に經文唱へながら。幾度も拜禮して。猶題目の聲の内に。御扉うや／＼しく打ち開く。普賢菩薩の御像を左にして。丸顔柔和の法體の姿こそ。現はれたれ。

西行自作のも有りたれど。十年ばかりも前なりしか。先住の代に。耳の聞えぬを侮り。盗人の持ち行きたるまゝ。まだ分らず。君様に問ひ奉れば。時節が來るまで待てと。仰せられたりなど語る。さてはつんぼは先代にて。強情は此現住なるべし。

尼寺の庭のけいとう花瘦せて歌塚さむし秋の夕風

かの西行の歌を彫りたる石あるに依り。歌塚の名は。停車場にも掲げられたり。

## 九 神崎川の月

棹さし歸らるゝ舟はなきかと言へば。武富君。吹田にて夕飯を參らせたし。かしこまで下らんとて。大西氏に謀れば。やがて其事も調ひ。舟人いざと言へば乗りぬ。

月は朧々と姿を見せて。昔戀しき夕暮なるに。客の皆男なるこそ物足らねなど。戯れ合ふ。

月ひとり舟遊びせし古の江口の君の面影にして

松虫の音は岸に聞えて。水の上いと静なり。井上君いと興に入りて。薄雲も今夜は心あり。艶消しの月を見するこそといふに。此形容は得難き金言よとて。泉君くりかへし褒む。

神崎橋の下を潜るに。渡る人なければ。塵も落ちず。橋板の隙間よ

り空の見ゆるなど。何事も浮世の外なり。

君は淀われは神崎ゆく水によせてや人の別れ惜みし

月やうく研きとなりて。一瓢あらばやとの。慾望おこる隙もなく。早くも上るべき岸に着きぬ。振りかへり見る江口の里。森くらくして。一つの燈火だに漏れ來ず。(四十一年九月)

## ○栗の花

## 春の月

雲雀は堇の床に

胡蝶は鈴菜の床に

天地の夢しづかなる

春の夜は今ぞ眞夜中

花見せし乙女はいづら

鳥きゝしうなるはいづら

賤が屋の窓のひまもる

ともし火もいつしか消えて

おぼろなる月こそ霞め

梨子の木の間

五月雨

千木たかく鎮まる神の

大宮と名に負ふ里は

野邊ちかく水面白く

櫻咲く春のあしたの

摘草に人もつどへば

紅葉する秋の夕べの

茸狩に我もおくれず

冬の雪それも見つれば

此夏は草葉の螢

二つ燃え三つあらはれて

川瀬みな光にならん

たそがれの景色見ましと

思ひ立つ心へだてし

五月雨の雲のつれなさ

月のなき頃にといひし

螢狩けふ望の夜と

人ぞいふなる

### 松の葉

齊藤超安ぬしは。信濃の國小縣郡。西内村の學校に從事せらるゝこと。こゝに二十八年。その及ぼされたる効果の著るかりけんは。いふまでも有らじ。今その恵みを受けたる人々に代りて。

みすゞかる信濃の國

西内のその學校に

物學ぶをのこ乙女が

年々に植うる松の木

種なくはいかでか生ひん

育てずは如何でか伸びん

松よりも尊き教

種蒔きて人を育てゝ

此里に功のこしゝ

齋藤の君こそありけれ

忘るなよ教受けつる

人の子も孫も曾孫も

松の葉の散り失せぬ功

千代につたへて

年々に植うる松の木

種なくはいかでか生ひん

育てずは如何でか伸びん

松よりも尊き教

種蒔きて人を育てゝ

此里に功のこしゝ

齋藤の君こそありけれ

忘るなよ教受けつる

人の子も孫も曾孫も

松の葉の散り失せぬ功

千代につたへて



## 靈泉寺

靈泉寺の温泉は。信濃の國小縣郡靈泉寺村にあり。

雪踏みて朝に出で

氷ふみて夕べに歸り

歸りては火桶かこみて

湯の川の流れを聞き

出でゝは冬暖かく

里人と共に湯あみす

面白の里の旅寐や

樂しの年の初湯や

秋ならば月に歌はん

神山も登りて見つ

春ならば花に遊ばん

湯の寺も音づれて來ぬ

かくながら都忘れて

一年もおくらん物を

名殘惜し車ぞ門に

待つといふなる

## 鹿教の湯

信濃の國小縣郡西内村にあり。

棹鹿の矢傷あらひて

癒えしより名高くなりし

鹿教かけの湯を今日来て見れば

春の日のぬるきが如く

暑からず寒からぬ出で湯

ゆるからず強からぬ出で湯

七日八日十日もあまば

病人もいたづき癒えん

軍人も負ひ傷癒えん

あみをへて齡のおてふ

萬代の龜屋に歸り

高殿に登りて見れば

湯の川を隔て、向ふ

古寺の杉の二もと

雪ふりて繪にこそ似たれ

窓の戸を開けば見ゆる

鹿教富士のそゝる一峰

夕日さす空にぞはゆる

此宿をぢの翁がすゝむる

盃の又めぐり来て

年々に逢はまほしきは

此宿のながめ此里の出で湯

## 此高殿

小樽の栗山氏に贈る。

夏しらぬ宿は此宿

ながめある宿は此宿

この宿の庭かと思えて

目の前に廣くたゝへし

小樽の海出で入る舟の

木の葉なす浮べるけしき

鯨なし煙はくさま

繪にやかゝん歌にやよまん

面白の海のながめや

果もなき千重の波路の

なつかしの此高どのや

吹く風は秋かあらぬか

あなたより通ひ來りて

忘られぬ宿は此やど

夏衣たもとぞ寒き

名残ある宿はこの宿

三日月の丸くなる頃

一夜來て宿らんものを

必ずといひしは昨日

世の中は難波の蘆の

世の中は難波の蘆の

さはり多くして

### 萬歳の聲

小樽の祝捷會を見て。

小樽の山ふきおろす風に

ひるがへる旗のかすく

時ならぬ木の間の花か

小樽の海よせくる波に

打ち合はす萬歳のこゑ

雲もなき雷の響か

老いたるも若きも出で

もろ共に走り躍りて

喜ぶはそも何事ぞ

遼陽の占領告げし

音づれは海打ち越えて

今日來しといふ

### 大沼小沼

一

緑の梢瑠璃の色

うす紫に霞む山

天地静けく夜は明けて

風も歌はず波いはず

## 二

碁盤の上の石のごと

並ぶあまたの島の數

大きは寺の鐘に似て

ちさきは琴の爪に似て

## 三

崩るゝ巖ぬひとめて

立てる槐えんすの葉かげには

浮世に夏のあるぞとも

知らぬ子鳴の三つ五つ

## 四

檜の若葉に枝かはす

花の姉島いもと島

かはる姿もさまざまの

景色見てゆく舟の上

## 五

歌ふ唱歌に雲晴れて

笑顔あらはす渡島なしま富士ふじ

美人を水の一方に

仰ぐ心の晴れやかさ

## 六

わが楽しみは早足れり

説くは紅葉も明月も

大沼小沼の風景は

平和に眠りの覺めし時

よしきり

一

蛙の聲におくられて

夕ぐれひとり歸りくる

若葉すゞしき蘆間道

二

又鳴きかはすよしきりは

人の袂を引きがほに

ゆくての右より左より

三

かなたの山は雲晴れて

あすの日和に望あり

今宵の月も出でぬべし

四

名残は野邊に残れども

聲聞き捨てゝいざいなん

ともし火ほそき木がくれに

## 母より愛子に

一

今日立ちかへる年の始

待ちえて結ぶ若水に

御代を祝ひ家を祝ひ

御身千代ちんみにと言ほぎ侍る

二

御身手づから去年の今日は

持ち出て祝ひ祝はれし

屠蘇の銚子熨斗の雄蝶

今年は淋し三人になりて

三

次郎もけさは早く起きて

學校さして出で行きぬ

君が代はと歌ひながら

もう歸りくる頃にやあらん

四

おん身がいつか繼木したる

南の庭の蜜柑の實

すもゝ程の大きさにて

喜び給へ三つ四つなりぬ

五

此實を見ても時にあひて

成るべき業は知らるゝものを

嬉し樂し年と共に

花咲き添ふべき御身の春べ

## 六

去年はもろとも居たる御身

今日は別れし千里の空

もはや言はじ思ひなせそ

希望をゆくての便りにて

## 七

こゝには雪もまだ降らねど

慈愛してよ弱き御身

旅は寒さや身にしまん

書初がてらめでたくかしく

## 新年の川

立ちかへる年の若水

結ばんとおりたつ川の

さゝら波歌ふを聞けば

奥山の苔の雫も

ふたりふえ三たり集まり

打ちつれて旅行くまにま



かくばかり力大きく

ともすれば岩きるばかり

育ちたる其行末は

海に出で、荒波たて、

千里ゆく船も浮べん

雲のゐる空も洗はん

君が代は明け行く空の

朝日かげ光も添ひて

勝いくさ祝ふ聲々

里に満ち山に響くを

いたづらに過さん物か

世にひびく水の雷

走らすも我等が胸ぞ

海にみつる敵の艦隊

沈めしも我等が胸ぞ

草も木も我大君の

皇國に命さゝげて

仕ふべきつとめは多し

ある時は車を廻はし

ある時は電氣となりて

世を益し國を利せんと

さゝやきて語りぞ過ぎし

我もはげまん

夏の風

一

五月雨晴れて我あそぶ

天地ひろくなりけり

たゝへし水に影うつる

小田の早苗も涼しげに

二

片山里の竹垣に

とまる胡蝶のひらめかす

羽根かと思えて咲きそむる

胡瓜の花も二つ三つ

三

問へど答へずふりこぼす

涙の色も清らけき

百合の乙女はわが旅路

人より先に迎へたり

四

軒端の忍ぶなつかしみ

立ち寄る窓の風鈴は

はや音立てゝわが歌ふ

唱歌に拍子合はすなり

## 五

湊を見れば我友の

白帆ほさるる船もなし

波しづかなる海原に

いざ沖とほく遊び見ん

## 六

きのふは霧に掩はれし

島かげ見えて松青く

旅の心も勇みあり

來れ鷗よ諸共に

## わかれ

## 一

別れゆく人といまる人

村の土橋どほしのかなたこなた

青田の風すゞしげに

見かへる人の袂を吹く

## 二

口ずさむ歌さゝやく水

村の土橋の上と下に

夕日のかげ淋しげに

垂れたる岸の柳を染む

## 初日影

一

我は今年の初日影

雲の衣をぬぎすてゝ

み空に立てば世の中は

いつしか早も春めきぬ

松竹立てし門邊には

羽子つく音も楽しげに

二

あはれ昨日は西東

足を空にてゆきかひし

その市人は何方ぞ

物賣るさわぎ何方ぞ

ゑ顔をあげて我影に

むかふ人のみ里毎に

三

されど昨日の夕暮に

傾くかげを廣げつゝ

老の庵を訪ひし時

誰か喜び迎ふべき

短き日やと爐のそばに

つぶやく聲は響きたり

## 四

あはれ過ぎつる夏の日

露もつ百合を色どりて

乙女の顔に照りかへす

光見せしも我ぞかし

歌聲たゝぬ谷水を

離れぬ我身の鏡にて

## 五

あはれ過ぎつる秋の日

おつる木の葉を照らしつゝ

疲れしをぢを家路まで

送りし影も我ぞかし

友なき野邊の夕ぐれに

松ふく風とたゞ二人

## 六

言ふな思ふな老人よ

夕日を失意の光とは

言ふな思ふな少年よ

朝日を希望の光とは

昨日の冬は今日の春

夕日は朝日の過去ぞかし

## 七

見舞ひめぐりて新年の

日も夕暮になりにつけり

喜び迎へ拜みつる

今朝の人々今いづこ

早さしこめし窓の外とに

残さるゝもの我ひとり

いちご

一

脊には草籠腰に鎌

片手に谷の遅櫻

一枝もちて歸りくる

翁は今しも籠まで

二

急がぬ村の入相も

近く聞えて暮れそむる

一筋小道まがひなく

見つけて喜ぶ孫一人

三

翁は花を手に渡し

お墓に之を上げて來よ

褒美はこれぞと籠の中

さぐりて取り出す草いちご

汽車道

一

見あぐる山の峰高く

二もと三もと松青し

忘れぬ姿見あかぬ景色

思へばこゝよ櫻を見しも

若葉を見しも

二

薄紅に黄に権に

半ば染まりて美しき

梢の匂ひ時雨のなさけ

今日だに留まれ車の歩み

時計のすゝみ

おぼろ夜

一

人は寝たり浦の苫屋

ともせる火の影も見えず

月はおぼろ小夜は半ば

さゝやくは波ばかり

二

閨の内の夢はいつこ

荒き波ときそひ進む

船の上に網の中に

されど夜はたゞ静

## 三

沖に遠く飛びし鷗

磯に近く寄りし鰯

なれも今は恐れ失せて

神の手に眠るらん

## 四

磯に藻屑かきし乙女

軒に網を干し、翁

なれも今は疲れ知らで

花の春夢むらん

## 五

鋭どからぬ星の光

こゝに二つかしこに三つ

またゝく影遠く近く

波に浮き又消さる

## 濱なす

青森などの河邊によく見る小さき木にて。とげあり夏の頃紅のか



一 はゆき花咲く。

濱邊の道の左右

濱なすさけり愛らしく

赤きはべにの色に似て

白きは雪の色に似て

二

才子の詩にも歌はれず

美人の畫にも寫されぬ

花のあはれを慰めて

吹く風さむき夕まぐれ

三

藻屑あつめて歸りくる

おとっひ二人の海士乙女

花のあたりに足とめて

手ん手に一花摘み取りぬ

四

白きは姉の黒髪に

赤きは妹の黒髪に

さゝれて波を打たするは

身の樂しさや歌ふらん

五

二人は跡を見かへりて

名残を濱に残し行く

残りし花は見おくりて

告ぐるか別れをさらばよと

除 隊

一

何がし君の凱旋を

祝ふと書きし旗數旒

吹きひるがへす北風も

けさは袂に寒からず

二

萬歳聲裡に迎へられ

汽車を出でくる除隊兵

荷なふ名譽にくらべては

肩なる行李や軽からん

三

鐵條網を躍り起え

敵一突きに斃したる

わが軍雄々しと歌ひつゝ

立てる一人の乙女あり

四

やがて摘みとる道の邊の

まだ早咲の花莖

乙女語らず花いはす

早くも勇士の胸の邊に

讀經

一

杉の木の間を漏る月の

影ものさびし片山寺

柴の戸を敲けども

答ふる聲は嵐のこゑ

笥のおと

二

月をしるべに見入るれば

一むら薄波打つ影

猶去りかねてたゝずめば

幽にひやく讀經のこゑ

木魚のおと

春さびし

一

池の山吹花散りて

日比谷公園春さびし  
打ち連れて遊びつる

去年の我子今は如何に

花ものいはず蝶も追はず

病に臥して閨にあり

二

思ひ出づればこゝなりき

かざしのリボン落しゝは

夢なりきゝ

去年の我子春の遊び

此池に父と子の

影をうつすは又いつか

印旛の沼

一

霞む夕日かけ落ちて

春はさびし印旛の沼

歌ひつれて歸りくる

人は二人船は一つ

二

きのふこゝを打ち過ぎて

沼のけしき歌ひし友

影は水に浮べども

春は聲をくりかへさず

我子さゞれ

一

夢か夢にあらず

うつゝか現にあらず

昨日まで語りし言葉

今朝までも歌ひし唱歌

耳に猶聞ゆるものを

あな悲し我子さゞれは

今は亡き人

二

寝てか寝てにあらず

さめてか覺めてにあらず

海老茶色の學校包

抱へ持ち出で行きし姿

目には猶ほのめく物を

如何にせん我子さゞれは

今は亡き人

三

花か花にあらず

紅葉か紅葉にあらず

卒業の證書手にして

勇みつゝ歸りし面わ

拂へども我前去らず

あな悲し我子さゝれは

今は亡き人

四

月か月にあらず

露か露にあらず

壁に立つ小琴を見れば

夜な／＼に引きし面影

ありと見て手には取られず

如何にせん我子さゝれは

今は亡き人

葛の花

眞葛原花ぞひもとく

鎌もちて乙女ぞ立てる

花ならば刈らんとやする

花のみは残さんとや思ふ

おのが身を花とも知らで

花と咲く眞葛うつくし

おのが身を花とも知らず

花と匂ふ乙女なつかし

山路行く汽車の窓より

見る人のありとは知るや

花に似たる乙女乙女に

似たる葛の花

## 嵐

天怒り風怒り波又怒る

怒る波何の心ぞ

荒鰐は大口あけて

島山を呑まんとときほふ

大鯨汐吹き立てゝ

天地をあばれぞまはる

昨日まで涼しとめでし

松の風磯の満汐

何を恨み何をか怒る

わたつみの龍の乙女の

捧げたる玉かと思えて

夕波に昇りし月の

影は何くぞ

## 圓山

能登の國和倉にあり。

一

朝起き今日も心地よく

あくがれのぼる圓山の

小松にまじる初尾花

はや打ち馴れて招くなり

二

高みに立ちて見渡せば

波しづかなる入海は

片割月のかたちして

白帆三つ四つ浮べたり

三

左は和倉の温泉場

煙ゆたかに樓しげく

右は小口の屏風崎

うす霧晴れて岩高し

四

波のあなたに見やらるゝ

名所は猿島机島

半はんの浦人鯛釣りに

出でゆく船も數ふべし

五



あれ見よ燃ゆる火の光

空にと童の指さすは

日の出嬉しき海の上

鷗や夢を覺ますらん

## 六

幸さいある朝は來りたり

里に歸りて湯あみせん

湯あみて窓の秋風に

吹かれて好む書ふみよまん

## 瀧の響

神怒れば山また怒り

神笑へば木々も笑ひて

落しくる疾風雷雨

捲きたき來る千軍萬馬

心地よの水の流れや

勇ましの瀧の響や

いざ聞かん夜すがら君の

歌ふ歌きかん

## 山中温泉

加賀にあり。

山中やまなかはげによき處

一

出づる湯は病を癒やし

行く水は心を洗ひ

五日居てあめども足らず

七日寝て遊べども飽かず

いざ來ませ大聖寺川の

ながれのぼりて

二

東山草の朝露

踏み分けてわが攀ちくれば

晴れそむる霧のひまより

晝の如く湯の里見えて

醫王寺の鐘こそ響け

いざ來ませ麓の川は

鮎のよき處

三

雪よりも白き川水

走りては岩切り通し

淀みては淵をたへて

そり立つ千尋の岩は

雲の上に見る目危ふし

いざ來ませ蟋蟀橋は

景色よき處

## 四

夕立の空にかゝれる

虹の橋行く心地して

欄干に寄りつゝ見れば

肝さむき千尋の下に

行く魚の數さへ見えて

澄み渡る水の清けさ

谷のしづけさ

## 五

山中は此川ありて

春秋に人こそつどへ

此川は山中ありて

朝夕に人こそ遊べ

水清し出で湯かぐはし

いざ來ませ病癒やしに

心あらひに

人のなさけ

東山松吹く風の

音に聞く山中の湯を

はる／＼に訪ひ来て見れば

如何にせん浴む人満ちて

宿すべき方なしといふ

家毎に乞ひあるけども

軒毎に頼み行けども

花に吹く夕山おろし

誰も皆つれなくいへば

川上の世に聞えたる

景色だに見て歸らんと

片かけし岸のおばしま

我物と占めつゝ寄れば

乙女子は酒煖ためて

老びとは鮎をあぶりて

旅人の心なぐさむ

盃を手に取り上げて

見上ぐれば千引の巖

久方の雲井に聳え

見おろせば玉散る流れ

八千尋の底をぞ走る

いつしかと人の恨も

忘れつゝ歌へば合はず

山水の聲こそ友よ

いざ一夜假の宿りを

借さずやといへば嫗も

天地に入れられぬ身を

あはれとや殖生の宿の

いぶせきを厭ひまさすは

木枕は一つ侍りと

心よくうべなひくれつ

行きくれて野にも山にも

笹筵敷きてや寝んと

一度は思ひしものを

忘れめや秋鳴く虫の

蟋蟀の淵より深く

山中の湯よりもあつき

人のなさけは

### 蔦の若葉

削り成す巖三丈

河岸に額の如く

突き出で、水をぞ覗く

額より千筋八千筋

繰りおろす緑の糸に

美しき玉ぞ貫きたる

その玉は鳶の若葉

その糸は鳶の若づる

薬玉を神の作りて

御空より下げたる糸か

瓔珞を佛の垂れて

雲井よりゆらがす玉か

一筋を取りても見んと

青柳の木陰の蛙

飛びつけど丈こそ足らね

伸ばせども手こそとっかね

紅葉せん秋忍ばしき

この鳶この岩

知多の海  
一

千鳥友よぶ知多の海

隔てゝ向ふ薄墨の

三河の山に月出でゝ

寄せくる波に白金の

ふちとらせゆく洲崎の磯

面白の夕べやな

二

ながめ渡し、縣社の杜

面白のあたりやな

## 四

海潮院の鐘の聲

聞えて明くるあしたより

汽笛の波に響きつゝ

入りくる船の夕べまで

櫓の音絶えぬ衣が浦

面白の龜崎や

渦巻く水

灣の入口左右より

抱く師崎いらご崎

いすかの背と食ひちがふ

間に白帆を三つ五つ

見つゝ歌ひし高根の山

面白の景色やな

## 三

松の木の間紅の

鏡をかくる日は出でゝ

海に賑はふいさり舟

漕ぎ行く聲も勇ましく

天つ雁月に鳴けども

刈りぬべき早稲田も見えず

打ち靡く晩稲田も見えず

わが村は海とかはりて

陸奥みちのくの八百八島

目の前に立ちてぞ並ぶ

松あるは鎮守の杜か

竹あるや学校のあたり

畔づたひ昨日は訪ひし

姉の家も渦巻く水の

をち方に垣こそ残れ

畑つゞき今日に行くべき

父の墓もよせくる波の

水底に石こそ沈め

十日立てど引かぬ此水

二十日たてどかわかぬ此海

如何にせん彼岸は今日を

わが寺わが畑

### 行く君

大森復一君の入營を祝ひて。

筆とりて紙に向へば



鬼神泣き天地とゞろき

筒とりて仇に向へば

湖海わき山嶽くづる

あはれ人男兒と生れ

筆取るも無上の愉快

あはれ男兵に徴されて

筒取るも無限の榮譽

歌人の昨日の君を

つはものゝ明日の我春と

吹きおくる旗風空に

たなびきて日影まばゆく

冬ながら花も佐倉の

城さして行く君雄々し

送る人うれし

### 忘るな草

一

夏草の葉がくれに

咲きにはふ忘るな草

いんぎよも其色は

朝の露か暮の星か

二

むかし誰が摘みそめて

誰が胸に咲かせそめし

千代かけて忘るなの

心よせしこの一花

三

我も又露ながら

手に摘みて忘るな草

忘るなとおくらばや

星の如き人の胸に

歌よまん

銚子の曉鷄館に宿りて。

鶏明とりあけの浦とは聞けど

鳥の鳴く聲も聞えず

犬吠いぬほふが崎とはいへど

犬の吠ゆる聲も響かず

磯波のとゞろく外に

物もなき天地あめつちしづか

一夜寝て二夜又寝て

歌よまん我歌よまん

汐あみて暖まる時

磯に出で、波のぬれ貝

拾ひ暮らさん

## 磯菊

口なしの色うつくしく

砂の上に磯菊咲けり

家づとに一花折らん

家遠し持ちて歸らば

道にしてしをれや果てん

貝ほりに來る子もあらば

呼びとめて髪にさゝせて

宿るべき里問はましを

子も見えず母も來らず

手に持てる花の枯葉を

したひ來て太平洋の

風さむく吹く

## 雪中の松

雪曰く松をうづまん

松曰く雪に埋れじ

埋れじの松が枝白し

埋まんの雪どけ青し

勝たんとの心ますらを

負けじとの心乙女子

乙女子は女さびして

散文  
韻文  
野

菊 終

君が代の花を添へ

ますらをは男さびして

君が代の實を結ぶ

結ぶ實も花ありてこそ

咲く花も實を持ってばこそ

松青し雪白し

白き雪あはれ青き松あはれ

明治四十二年四月十二日印刷  
明治四十二年四月十五日發行

定價金四拾五錢

野 菊 奥 附  
著 者 大 和 田 建 樹

著 者 大 和 田 建 樹

發 行 者 大 橋 新 太 郎

印 刷 所 市 川 七 作

發 兌 元

東京市日本橋區本町三丁目

博 文 館

東京市小石川區久堅町八百八番地  
博 文 館 印 刷 所 印 刷  
東京市小石川區久堅町八百八番地

大和田建樹君著

散文 韻文 雪 月 花

廿一版 全一冊洋裝小判上製 紙數六百二十二頁 正價卅五錢 郵稅六錢

其文は清楚婉麗、趣味掬すべく、其歌は優雅流滑奇想天外より來りて、句々風を生じ、言々花を降らすものは大和田建樹先生の筆となす。此編收むるところ近作貳百編、蓋し落寞振はざる今日の文學界中の旗鼓たるものは此書を措きて他に又何かある

—(行發館文博)—

大和田建樹君著

散文 韻文 深山 山 櫻

七版 全一冊洋裝袖珍上製 紙數七百二頁 正價四拾錢 郵稅六錢

◎初旅寝◎初日影◎短歌十二首◎雪の降るさま◎奉公の身◎煙草◎神樂少女◎春日山◎三笠山◎宮まうて◎豊島の岡◎護國寺◎今はなし◎出入の歌◎雪の日◎何もの光ぞ◎合羽坂◎短歌四首◎出入の車夫◎卷すし◎阿波の海◎鳴戸◎三月三日◎淡路島外數百項

大和田建樹君著

散文 韻文 藻 鹽 木

全一冊洋裝袖珍上製 紙數五百九十頁 正價卅五錢 郵稅六錢

大和田建樹君著

次 目

○家の正月○田舎の正月○歌かるた○若菜○風○節分○紅梅○ごむ鞠○紫の被布○落花○朝露○躑躅○山吹○籠○夜○玉椿○瓶○なづな○八月○軒寺○夏○はじめ○衣○竹の子○神樂○あるき○端午○墓じり○雨○の心○外數十項

—(行發館文博)—



大和田建樹君著

歐米名家詩集

全三冊洋裝中判美本 紙數一冊二百頁 正價一冊 金拾貳錢 郵稅一冊 金四錢

大和田先生の文を以て鳴る世既に定評あり今又東西を兼ねたる才筆を以て此書を著ばす彼シェイクスピアの快活幽玄なるシエリクスの精巧なるスコットの雄壯悲憤なるウチナーチスの多興の精妙なる寫し來て遺す處なく燦然星の如きあり馥郁花の如きあり多趣なる才子机上の珍と爲すべく以て佳人座右の友と爲すべし





著君茗醉井河

次 目

頭一都の七〇新  
 致會物八〇體  
 詩の語年詩の  
 語詩葉詩詩の  
 解〇〇〇詩發  
 釋詩熟西壇芽  
 の〇洋〇〇〇  
 用肉の現〇〇  
 語〇物時革  
 〇七語詩新  
 詩五詩詩〇  
 のと〇壇〇初  
 朗五劇〇期  
 讀七詩史〇  
 〇〇〇詩七  
 歐自生〇五  
 洲由〇詩調  
 近の死と  
 代詩戀全  
 形〇〇盛  
 人〇〇話  
 傳詩自〇〇  
 〇言然創  
 鼈文〇意

新體詩作法

全一冊洋裝中判  
紙數三百二十頁  
正價參拾五錢  
郵稅六錢

著君袋花山田

次 目

〇▲評す〇文▲總  
 抒附〇る新〇論  
 情錄作各派美〇  
 詩〇例要和文〇  
 と事▲素〇と〇  
 自然の說漢新  
 主義人生法脈詩  
 ▲露〇〇〇〇  
 鼈頭骨論文文  
 美なる經〇法  
 文描〇洋〇情  
 摘寫と文美緒  
 句〇觀脈文と  
 集所察〇組〇  
 謂〇現立〇〇  
 新描今〇〇美  
 派寫の美今〇  
 に〇作文の美  
 就結歌に美  
 き構略要文生

美文作法

全一冊洋裝中判  
紙數參拾五頁  
正價金參拾五錢  
郵稅六錢

—(行發館文博)—



著君雨綠藤齋

あられ酒

觀想精緻文章研練而して一種警拔の妙を有するものは是れ  
 雨先生の文にあらずや今先生が新興の小説及び隨筆を載  
 して以て一冊を爲す社會百般の現象は悉く捉へ來て言々句  
 々人の肺腑を刺し喜笑怒罵筆に隨て紙面に飛躍す請ふ一讀  
 して此言の妄ならざるを諒せられよ

全一冊洋裝袖珍上製  
紙數四百六十五頁  
正價四拾五錢  
郵稅六錢

著君月桂町大

大絃・小絃

大絃急雨の如く小絃私語の如しとは、琵琶の  
 聲のみならんや、桂月先生の此書、才氣潑瀾  
 筆力縱横、以て普通文の模範とすべく、以て  
 作文の指南とすべし

全一冊洋裝袖珍上製  
紙數四百二十頁  
正價四拾六錢  
郵稅六錢

—(行發館文博)—



大和田建樹先生著書目錄

▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲	▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲	▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲	▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲	▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲	▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲	▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲
謠 曲 評 釋	謠 曲 文 粹	日 本 歌 謠 類 聚	日 記 文 範	文 章 組 立 法	書 簡 文 作 法	作 文 寶 典
全 九 冊 二 千 頁	全 一 冊 四 百 七 十 頁	全 一 冊 一 千 頁	全 一 冊 三 百 六 十 頁	全 一 冊 三 百 八 十 頁	全 一 冊 三 百 八 十 頁	全 一 冊 一 千 七 百 二 十 頁
大 判	袖 珍	中 判	中 判	中 判	中 判	上 製
一 冊 金 參 拾 五 錢	正 價 金 參 拾 五 錢	小 包 一 冊 金 六 拾 錢	正 價 金 參 拾 五 錢	正 價 金 參 拾 五 錢	正 價 金 參 拾 五 錢	正 價 金 參 拾 五 錢
郵 稅 一 冊 六 錢	郵 稅 金 六 錢	郵 稅 金 六 錢	郵 稅 金 六 錢	郵 稅 金 六 錢	郵 稅 金 六 錢	郵 稅 金 六 錢

發兌元東京本町博文館

岡本



